

すあろ初

۲۰

すうじうちぬき 数字打拔器「名」英
Cheque perforator」をさくばあふれたあ
に同じ。

すうじけいすう 数字係数「名」(数)すう
けいすう(数係数)に同じ。

すうじつ 数日「名」四、五、六、日。
すうしん 嵩岑「名」高きみね。

すうしん 崇信「名」崇の字の音、正しく
はじゅう 崇敬して信仰すること。

すうしん 崇親院「名」崇の字の音、
正しくはじゅう 平安朝の時、藤原氏が、京
都の東五條京極に設けて、その一門の子女
の因窮者を收容せし所。貞觀二年藤原其
相(公)の創設に係る。

すうしや 趨舍「名」(舍は舍(き)止むる
義。趨の字の音、正しくはじゅう)その方にむ
かふと、むかはぬと、出處進退、向背。

すうしやう 樞相「名」すうみつんきやう
(樞密院議長)の異稱。

すうじゅう 趨從「名」趨の字の音、正し
くはじゅう 馬に乗りて従ふこと、又その人
馬上の供。

すうじゅう 蕞菽「名」まぐさと豆と。
すうじゅう 數術「名」じゅうすう(術數に
同じ)。

すうしゆん 崇峻「名」崇の字の音、正し
くはじゅう 山などのたかくけはしきこと。
高峻。

すうしよく 崇飾「名」崇の字の音、正し
くはじゅう 尊げにかざること。

すうす 誦す「動」誦他「す」(誦す)の音便。
「古語」其御前に、人々多くつどひ居て、
物語り、よきあしきにくきところなどを
ぞ定めいひしうひずうじ。

すうす 鼻息「名」鼻の細く烈しきさま。
「すうす」に同じ。目隙間などより風の吹
入るさま。

すうす 鼻「名」音聲の鼻にかかるさま。
すうす 言葉「名」東北
邊の人の用ふる訛り言葉。音聲すべて、鼻
にかかりてずの音、ことに耳だつ。「星。
すうせい 樞星「名」北極星中の主要なる

すうせい 數世「名」五六世内外ほどの
世代。

すうせい 趨勢「名」趨の字の音、正しく
はじゅう 向ひおもむくいきほひ。世上のな
りゆき。

すうせう 蕞菽「名」草を刈る人と柴を
採る人。身分の賤しき者。十聖
人は蕞菽にはかるといへり。「僧」。

すうせう 趨走「名」をさなき年頃の僧。小
はじゅう はしりおもむくこと。

すうた 數多「副」あまた。多く。多數。
すうた 數代「名」子孫時代の五六回前
後ほど重なりたること。すだい。

すうた 素語「名」樂器を用ひず、ただ扇
拍子のみにて諸曲をうたふこと。

すうち 數値「名」(數)英 Numerical val-
ue」代數中の或文字が代表する數、又その
文字を數に直して得たる數。例へば、
「二」なるときは、2の數値、5は5の數
値にして、10の數値は10、100の數
値にして、1000の數値は1000、なる
類。

すうちく 樞軸「名」物事の運轉作用の中
すうちく 樞軸關節「名」(骨
くわいてんくせんせつ)廻轉關節に同じ。

すうちやう 蕞場「名」まきは。牧場。
すうちやう 數重「名」幾重にもかさなる
こと。「數重の山」。

すうちやう 數通「名」書狀又は文書の五六
通前後なること。

すうしん 崇傳「名」(人)禪僧。俗姓は一
色、足利氏の名族。名は以心。南禪寺の長
老。金地院の開山。徳川家康、秀忠家
光の三代に近侍して、天海僧正と共に幕府
の密議に參し、圓照本光國師の號を勅賜せ
られ、寛永十年寂す。年六十五。

すうしん 崇徳館「名」崇の字の
音、正しくはじゅう 越後國古志郡長岡殿町
に在りし舊長岡藩の學校。文化五年藩主
牧野忠精の創立。

すうしん 首陀羅「名」すだ首陀に同じ。
すうしん 數人「名」三、四、五、五、人。すに

すうしん いちざい 數人一罪「名」(法)次
すうしん きようはん 數人共犯「名」(法)
犯罪の主體が二人以上なる場合。數人
一罪。

すうねん 數年「名」四、五、六、年。
すうねん 趨拜「名」趨の字の音、正しく
はじゅう (拜趨)に同じ。

すうはい 崇拜「名」崇の字の音、正しく
はじゅう あがめたとぶこと。しゅうは
い。そうはい。歸依。

すうはり 數犯「名」數回の犯罪。前科數
すうはり 數「名」數回となるさま。しとや
かにうごくさま。すうわり。穂新録本、花
の粧ほつそりすうはり、柳の間の廊下傳ひ、
人の中おめ摺足は」。

すうび 崇美「名」崇の字の音、正しく
はじゅう けだかく美しきこと。

すうび 樞府「名」すうみつん(樞密院)の
異稱。

すうぶ 肉汁「名」(英語)「名」動物の肉
又は骨、或は食料植物の種子などを煮出し
て製したる汁。西洋料理等に用ふ。そつぷ。

すうふく 崇福寺「名」崇の字の音、正
しくはじゅう しがた(志賀寺)に同じ。

すうふく 崇福寺「名」崇の字の音、正
しくはじゅう しがた(志賀寺)に同じ。

すうふく 崇福寺「名」崇の字の音、正
しくはじゅう しがた(志賀寺)に同じ。

すうふく 崇福寺「名」崇の字の音、正
しくはじゅう しがた(志賀寺)に同じ。

すうふく 崇福寺「名」崇の字の音、正
しくはじゅう しがた(志賀寺)に同じ。

すうふく 崇福寺「名」崇の字の音、正
しくはじゅう しがた(志賀寺)に同じ。

すうふく 崇福寺「名」崇の字の音、正
しくはじゅう しがた(志賀寺)に同じ。

使と改稱す。
すうみつ 樞密大使「名」太
政官内の正院の職員。樞密大使を補佐す。
明治四年八月に設置し、同年八月に樞密大
史と改稱す。

すうみつ 樞密顧問「名」樞密院に
屬し、天皇陛下の諮詢したまふ重要な國務
を審議して答へ奉る憲法上の機關、但し施
政上には干渉することなし。

すうみつ 樞密顧問官「名」樞密院を組織して、樞密顧問の職を行ふ親
任官。元勳及び國務に練達せる四十歳以
上の者を任ぜられ、東京在住の成年以上の
皇族男子及び各省大臣は、その身分上又は
職權上より、又この地位を有す。

すうみつ 樞密少使「名」太政官内
の正院の職員。機密の文案を草する奏任
官。明治四年七月に設置し、同年八月に少
内史と改稱す。

すうみつ 樞密大使「名」太政官内
の正院の職員。機密の文案を勘し、位記官
記を掌る助任官。明治四年七月に設置し、
同年八月に大内史と改稱す。

すうみつ 樞密院「名」支那唐宋時代
の官衙の名稱を襲用したるもの。天皇の
諮詢したまふ重要な國務を審議する最高
の顧問府。現制にては、議長一人、副議長
一人、顧問官二十八人、書記官長一人、書記
官三人を以て組織す。

すうみつ 樞密院議長「名」樞密院會議の首席親任官。樞密院に關する
一切の事務を統管し、樞密院より發する一
切の文書に署名するを職とし、皇族會議に
參列する權利を有す。

すうみつ 樞密院副議長「名」樞密院會議の首席親任官。樞密院に關する
一切の事務を統管し、樞密院より發する一
切の文書に署名するを職とし、皇族會議に
參列する權利を有す。

すうみつ 樞密院顧問官「名」樞密院を組織して、樞密顧問の職を行ふ親
任官。元勳及び國務に練達せる四十歳以
上の者を任ぜられ、東京在住の成年以上の
皇族男子及び各省大臣は、その身分上又は
職權上より、又この地位を有す。

すうみつ 樞密少使「名」太政官内
の正院の職員。機密の文案を草する奏任
官。明治四年七月に設置し、同年八月に少
内史と改稱す。

すうみつ 樞密大使「名」太政官内
の正院の職員。機密の文案を勘し、位記官
記を掌る助任官。明治四年七月に設置し、
同年八月に大内史と改稱す。

すうみつ 樞密院「名」支那唐宋時代
の官衙の名稱を襲用したるもの。天皇の
諮詢したまふ重要な國務を審議する最高
の顧問府。現制にては、議長一人、副議長
一人、顧問官二十八人、書記官長一人、書記
官三人を以て組織す。

すうみつ 樞密院議長「名」樞密院會議の首席親任官。樞密院に關する
一切の事務を統管し、樞密院より發する一
切の文書に署名するを職とし、皇族會議に
參列する權利を有す。

すうみつ 樞密院副議長「名」樞密院會議の首席親任官。樞密院に關する
一切の事務を統管し、樞密院より發する一
切の文書に署名するを職とし、皇族會議に
參列する權利を有す。

すうもく

明縣にある島。楊子江口に當る。明時代に倭寇の據りしところ。

すうもく 數目【名】數のみだし。

すうらん 嵩巒【名】高き山。嵩山。

すうり 酢賣【名】酢を賣りある人。昔

蓋えびす講酢賣に袴きせにけり。「理

すうり 數理【名】數學の理論。算數の道

すうり 數理學派【名】英 Math-

ematical school 數學の研究方法を他の學

問の研究に應用する學派。

すうり ちりちり 數理的地理學【名】

「英 Mathematical Geography」でもんちりがく

（天文地理學に同じ）。

すうり やう 數量【名】まぐさと兵糧と。糧

すうろ 鄒魯【名】孟子の生地なる鄒と

孔子の生地なる魯と。鄒は今の山東省

（○）州府鄒縣。魯は今の山東省地方にあり

し古國にて、孔子の生れしは、今の同省

州市曲阜縣。きふふ（曲阜）參照。孟子

と孔子と。孔孟（鄒魯の學）

すうろ ぐくは 鄒魯學派【名】「前條を見

よ」支那哲學にて、孔子孟子の系統に屬

し、人倫道義を説く一派（判楚學派に對

して）。

すうろんは 數論派【名】（佛）すろんは（數

論派）を見よ。

すうわり 鏡【名】すうはりに同じ。浮世風呂ほ

つそりすうわり柳腰、とさへいふぢやあね

えか」

すうろん 阪遠【名】「阪の字の音、正しく

はる」かたよりて遠きこと。遠きゐなか

へんすう。へんび。

すうろし 巢下【名】鳥の巢よりその雛を

取りおろすこと。すこおろし。狂言鳥出伏

「山へ參りました時、巢のすおろし、致した

と申しましたおろし、持統天皇御法さあ今皆

こそ山賊の巢おろし、と小うなづきて」

すか 數箇・數個【接頭】すか（數箇）に同

じ。「すか月」「すか所」

すか【名】すかまたの略。曾我孫子朝經所集

「名古平起上り、蹴倒さうとするを、切平身

すが

うとして「日目的の外なること。

すかを喰はす【句】「すかまたを喰は

すに同じ」。

すかを食ふ【句】「徒矢（を）食ふ」に同

すが 菅【名】「すげ（菅）に同じ。（古語）萬

葉高山の岩ほに生ふるすがの根のねもこ

るころに降りおく白雪」【すがざり（菅鳥）

の略。（古語）

菅の村鳥【句】「うち群れたるすがどり。

（古語）萬葉などの海の荒れたる朝の

鳥かく風にかたよるすがの村どり」

菅の木の禊【句】「菅にて、人形を造

り、それに自身の穢を移してはらひよく

ること。

すが 認【名】かせ持【句】に同じ。

すが【名】砂の集りて小高くなりたる處。

（東國の方言）東海邊所記東國の方國に、

砂の集りて小高きをば、すがといふなり」

【こほり（氷）を云ふ。（奥州の方言）

すが 須賀【名】（地）出雲國大原郡海潮

村にある地。上古、素戔鳴尊の宮を建て

て、櫛稻田姫を娶り給ふところ。かの「八

雲立つ」の歌はこの地にて詠じ給ひきと

いふ。

すか 女（英語）【名】女の洋装に著くる、

袴のごときものの裾。

すか あれと（英語）【名】深紅色。狙

狙。狙狙の布。紺衣。西洋繪具

の。花やかなる赤色。亞鉛の鹽化物と

酒石英とを洋紅（紅）に作用せしめたるも

の。紺紅色を染著せしむる一種の酸性染

料。【紺色に同じ】

すが いと 総絲絛【名】かせい（絛）に同じ

すかう 速香【名】速かに燃えつくる下等

の香。下學。速香、スカウ、惡香速消盡、

故云「速香也」

すかうと（英語）【名】高速力を主とする

一種の軍艦船。三等巡洋艦と驅逐艦との間

にある如き構造をなす。

すがうの やしろ 須河社【名】すがふを

すがき

した奴等、素頭打碎く、怪我なされな

すががき 清掻菅搔【名】「唱歌なしに和

琴を彈すること、又あらへ彈くことなるべ

しとも、すがは雙の音、即ち雙六（の）のす

に同じくして、片搔に對する語なりともい

ふ。（古語）源氏同じすががきのねに、萬

のもののねこり通ひて」【和琴より

轉じたるものといふ】三味線の一の曲。

歌なくして、唯掻を彈するもの。【みせ

がき店菅搔の略。芝居の鳴物の一。

遊女屋の幕明き、又は遊女の出入などに用

ふるもの。

すががき 清掻く菅搔く【動四自】すが

がき【名】をなす（古語）源氏あづまをすが

がき【名】菅笠【名】すががき（菅笠）に同じ。

（古語）萬葉みしむみいまだ苗なり時ま

たはきずやなりなみしむすががき」

すががき 菅笠日記【名】書明和九

年本居宣長が吉野山に花を見し折の擬古

體の紀行文。二卷。本居宣長全集に收む。

すががき 菅笠小笠【名】小きき菅

笠（古語）萬葉いろかなつるすががきを

がき我うなげける珠のなつるを」

すががき 須賀川【名】（地）岩代國岩瀬郡に

ある町。阿武隈（河）川の西岸。郡役所を置

く。中世二階堂氏の居りし所。

すがき 簀簀【名】「簀を構ふ」きたる處の

義。床に設けたるすのこ。（古語）夫木、山

がつのすがの床のしたさえて冬きにけ

りと知らせがほなる」

すがき 寶垣【名】竹にて簀の如く編みた

る垣根。（古語）散木、心あひの風ほめか

せ八重す垣ひまなき思にたちやすらふと

すがき 酢牡蠣【名】牡蠣を酢に浸したる

食品。

すがき 巢搔【名】「巢を構（く）くを見よ」

蜘蛛の網を懸ること、又その網。いがき。

（古語）拾遺秋風は吹きな破りそわが宿

のあはらかくせるものすがきを」

すがき 素書【名】畫を彩色を施さずにか

すかこ

に同じ。詞花、萩の葉にすがく絲をもささ

がにはたなばたとやけきはひくらん」

すかこき【名】（植）だうぐんさ（道灌草）

に同じ。

すがこる 巢隠る【動下二自】巢の中に隠

る。（古語）源氏すがくれて數にもあらぬ

雁の子をいづかたにかはとりかくすべし

すがくあん 修學院【名】じゆがくあん（修學

院）に同じ。

すがけ 素懸・廉懸【名】鏝の絨（じ）の一。

絲目を粗くし、所所に二筋づつ並べて綴

ること。荒目（じ）。

すかげん 酢加減【名】調味の際、酢の分量

を加減して用ふること。

すがけをぞし 素懸絨【名】鏝の絨を素懸

にしたるもの。あらめをぞし。

すがこも 菅薦【名】菅にて編みたるこも。

さふ（十編）さふ利府參照。夫木、みちの

くのとのすがこもなふには君をしな

してみふにわが寝ん」

すかし 透【名】すかすこと。【間のす

き通りて見ゆるやうにすること、又そのと

ころ。參照白銀のいかめしきほととぎし、

七草の御粥入れて、すかしの長櫛に据ゑて

奉れたまへり。【すかし（透尻）の略（俚

語）】（四相撲（の）の手の一。相手に上を越

させて投ぐること。

すかし あふき 透扇【名】すきあふき（透扇）

に同じ。百日會衆すかし扇にたう扇あふ

きあふき」

すかし かり 透織【名】細紗の如く、極め

て薄き紋織の絹布、ベル又は帽子等の装

飾用に供せらる。

すかし けた 透形【名】透間のあるやうに

したる模様。若風俗おとし懸のはね簪

（さし）、すかし形のさし櫛」

すかし けは 透革【名】質薄き革の、表面に

彩色模様を施し、これを透し視れば中に

繪畫のあらはれ見ゆるもの。

すかし けまへ 透構【名】すがまへ（透構）

すかし

おえういあ

こけくきか

そせすしさ

とてつちた

のねねにな

ほへふひは

もめむみま

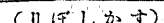
よめむみま

よめむみま

るれるりら

ををわわ

あたらずかしめ」
すかしもん 透門【名】（貫）（キス）などを離し



きたるもの、身のけがれを祓ひ清むるに
用ふ。一説に、清麻なりと。祝詞、天津菅原

すかた。一、字圖「名」「姓」を「姓」に
通りに作る圖。たてづ。おこしづ。おこし
づ。まてゑづ。

ひわたりなむ」
菅貫・菅拔【名】ちのわ(茅輪)に

すがぬく

同じ。拾玉、夏はつるけふのみそぎのすがぬきをこえてや秋の風ぞたつらん」
すがぬく 菅貫く菅抜く【動四他】すがぬきを首にかく。みそぎを行ふ。「古語」夫、身はすててひとがたとだに思はぬを何にすがぬくみそぎなるらん」
すがぬく 菅縫縫縫【名】小袖の紋所などを、すがぬくといふこと。

すがぬま 菅沼【名】菅の生ひたる沼。

すがぬま 菅沼【名】姓氏の一。美濃源氏土岐氏の支流。三河國額田(今)郡菅沼の地を領す。一説に、正長年間三河國の人菅沼信濃守俊治足利氏に叛し、土岐新三郎定直これを討伐し、その功により、菅沼の地を領し、氏を菅沼と改む。

すがぬま 菅沼 菅沼斐雄【名】(人)歌人。通稱は改之進又は頼母(号)。斐雄また綾雄文雄なども記せり。備中國の人。桂國の門に學び、名聲あり。天保五年歿す。年四十九。

すがぬま 菅沼 菅沼周桂【名】(人)攝津國の鐵鑪。名は長之。鐵鑪の復古を唱へ、世人その術を稱して、古方鐵といふ。

すがね 素鐵【名】鍛へぬ鐵。生鐵。「古語」字鳥くろがねといふ物の、すがねといふほどなるをとりて。

すがね 菅根鳥【名】(動)き(雄子)の異稱。「古語」秘藏抄「あはれにも子を思ふとてすがねどり野べを焼く火に灰となりぬる。すがね鳥とは雄なり」

すがのあら 須賀荒野【名】(地)信濃國東筑摩郡に屬する野原。梓(サハ)川と奈賀井川との中間に位す。一説に、同國伊奈郡伊賀良(今)庄菅野村なりと。蕨葉(ワサキ)のなるすがのあら野に時鳥なく聲きけば時過ぎにけり」

すがのせん 菅山【名】因幡國八頭(今)郡と但馬國美方(今)郡の境にある山。高き五四四五尺。輝石・安山岩及び火山岩より成る。奇岩聳立して、喬木繁茂し、風景佳なり。山下に温泉湧出す。

すがのね 菅根の「枕」【名】菅の根は長く茂く入亂れて、引抜くとき、絶えやすきも

すがのみ

のなるより、ながく(長し)みだる(亂る)にかけていふ。蕨葉ほのかにも君をあひ見てすがのねのながき春日を戀ひわたるかも」
同、否といはばはひめやわがせすがのねの思ひみだれて戀ひつつもあらん」
【山菅の根には、塊根状の物數多あるより、根も凝るの意にて、ねもろ(懇)にかけていふ。蕨葉すがのねのねもろころにてらす日もほさむやわがそて妹にあはずして」

すがのみ 菅須賀宮【名】神代に素戔鳴(スサナヒ)尊の櫛稻田姫を娶りて、出雲國須賀に營みたまひし宮殿が(須賀參照)。
すがのむら 菅の村鳥【句】すが(菅)の條下を見よ。

すがのやま 菅山【名】(地)越中國にある山。蕨葉心にはゆかふときなくすがのやますがのくのみや戀ひわたりなむ」

すがはら 菅原【名】菅の生えてある原。蕨葉「またまつく越のすがはらわれからて人のからまくをしきすがはら」
すがはら 菅原【名】(地)大和國生駒(うま)郡伏見村及び都跡(うま)村に互りし地。菅原氏の故里。今は伏見村の大字となれり。古く「いざここわが世はへんんすがはらや伏見の里の荒れまくもをし」

すがはら 菅原【名】(人)姓は朝臣と宿禰とあり。大保度(大保)より出づ。姓は朝臣と宿禰とあり。大保度の事。五世の祖野見宿禰垂仁天皇の大喪の事を掌る。子孫代京都菅原伏見道に居り、大保度九世の孫土師(うま)宿禰古人、光仁帝の朝、土師の姓を改めて菅原となる事を許さる。古人の子道長桓武の朝、菅原の朝臣を賜はる。道長の曾孫道真文章忠節を以て家を興し、世世文學の家となる。高辻五條東坊城唐橋有元等の支流あり。

すがはら 菅原清公【名】(人)文學者。文章生より出身して、文章博士攝津但馬の權介等を經、會て唐に使用して、徳宗に見ゆ。凌雲集文章華麗集等の撰に與る。承和九年歿す。年七十三。

すがはら 菅原櫛【名】安永中、平賀源内の案出せし櫛。

すがはら

すがはら 菅原是善【名】(人)文學者。清公の次子。文章生より出身して、從三位參議に進む。文徳實錄の撰に與り、元慶四年歿す。年六十九。
すがはら 菅原 菅原道真【名】(人)菅原傳授手習鑑(うま)淨瑠璃の。菅原道真一代の事蹟を仕組めるもの。竹田出雲三好松洛等の合作。

すがはら 菅原寺【名】すがはら(菅原)を見よ。大和國生駒(うま)郡都跡(うま)村にある法相宗の寺。本尊は阿彌陀如来の坐像。養老年間、僧行基の創建。本尊嘗て光明を放ちしより、聖武天皇これに喜光寺の勅號を賜へりと傳ふ。久しく荒廢して、今纔かに存する金堂は、特別保護建造物の一たり。

すがはら 菅原 菅原伏見西陵【名】安永天皇の御陵。大和國生駒(うま)郡伏見村大字蓬萊にあり。

すがはら 菅原 菅原伏見東陵【名】垂仁天皇の御陵。大和國生駒(うま)郡都跡(うま)村大字尼ヶ辻にあり。

すがはら 菅原 菅原文時【名】(人)文學者。古人(うま)六世の孫。高祖(うま)の子。村上天皇に仕へ、文章博士兼、尾張權守となる。博覽強記詞藻豐富にして、名聲當時に鳴り、大江匡衡源為憲等、皆詞賦の添削を請へりといふ。世に菅三品(うま)と稱せらる。應和四年歿す。年八十四。

すがはら 菅原 菅原道真【名】(人)政治家且文學者。參議是善の子。小名は阿呼、字は三。博識多才詞藻豐富にして、最も詩に長じ、典故に精し。宇多醍醐の兩朝に歷任し、右近衛大將右大臣に進みしが、延喜元年藤原時平に讒せられて、太宰權帥(うま)に貶せられ、同三年配所に薨す。年五十九。後世その徳を景慕して、菅公又は菅丞相といふ。てんじん(天神)參照。

すがはら 菅原 菅原焼【名】土器の一。菅原焼天満天神社の境内にて焼きしもの。その色艶色(うま)を呈す。

すがひ 番【名】つかひ番の轉。

すがひ

すがひ 醉貝【名】腹足類に屬する小さな軟體動物。介殼は不規則なる扇球形をなし、瘤狀の隆起を有し、表面は汚灰色、内面は眞珠光澤を呈す。殻口圓く横(うま)あり。これを醋中に入ると、その石灰質なるがために、溶解して回轉するに、兒童の玩具とす。貝類のむきみを醉にひたしたる食品。貝の醉の物。【(動)さ(え)】(榮螺)に同じ。國姓爺君は醉貝と吸ひつけと。

すがひ すがひ 次次【名】つぎつぎ。次次第【古語】山嵐しだり吹く萩のふるえに風かけてすがひすがひに小庵なくなり」
すがひ すがひ 次拍子【名】すがひは前條の語の意。交互に奏する拍子。【(動)さ(え)】同時。その途端。本年島嶼音高く切りて放つ。手ごたへすがひやううしに聞えて胃のまつからより肩間の膈を碎きて」

すがひ すがひ 次儲【名】すがひはすがひ(次)の意といふ。兩者の間に立ちて、兩方より利益を得ること。春花五大方この金が、斯うと、兩方つかひがすがひまうけうまい」

すがひ すがひ 犬追物【名】犬追物(うま)の時、向ひより馬手(うま)の方へ斜に來る犬の左を射ること。又馬手先より弓手(うま)へ斜めて來る犬の左を射ること。

すがひ すがひ 次々【名】次々。追ひつ。たぐふ。四敵す。「古語」源氏「かういふさはいはひ人の腹の後がねこそ、またおひすがひぬれ」

すがひ すがひ 行きすがひ【名】加賀國江沼郡福田村に鎮坐せる國幣小社。祭神は彦火火出見(うま)尊豐玉姬(うま)尊。草薙不合(うま)尊。須河社(うま)。

すがひ すがひ 菓換【名】菓を交換すること。【(動)さ(え)】菓を交換すること。【(動)さ(え)】菓を交換すること。【(動)さ(え)】菓を交換すること。

すがひ すがひ 化粧【名】化粧を施さず、また酒氣を帯びざる等の類。すめん。文武五人男「風が氣盛にはらはらと、素顔にかかる吹

すかばり【名】(英:capillae)【名】(鐵)正方晶系に結晶する硫酸鐵物。玻璃光又は眞珠光を有し、無色乃至白綠紅色の各種あり。

すかばら【名】(古語)金葉、夜とともに玉散る床のすがまくら見せばや人によるのけしきを。

すかまた【名】あてのはづること。あてがひ。すか。浮世床世間體は立派に見せかけて、内證へ廻つて見ると、大すかまた、すはといふ時の一向役に立たず。

【見當ちがひにて、間の抜けたること。】とんま。どち。へま。浮世風真の拳といふものは、五だの七(や)だのといふは大すかまたさ。

すかまたを喰はす【句】わざと相手の豫期に違ふやうにす。相手の當のはづるやうにす。すかを喰はす。狂言歌切形「仕くはせをて置いてな、あいつが狂言の時、すかまたを喰はせやう」

すかみ【名】素紙子【名】かみこ(紙子)に同じ。東海通所製素紙子一重、帷子一枚、つるてんの獨身。

すがみの菅蓑【名】菅の葉にて編みたる蓑。今國姓爺朱一貴紫蓑女、旅の菅蓑。

すがむ【名】(動)四目【名】すがめとなる。盛衰此目のすがみたりければ、とりなしはされける。

すがむ【名】(動)下二他【名】すがみたるやうに片方の目を閉じて物を見る。「嬌」しめつつがめつ打眺め。

すがむし【名】菅蓑【名】菅にて編造りたる蓑。後藤兼竹の伏見の里のすがむしるねにのみきてひとりかもねん。

すがむら【名】菅村【名】菅のむらがりにはえである所。【風俗】の歌の曲名。

すかんく【名】(英:canine)【名】(動)食肉類に属する哺乳動物。亞米利加にのみ産し、形状性質共に(犬)に類し、大いさやこれより大なり。背部の毛は著しき白條を呈し、肛門の附近に一腺ありて、敵の攻撃を受くる時、惡臭を放ち防禦す。

すかんこ【名】(植)かたばみ(酸漿草)【名】を云ふ。【奥州の方言】

すかんひん【名】素寒貧【名】極めて貧乏なること、又その人。一文なし。

すかんぼ【名】(植)すいば(酸模)を云ふ。【東京の語】【いたり虎杖】に同じ。

すかんぼう【名】(植)前條に同じ。

すかめ【名】素瓶【名】素燒の瓶。「る瓶。」

すかめ【名】酢漿【名】酢を入れたる瓶。酢を造るすかめ。【古語】萬葉、宇治川におふるすかめを川はやみとらて來にけりつとにせまし。

すかめ【名】(地)武藏國北豐島郡【名】都にあり。中山道の入口、即ち東京市本郷より板橋に至る道に當る。その一部は舊て東京市小石川區に編入せられて、原町及び羽籠(の)町等となり、殘部は、今、小石川、本郷の兩區と人家連接せり。

すかめ【名】菅紋【名】(紋)すがいと【名】すかや【名】(地)常陸國那珂郡にあり。那珂川と久慈(の)川との中間なる臺地に在りて、棚倉街道ここを通じ、那役所あり。

すがや【名】清やか【名】すがすがしき山。清じ。【古語】梨佐御庄御庄の券などを、すがやかとたてまつりてはてぬ。

すがや【名】清山【名】すがすがしき山。清くうはしき山。萬葉、耳なしのあをすが山はそともの大みかどによろしなへかむさびたり。

すがや【名】洲賀山【名】おすがに同じ。【楊弓大弓の略物】の隠語。

すがや【名】接尾【名】始より終まで。限りのところまでなどの意。ことごとく。萬葉、このよすがにのいもねずにつけふしめらに戀ひつづ居る。【なだら。】について。

「ゆきすがら心もゆかず別れちはなほふるさとの事ぞかなしき」丹波興作「道中すがらも、用あらば」

すがら【名】素硝子【名】すりガラス。曇ガラなど、對して、透明なるガラス。

すがら【名】樽蒲【名】ちよは樽蒲に同じ。

すがら【名】脈案【名】鑛脈内の空處。かさあな。【刀物にて、たやすく滑なく切りたるさま。】すか。すか。

すがら【名】裸藏【名】(動)すがる(裸藏)を云ふ。【奥州の方言】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

すがら【名】(網)の如く編めるところ。【一説に、數珠を穿る網の袋。後撰】ある法師の：數珠(の)すがりを落しけるを。【網の袋。又法螺貝にかくる網。】

起す)に同じ。六帖あらし田をあらすきかへし返しても見てこそ止まぬ人の心を

すきかまへ透櫓[名]城の口より家も見え又土居も櫓を振って内部の見ゆる築城法。すかしがまへ。

すきがみ梳髪[名]女の髪を結び方の一。前髪のみを分けて取り、残は髪髻などにすきに結ぶもの。假結とす。

すきかみきり杉天牛[名]動[鞘翅目]類に属する昆蟲。天牛[鞘翅目]の一種。各地に産す。體は黒色にして。幼蟲は杉樹を食害す。

すきから鋤柄[名]鋤の柄(一)。

すきからびつ杉唐櫃[名]杉の材にて造りたる唐櫃。蓋重大きなる杉唐櫃のありけるを、うしろを昇きて遺戸口に置きて

すき透木[名]茶の湯にて、釜を爐風爐の)に掛くるに用ふる二本の木。五徳を用ひざる時に限りて用ふる法に定はなれど、爐に用ふるものは大きく、風爐に用ふるは小さく、朴(一)桐などに造る。

すききらひ好嫌[名]好むことと、いやがることと。えりきらひ。すきぶすき。

すきぎり割切[名]割ぐが如くに薄く切ること。字造この芋をむきつつ、すきぎりに切れば

すきぎれ透切[名]すきて見ゆるきず。すきぎれ漉切[名]紙を漉き造るとき、損じて透の生ずること、又その紙。抄紙。

すきくさ大麻[名]植[種]あさ大麻に同じ。すきくさ梳櫓[名]髪を油垢をすき去るに用ふる、齒の極めて細密なる櫓。竹にて造れると木にて造れるとあり。密篋子。女殺油地獄。女は髪より、形より心の垢をすきぐしや

賀茂のみあれのすきぐるまかざりてわたる世となりけけん

すきくれ杉櫓[名]杉の材木。杉のくれ。古語。傳傳、われならぬ人はまつとも杉櫓はあはれをすててひく方によれ

すきげた杉下駄[名]杉材にて作りたる下駄。

すき透櫓[名]蠶の上簇の前に、食を絶ちて、やや透明となりたるもの。

すきこ梳子[名]しなき(下梳)に同じ。

すきこけ杉藪土馬騾[名]植[種]藪類の一種。陰地に簇生す。莖と葉との二部より成りて、根無く、ただ根状毛ありて、地に著生し地上莖は直上して、一二寸に達し、細葉密生し、地下莖には褐色の枯葉生ず。雌雄の別ありて、別別の株に雌器もしくは雄器を生じ、受精後、雌株は葉間に長柄を生じ、その頂に小囊を著け、中に緑色の胞子を有す。

すきこち好心地[名]色好みの心。(古語)源氏若きほどのすきこちには、この人をとまりにとおもひとどめ侍らず

すきこころ好心[名]色好みの心。(古語)源氏あながちなるすきこころは、更にならぬを。風流なる心。おもむきある心。凡鶯小鍋かひて冬の夜を待つすきこころ

すきこころのいはひ逾越節[名]基[英]Passover又Tasch又Taschユダヤ人の國祭。その三大節の一。ユダヤ人の祖先がエジプトにありて困難を嘗め、後つひに神の恩恵によりて、エジプト王の壓制より脱出せしを記念せんがために行ふもの。

すきこみ好好[名]物ずきのしわざ。色好みのしわざ。源氏いとかかるすきこどもを、末の世にも聞きつたへて

すきこむ漉込[名]すきいれがみ(漉入紙)との重言。すく。好む。すきこむ漉込[名]すきいれがみ(漉入紙)に同じ。おにすきはがみ(見杉原紙)に同じ。すきこむ漉込[名]紙に文字または

模様などのあらはるやうに、もしくはその中に木の葉などを入れて漉く。

すきこみ透聲[名]洩れすくやうなる聲。盛衰すき聲のしけるをあらためんとて

すきさいばう杉材棒[名]杉丸太の棒。杉の木の楓棒。大平製杉材棒突かせて差向けたらんに不足あるまじ

すきさう杉障子[名]すきさうじ(杉障子)の約。秋後、物置、書院の杉障子よりはるかに見いだしたるに

すきさか杉坂[名]地。山城國葛野(一)郡小野郷(一)村の大字。鷹峯(一)の通路。一名、長坂。播磨國佐用(一)郡江川村より美作國英田(一)郡讚岐(一)村に通ずる山路。因幡國に赴く別路なり。見島高德が帝駕を追ひ奉りし舊址。太平記高德美作の杉坂こそ究竟(一)の深山なれ、ここに待ちたてまつらんとて

すきさき鋤先[名]鋤柄の先に附くる、刃のある金具。

すきさし過指[名]鯉の腹の方の第五の鱗。料理の時にいふ。ことども。

すきし透字[名]文字を紙などに透かし出すこと、又その文字。

すきじこぎ透字小切手[名]商[英]Perforated cheque小切手面に記入し得べき最大金額を、打抜器を以て、透字にて打抜き、振出人をして、その金額以上を記載するを得ざらしめたもの。即ち過振(一)の有無を検する手数を省くためにす。

すきしや好者數寄者[名]ものすきなる人。風流なる人。色好み。すきもの。茶事を好むもの。

すきしやう杉障子[名]すきさ(杉戸)に同じ。題詞往來杉障子

むすきすきに

すきすき次次[副]つきつき次次に同じ(古語)源氏すきすきいとをかしげにて

すきすき杉杉[名]すきはがみ(杉原料)を云ふ。(女の語)

すきすき好好[名]ものすきがまし。すきやうらし。好事なり。(古語)源氏わがと迎へ出てもすきすきしかるべし。好色がまし。(古語)源氏すきすきしき歌がたりなども、かたみに聞えかはさせたまふつてに

すきすきに次次に[副]つきつきに(次次に同じ。(古語)源氏まをさなきなど

すきすはう透素絶[名]すきすあを透素絶に同じ。

すぎた杉田[名]地。武藏國久良岐(一)郡屏風浦(一)村の大字。横山の南二里。海に沿ひ、梅花を以て名あり。

すぎたさい杉田錦齋[名]人。すぎたけんはく(杉田玄白)に同じ。

すぎたげん杉田玄端[名]人。蘭醫。杉田立卿の門に入り、その實子成卿の義弟となりて、家を嗣ぐ。幕府の翻譯御用頭取に進む。明治維新後學士會員に列し、明治二十二年歿す。年七十二。

すぎたげん杉田玄白[名]人。蘭醫。名は翼字は子風、九幸また鶴齋(一)と號す。世世外科醫を以て小濱(一)の藩に仕ふ。前野良澤等と解體新書を著し、文化十四年歿す。年八十五。

すぎたしほり鈔出彫[名]金屬彫刻術の一。繪模様の部分のみを高く残るやうにし、その他は平に削り下ぐるもの。すきだす漉出す(動四他)すきて紙となす。すきこむ漉込に同じ。すぎたせい杉田成卿[名]人。蘭醫。名は信號は梅里。江戸の人。幕命を奉



(くばんげた)

すぎた

じて、蘭書を天文臺に翻譯し、審書調所教授となる。濟生三方、砲術訓蒙等の著あり。安政六年歿す。年四十三。

すぎたち 杉立【名】兩手と頭とを下に附け、兩足を上に揃へて逆立つこと。しかたはなし、盤を積みかさねて、その上にて僕どもが杉立したる足のうら、天井へ届きすぎたて 杉立【名】杉の木を立てる如き形の模様。

すぎたにせつせう 杉谷雪樵【名】(人)畫家。舊熊本藩士。家世世、雪谷派の畫學を傳ふ。明治二十年東京に来る。同二十八年歿す。年六十九。

すぎたばういつ 杉田望一【名】(人)俳人。伊勢國の人。初め松永貞徳の門に學び、後、荒木田守武に學ぶ。寛永七年歿す。年八十三。

すぎたりつけい 杉田立卿【名】(人)蘭醫。玄白の庶子。名は豫。錦陽と號す。小濱(?)侯に仕へ、特に眼科に志し、微毒新書瘍科新撰西洋醫原珠啓微病原新書等の著あり。弘化二年歿す。年六十。

すぎたわむ 好挽【動四自】好色がましき容子をなす。いやなるふりをなす。色めく(古語) 源氏すぎたわめん女には心おかせたまへ。過ちして、見ん人のためかたくななる名をも立てつべきものなり

すぎわゆう 杉重【名】杉のへぎ板にて造りたる重箱。流麗出世瀟灑、遣手の杉重に、櫻の名酒

すぎっは 杉葉【名】すぎは(杉葉)の音便。すぎっはら 空腹【名】すぎはら(空腹)の音便。

すぎて 梳手【名】女髮結の手傳をして髪すぎて 結手【名】網をあみて造る人。

すぎてん 主基殿須基殿須伎殿主紀殿【名】大嘗祭の時の、主基方の御殿。(悠記殿に對して)

すぎ

はやり言葉など、よき女中の一言ものたまふことにあらざぬ」郭中奇譚、俳諧はこの頃、すぎと致しませぬ」

すぎと 杉戸【名】(地)武藏國北葛飾郡にある地。古利根(杉川の左岸。船壁(22)町の北一里半。舊奥州街道の一驛。郡役所を置く。東武鐵道の一驛。

すぎと 杉戸【名】杉の鏡板を用ひて造りたる戸。花鳥など描けるものあり。すぎしやうじ。すぎさうじ。平家女護鳥、夜更けぬうち此處からと、杉戸開いて突出せば

すぎと 透燈籠【名】透かしのある燈籠。犀田越歌仙の奏置く上に、文字を透かしの透燈籠、額燈籠

すぎと 杉木賊【名】(植)いぬとく(大木賊)に同じ。

すぎと 透通梯【名】きやらがき(伽羅梯)に同じ。

すぎと 透通る 透徹る【動四自】物より透きて、前方にある物見ゆ。

すぎと 杉巴【名】紋所の一。杉の葉に似たるきさめある巴。

すぎと 剃取る【動四他】剃ぐやうに薄く取る。へぎとる。

すぎと 梳取る【動四他】櫛にて、髪を垢を除き去る。

すぎな

すぎなへ 杉苗【名】杉の苗木。

すぎなり 杉形【名】(杉)杉の木の葉えたる、形に似たるよりいふ。中央は、尖りて高く、左右に段段と遞下せる形。盛上げ又は積重ねるとききの形。金字形。ほこがた(鉾矢形)に同じ。

すぎにかは 透膠【名】常の井水にて精製したる透明なるには。支那より舶來す。黃明膠(阿膠)に對して

すぎに 剝肉【名】すぎきりにしたる肉。すぎみ。すぎ。關西の語

すぎの かみきり 杉天牛【名】(動)すぎかみきり(杉天牛)に同じ。

すぎの き杉木【名】(植)すぎ杉に同じ。すぎの さき 犁頭鯨【名】(動)さかたさめ(犁頭鯨)に同じ。

すぎの しづえ 杉下枝【名】(書)荷田(蒼生子)の和歌及び國文を輯めたるもの。二卷。

すぎの じふいじ 杉野十平次【名】(人)すぎのはるふさ 杉野治房【名】(人)赤穂四十七士の一人。通稱は十平次。もと淺野長矩の中小姓。元祿十六年死を賜はる。年二十八。

すぎの り 杉海苔【名】紅色藻類に屬する海藻。形小にして、成長したるものも三寸に過ぎず。色は紅紫色、普通一平面上に不規則なる分枝をなす。外海の岩石に生ず。

すぎの をしんじや 相尾神社【名】羽前國西田川郡西郷村に鎮坐せる神社。祭神は積羽八重事代主命。

すぎは

すぎはひ 生業【名】(過)はひの義。はひは接尾語。世を過ぐ手段。世わたりのしわざ。なりはひ。生計。活計。

すぎはむ 好む【動四自】好色らしく見ゆ。(古語) 源氏すぎはむきたるけしきあるかとはおぼしきけざりけり

すぎばら 空腹【名】胃の腑のからになりたること。腹のへりたること。くうふく。すぎばら。からばら。枵腹。

すぎばら 杉原【名】一面に杉の木のおひてあるところ。舊國興すぎばらや三輪の山べに雪ふりてけふこそ冬のしるしと見れ

すぎばら がみ 杉原紙【名】格(か)を材料として造れる紙。奉書に似て薄く柔かなるもの。鎌倉時代に、播磨國多可(砂郡杉原谷(22)村)に始めて製出す。今は主に加西(砂郡三原より出だし、また備後・伊豫等の國より製出す。小杉原中杉原あり、普通のを大杉原といひ、糊を入れたるを糊入(じ)といふ。すぎばら。すいばら。

すぎばら 杉原雲【名】杉原紙の地に、雲形の模様をうちたるもの。

すぎばら 杉原餅【名】むかし杉原紙をよくむしり、糊(か)の粉四分、糯(もち)の粉六分の割合にまぜて搗合はせ、夏の土用に食ひし餅。めぐり。寛永料理物語すぎばらもち

すぎはり しやうじ すぎはり障子【名】すぎはりは透張か障子の一種。詳かならず。或は、あかり障子か。狂言障子はかきと御出て有て

すぎびし 杉菱【名】紋所の一。菱形に杉の葉を置き、中央に幹に擬せし横畫を置きしもの。

すぎびたひ 透額【名】冠の一種。甲に月形の穴をあけ、羅(か)を張りてすかしたるもの。古男子の元服後十六歳未満の時用ひたり。周明天皇(仁德天皇)十二の冠式法の中に、人目のすぎびたひ

すぎふ杉生【名】杉の木が生ひてあるところ。すぎはら。〔古語〕拾葉あつめこしるしもあれやわが山のすぎふの窓に残るしら雪。

すぎふくろ透鏡【名】幣(ひし)を入る囊。すぎふくろ好不好【名】すぎ好むと、すぎ好まぬと。すぎきらひ。

すぎふね杉船【名】杉の材木を積める船。一説には、杉の木にて造りたる船。〔古語〕鎌倉雄野川せきりにわたすすぎふねのへなみに袖のぬれにけるかな。

すぎま透間【名】すぎたる間。ひま。すぎ。間隙。隙隙。新語古今ひとりのみぬるをならひの手にすぎまの風はいとふ夜もなし。〔意〕意ををり。ゆだん。手ぬかり。すぎ。虚。目いとま。てすぎ。ひま。

すぎま杉間【名】杉の木の間。芭蕉。風來寺に參籠して、こがらしに岩吹来るすぎまかな。

すぎまかぜ隙間風【名】戸障子などの隙間入る風。異説。隙間上る二階の隙間風、男交ぜずの火鉢酒。

すぎまこしら杉係七郎【名】(人)明治維新の功臣。長門國萩の藩士。舊姓植木。同藩士杉彦之進の養子となる。應雨と號す。文久元年竹内下野守松平見守等の一行に隨ひ、歐米を視察し、維新後諸官に歴任し、子爵を授けられ、樞密顧問官、賞勳局議定官に任ぜられ、大正九年歿す。年八十六。

すぎまた杉丸太【名】杉の木のまるた。すぎみ透見【名】物の透間よりのぞき見ること。かいま。

すぎみ剥身【名】獸肉又は魚肉の薄き切身。すぎきに。平家女護身。さし鱗皮剥めぐる鯛のすきみ乾かす。

すぎむし杉蟲【名】(動)鞘翅(せうし)類に屬する昆蟲。大きき四五分にして、黒藍色を呈す。幼蟲は杉櫓の苗を害す。

すぎむら杉村【名】杉の木のむらがりおひてあるところ。すぎはら。後拾遺。すぎむらといひてしるしもなかりけり人のたづねぬ三輪の山と。

すぎむらの杉村の「枕」頭音の同じき關係より、すぎ(過)にかけていふ。萬葉、その神ふるの山なるすぎむらのおもひすぐべき君ならなくに。

すぎめ好目【名】好色らしきこと。すぎめ透目【名】透間のあるところ。透きすぎめのあるところ。

すぎめあぶぎ杉目扇【名】杉骨二十五枚を用ひ、泥箔を施し、繪畫彩絲にて綴れる扇。昔、公家(きょうけ)の童兒の常時、又は元服の時に用ひし繪扇。もと女子用に、杉横目の紋様を押し、松竹鶴龜等を畫きたり。

すぎもさへ杉木左兵衛【名】(人)何處の人なるかを知らず。性朴訥にして、他技なく、ただ泣くことを善くす。楠木正成洛中の戦に敗れし時、左兵衛をして、正成死せりと稱して悲泣せしめ、尊氏の武備を怠るを待ち、その不意を討ちて大いにこれを破る。世に泣男左兵衛と稱せらる。

すぎもの好者【名】物ずきなる人。すぎきやう者。好事家。源氏。さうの笛もたせるすぎものもあり。〔色〕好みの人。好色家。紫雲日麗。すぎもの名にしたてれば見る人のをらすぐるはあらじとぞ思ふ。

すぎもの過者【名】身分に過ぎたる物。過分なるもの。浮世世。あの人には過ぎ者だはな。

すぎもん透門【名】すかしもん(透門)に同じ。甲陽軍鑑。城取の事。すぎ門の事。

すぎもりけいさうすぎもり雞頭【名】(種)せんちこ(老雞)に同じ。

すぎや透綾【名】すぎや(透綾)の略。生絹に似て薄く、物のすきとほりて見ゆるほなる網織物。夏の衣服に用ふ。

すぎや数寄屋【名】風流なる小き家。〔すき(數寄)〕を見よ。茶の湯をするために、別に小さく建てたる一棟の座敷。四疊半なるが普通なれど、二三疊なるもあり。なかひ。茶室。墨井井。數寄屋廻の掃拭ひ。〔じやうじの障子美濃に同じ。〕

すぎやう修行【名】じゆきやう(修行)の約。〔古語〕袈衣、遠きすぎやうなどえ仕うまつるまじければ、いづみの緑竹生鳥などに。

すぎやう數行【名】すうかう(數行)に同じ。〔佛〕誦經(じゆきやう)の約。〔佛〕誦經(じゆきやう)の約。〔佛〕誦經(じゆきやう)の約。

すぎやう誦經【名】じゆきやう(誦經)の約。〔佛〕誦經(じゆきやう)の約。〔佛〕誦經(じゆきやう)の約。

すぎやう讀經【名】じゆきやう(讀經)の約。〔佛〕讀經(じゆきやう)の約。〔佛〕讀經(じゆきやう)の約。

すぎやう御使【名】讀經の事を諸寺に仰するのための勅使。殿上の侍臣。これに任ず。〔佛〕御使(じゆきやう)のつかひども立ちさわぎくらし、その夜も明けぬ。

すぎやう誦經【名】誦經の料に充つるもの、即ち僧たちへの布施。〔佛〕御使(じゆきやう)の幸櫃(さいぐ)ども。

すぎやうさ修行者【名】(佛)すぎやうじや(修行者)の約。〔古語〕源氏。何さまの人ぞ、尊きすぎやうさ語らひて、率ゐて來たるかと問ひたまへば。

すぎやうじ杉楊枝【名】杉の木にて作りたる小楊枝。狂言盗人連。すぎやうじがいらうかと存じ、ととのへました。五人女。〔木屑の杉楊枝、一寸先の命〕

すぎやうじや修行者【名】じゆきやうじや(修行者)の約。〔古語〕其佛の御經を。すぎやうじやだちたる法師の讀むなめり。

すぎやうがしら數寄屋頭【名】江戸幕府の職制の一。殿中の茶禮茶器を掌り、數寄屋坊主を總べしもの。若年寄の所管。數寄屋坊主頭。

すぎやうかはやざうり數寄屋頭草履【名】眞竹の皮を、平目にして造り、鼻緒も、竹の皮にてする草履。元文の頃流行せり。

すぎやう剥燒【名】魚肉又は牛肉のすき身に、醬油を附けて焼くこと、又その焼きたる物。

すぎやう杉燒【名】古禁中にて、杉の折に種種の料理を入れたるもの。〔じやう(鳴燒)の轉訛。〕

すぎやうけた數寄屋下駄【名】數寄屋に用ふる下駄。

すぎやうし杉社【名】杉の木のある神社。主として、大和國三輪神社にいふ。その條参照。金襴、今つくる三輪のはふりがすぎやうし過ぎにしことは問はずともよし。

すぎやうたひ數寄屋足袋【名】昔は草足袋をはきて、茶會に行くことなく、木綿足袋は數寄屋へはき行く故いふ。もめんたひ(木綿足袋)の異稱。

すぎやうばうす數寄屋坊主【名】江戸幕府の茶事を掌りし小吏。若年寄の所管。御坊主(ごぼうす)の。すぎがじの(數寄屋頭)参照。

すぎやうばうす數寄屋頭【名】江戸城外塚の京橋數寄屋町への通路に當る所に架したる橋。一代女、數寄屋橋の河岸端(がしな)る者賣屋に。

すぎやうばしめつけ數寄屋橋見附【名】數寄屋橋門にありし見張番所。

すぎやうばしもん數寄屋橋門【名】江戸外郭諸門の一。日比谷門より京橋數寄屋町に出づる街に當りしもの。

すぎやうばし山【名】杉の多く生ひてある江戶の盲人檢校杉山和一の創めしもの。管絃を用ふ。

すぎやうまいち杉山和一【名】(人)錢齋。杉山流錢齋の祖。初の名は養慶。伊勢國の人。藤堂氏の家臣杉山重政の嫡子。江戸に出て、入江長明山瀬一に學ぶ。延寶中、徳川綱吉の病を治療せる功を以て、祿五百石を賜はり、關東總祿檢校となる。元祿七年歿す。年八十二。

すぎやうん好やん【名】やんはさん機(の轉訛)すき(好)四に同じ。〔畿内の俚語〕

すぎやうり杉遺戸【名】杉の木にて造れる遺戸。新云。おのづからさてもわが世のすぎやうり(を)をり弱き身をいかせん。すぎやうれがみ漣破紙【名】漣きそこなひて破れたる箇所のある紙。天の棚鳥一分小判紙ちりちり紙で、内の身代、すぎやう

大物豆丁

がみの、鼻もかまれぬ紙屑治兵衛」
 すぎゆく 過行く【動四自】「時移り行く。

何事いとどしくすぎ行く方のこひしきに
うらやましくもかへる浪かな」**三**越えゆ
く。萬葉「ももへ山越えてすぎゆく」

すきよう 足恭【名】しゆきよう(足恭)に
同じ。

すぎらん 杉蘭〔名〕石松(ヒカゲ)科に
屬する草本。樹上に寄生し、高さ尺餘。葉は
多のこ以て、剛長く柔かなり。ハはすぎ。

すきり村【名】すぎ(村)に同じ。

色がましき行。源氏心のすさびにまかせ
てかくすきわざするは、いと世のもどき有

ひぬべき事なり」

すき―わたどの透渡殿「名」すいわたどの（透渡殿）を見よ。（かゞ透渡殿に對して）

にて厚く、花は白色或は淡紅色にして、香氣あり。觀賞用とす。

浮遊せる魚をすくひとるに用ふるもの。即ち叉手網(サデ)など、これに屬す。(かぶせ網

すくふ 抄ふ 搦ふ 【動四他】
(形) 又は網などにて、下より上へ汲上ぐる

(七)のすくもを焚く火。 續後拾遺 いづまで
と蛭のすくも火あぢきなく絶えぬ烟の下

すくもむし

にくゆらん」
すくもむし 蟻蝨蟲【名】(動)『土上に出づれば、蟻みて動かぬよりいふ』おむし(地蟲)に同じ。

すくやか健【貌】すくやか(健)に同じ。(古語) 著聞すくやかなるものありて、強盗と戦ひけるが。

すくやかむの健者【名】すくやかなるもの。強健の人。義経、すくやかな者を先に立て、悪所に向ひ、追ひかけられて」

すくやき直焼【名】刃文をまですぐに現せる刀の焼方。龜文(みだれ焼に對して)

すくやきは直焼刃【名】すくやきにしたる刀剣の刃。

すくやり直槍【名】すやり(素槍)に同じ。すくよか健【貌】健くつよきさま。達者。丈夫。剛くして柔婉ならぬさま。

目驗なるさま。(古語) 源氏「これはいとすくよかに、おもおもしろく」

すくよかこころ 健心【名】すくよかなる心。操まづ強き心。(古語) 源氏「かばかりのすくよかこころに思ひそめてん事、いさめんにかなはじ」

すくら 醉藏【名】酔を造る倉。八重、瘦梅や醉藏のかげに三輪」

すくら 素鞍直鞍【名】馬に鞍を懸けたるのみにて、人の乗らぬこと。

すくら 過ぐらく 副【名】(過ぐ)の連體形の延過ぐるは。(古語) 萬葉「梅柳すぐらく惜しみ佐保のうちに遊びしことを宮もとどろに」

すくら ぶぶく (英Bump-book) 【名】はりこみちや(貼込帳)に同じ。

すくり 村主【名】ひのき(榎)に同じ。

すくり 村主【名】朝鮮の古語すき(村)かり(主長の義の合約轉訛かといふ)姓(姓)の。一。里村主、スクリ

すくり 龍【名】虎耳草(虎耳)科に屬する小灌木。高さ三四尺。叢生し、刺を有す。葉は掌狀に分裂し、鋸齒あり。春葉腋より花梗を出し、淡緑色の小花を著く。果實は漿果にして、食ふべし。すんぐり。

すくりいん (英Scream) 【名】寫眞網目版、

すくだ

三色版等の原板を作る時、寫眞のレンズの後に置く、縱横に細線を劃したる硝子。その線の數、一インチに、粗なるは八十、密なるは三百條以上を數ふ。寫眞撮影の時、レンズに取附けて、染色の用をなす色硝子。

すくりたいこん 選大根【名】すぐりて引抜きたる大根。うろぬきだいこん。おろぬきだいこん。

すぐりぬき 選抜【名】選ひ出すこと、又その物。よりぬき。精選。選抜。

すぐりわら 選菜【名】すぐりたる菜。たなきばうき(蔵帝)參照。

すぐる 疎る【動下二目】寒さのために、ちぢみ居まる。

すぐる 選る【動四他】數多くある物の中より、善きを拔取る。選びいだす。えらぶ。ぬきんづ。よりどる。源氏「世の中におしなべたらぬをえりととのへ、すぐりてさぶらはせたまふ」善惡をためす。「槍をすぐる」

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すくるう (英a breeze) 【名】すぬんき(推進器)するくうしやふさ (英a new wind) 【名】あんぢや(暗車軸)に同じ。

すくるう ぶらぶらあ (英a new propeller) するくうしやふさ (英a new wind) 【名】あんぢや(暗車軸)に同じ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すぐる 勝る【動下二目】外の物よりよくあり。まさる。秀つ。ぬきんづ。源氏「いなりとおぼゆばかりすぐれたるとは」身體丈夫なり。健康なり。を見よ。

すく

で足柄やよこ走りする人のところを」
すくろへび 素黒蛇【名】(動)からすへび(烏蛇)を云ふ。(安房國の方言)

すくわい 數回【名】すくわい(數回)に同じ。

すくわらん 崇光院【名】(人)北朝第四代の主。御名は正仁(崇光)。光嚴院第一の皇子。母は陽明院藤原秀子。應永五年崩す。壽六十五。

すくおん 宿院【名】しゆくおん(宿院)の約。(古語) 精監春日へとて、すくおんのいとむかしげなるにとどまりぬ」

すけ 助【名】たすけること。手つだひ。かせい。起戦へばわれはやゑぬ鳥つ鳥うかひがとも今すけにこね」相撲の關脇。すけて。選髮結(すけ)の助手。年中雇はるるを定助(すけ)といへり。(徳川時代の京都大阪の語) 四人の杯の酒を手つだひて飲むこと、又その人。落語家、講談師などの心打(すけ)に力を添へて、技を演ずる心打同様の資格ある者。

すけ けし 助柱の略。盛衰家のまろはたふれんするには、すけといひて、柱のかはり、大なる木を以て支へなほすことあり」

すけ 次官【名】すけ(助)の義。即ち長官の職を補助する者の義。四部官の第二位に列する役。神祇官のは副、太政官のは大納言、中納言、省のは輔、彈正臺のは亮、勘解由(かきゆ)使のは次官、坊又亮は職のは亮、勘解由(かきゆ)近衛府の中將少將、四衛府及び檢非違使の亮は佐、内侍のは典侍、太宰府のは貳、國のは介、那のは少領、家のは扶と書くなど、役所によりて、文字を異にせり。明治元年に置かれし八局及び司の職員、八局のは督の次位にありて輔と書し、司のは頭の次位にありて助と書す。同年廢せらる。明治二年に置かれし皇太后宮職、皇后宮職、東宮坊大膳職などの職の次位にありし。亮と書す。明治三年太政官宮内省に置かれたる舍人局、内舍人局、雅樂局、御膳局、及び同十年一月以前の各寮の職員。助と書す。局なるは長の次位にありて判任官、寮にては頭權

頭の次位にありて、奏任官とせり。後、共に廢せらる。

すけ 出家【名】しゆくけ(出家)の約。(古語) 源氏「一日のすけのくどくは、はかりなきものなれば」

すけ 助【接尾】人の性質形狀又は職業などをとり、それに添へて、人名めかしていふ語。(俚語) 「飲みすけ」「明けすけ」「浮きすけ」「雲すけ」「ちびすけ」錢勘定に用ふる語「圓すけ」「半すけ」

すけ 菅 菅草【名】(植) 莎草(さくさ)科に屬する一類の草の總稱。すべは莖は充實し、葉は細長くして尖り、平行脈を具へ、互生して三縱列をなし、葉鞘は管狀に結合して莖を圍み、花は單性にして、徳利狀の囊被中に子房を生ず。夏、葉を刈取りて、葉の廣きは笠とし、狭きは蓑となす。かきぬふくさ。すが。和名菅、須計(草名也)菅の小笠(すか)包(菅にて作れる小笠。太平記菅の小笠を傾けて、露分くる越路の旅)

すけ 習宜【名】姓氏の一。神饌速日(はやひ)命より出でしもの。姓は朝臣(あそ)。

すけ あそ 出でしもの。姓は朝臣(あそ)。

すけ 習宜阿會屋【名】(人)太宰府の主神(あそ)弓削(きりく)道鏡に嗣いで、宇佐八幡大神の神勅と許り、道鏡をして天位に即かしめんとす。事成らず、遂に多積(たせき)島守に貶せらる。

すけ いちのきみ 助軍君【名】副將。別將。(古語) 親別將、スケイクサノキミ

すけ いちもんじ 菅一文字【名】次條の略。

すけ いちもんじが 菅一文字笠【名】殆ど平面をなせる菅笠。菅にて造りたる一文字笠。すけいちもんじ。

すけ え 形 狹狹なることに云ふ。(伊豆國の方言)

すけ えちんぐ (英galling) 【名】次條を見よ。

すけ えちんぐ 【名】靴の裏に、革又は蠟施などにて締著せしめて、氷上等を走るに用ふる金具、又それを付けて滑走すること。こぼりすべり。

すけ がう 助郷【名】徳川時代に、道中各驛の驛傳の不足を補ふために、驛の周圍數里

をぬきわ るれるりら よゆや もめむみま ぼへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

の間の在郷より、石高に應じて、人夫と馬匹とを徴發して、これを助けしめしに在郷。定助郷と大助郷との別ありて、前者は所定の馬を常に宿驛に出ししものにて、大低宿驛の附近一二里の村里に課する例とし、本助郷とも呼ぶ。五六里以上十里内外に及ぼすを加助郷といひて、諸役高掛物(高掛物)を免ぜられたり。後者は諸侯參觀等の大通行ある場合に、臨時に出役せしもの。

すけがうこく 助郷穀 [名] 穀倉の一。豊後國日田郷代官岡田庄大夫の創めたるもの。租税の外に米麥粟その他の雜穀を人民の難儀とならざる程度に身分に應じて集め、これを日田陣屋に貯へ置き、その價賣き時、之を賣り、その銀を年壹割の利にて、人民に貸渡したり。

すけがうちやう 助郷帳 [名] 助郷に出すべき人馬の定数を記載したる帳簿。
すけがうね 助郷船 [名] 江戸時代に、水路の交通の不足を補ふために、普通の助郷における人馬の代りに、船と船夫とを徴發せしもの。

すけがうむら 助郷村 [名] すけがう(助郷)すけがうやく 助郷役 [名] 助郷に、人馬を徴發せらるること。
すけがさ 菅笠 菅笠 [名] 菅の葉を編みて造れる笠。すけがさ。

すけがさ 菅笠 菅笠 [名] 俗歌の節の一。寛文の頃流行せるもの。 [同じ]。
すけがな 助假名 [名] ふりがな(振假名)にすけがな 助假 [名] (地) 常陸國多賀郡高鈴(今)村の大字。陸前濱街道の一小驛。鐵道常盤線の一驛。近年海水浴場として著る。

すけがふ 助四他 [名] 檣柱(カ)にて支ふ。つすけがふ 著替 [名] (動下二他) 取りかへて著(カ)。つすけがふ。 [すけかへ]。
すけがみ 著替 [名] すけがふること。つすけがみ すけ紙 [名] 紙の一種。七紙の體に用ふるもの。 [に同じ]。

すけかや 菅茅 [名] (植) かりやす(青茅) [すけき透] [名] すき(透)の延。(古語) 萬葉「玉だれのをすのすけきに入りかよひこね

たらねの母がとはさば風と申さむ」
すけしよ 菅縞 [名] 伊勢の木綿布に蠶絲を以て、柳條(カ)とせるもの。我が國にて、木綿布に蠶絲を交ふるはこれに始まる。
すけせい 助勢 [名] 助に向ふ軍勢。救の軍勢。援兵。加勢。

すけそう 助總 [名] 次條の略。
すけそうやき 助總焼 [名] ふのやき(鉄焼)を見よ。 [すけ。かせい]。
すけたう 助黨 [名] 助くるなま。たすすけたか 助鷹 [名] 既に放ちたる鷹に助勢せしむるために放つ鷹(鷹狩の語) 狂言藝芝「誠の鷹をすけ鷹にかけとらせ」

すけたや 助高屋高助 [名] (人) 江戸の俳優。 [初代]。はじめ初代澤村宗十郎といふ。その條を見よ。 [二] 二代澤村宗十郎の長子。五代市川團十郎の門人。文政元年歿す。年七十二。 [三代]。はじめ五代澤村宗十郎といふ。その條を見よ。 [四代]。三代の長子。明治十九年歿す。年四十九。
すけだち 助太刀 [名] 加勢をすること。又その人。堀川波の戲敵は只一人、助太刀あらば無切

すけち (英 Sketch) [名] 畫家彫刻家文學者が自然に對する印象を記録して置く略畫。要點の暗示を主とするために細部を略し、自ら簡約となる。完成したる作品に比すれば不完全なれど、印象の眞實と感興の興味及び鋭きを具ふるが故に、その効果は、完成の作品に勝ることもあり。寫生すけち (英 Sketch book) [名] 畫家がスケッチを作る時に用ふるノート・ブック。寫生帖。

すけちんぐ 絞 (英 Skewling block) [名] 數十枚を重ねて、一枚宛刺ぎとり得るやう、その周圍を糊にて貼附けたる畫用紙。畫家がスケッチを作るに用ふ。
すけて 助手 [名] すけをする人。加勢する人。すけ。 [相撲] の闘脇。すけ。わすけ (古語)

すけさう [名] (動) 次條の略。
すけしよ

すけさうだら すけさう鯉 [名] (動) 鯉の一種。形普通のより小きく、且つやや細長く、口吻すこしく尖り、兩顎に鋭利なる齒あり。體側に雲狀の斑紋あり。開き乾し、又は鹽藏して、食用に供するれど、味は劣れり。佐渡朝鮮近海等に産し、朝鮮にては上下共に用いふ。すけとら。ほそだら。
すけない 少ない [形] すくなじ(少し)の轉訛。(俚語)
すけなじ [形] あはれみ少な。なさけの心なし。愛想なし。つれなし。無慈悲なり。 轉訛「うちそそみ君ひとり見よまるこすけまろは人すげなしといふなり」
すけなり 助成 [名] (人) いちもんじすけなり (文字助成) を見よ。 [同じ]。
すけのつぼね 典侍 [名] てんじ(典侍)にすけのにはさき 莎雞 [名] (動) 詩經の幽風七月の篇に「六月莎雞振羽」とある莎雞の直譯「きりぎりす(念嘶)の異稱。(古語) 秘中抄「ふるさきのまがきの山に鳴く聲や蓬が抽のすけのにはさき」とり



(らだうとけす)

すけのはかせ 助教 [名] じょけう(助教)に同じ。(古語)
すけのぶ 助延 [名] (人) いちもんじすけのぶ (文字助延) を見よ。
すけのまみち 菅野眞道 [名] (人) 百濟王辰孫の後裔。本姓は津連。光仁(桓武平城)天皇の四朝に歷任し、參議大藏卿近江守に進む。桓武天皇の朝、續日本紀の刪定に與る。弘仁の初年薨す。年七十四。
すけのみやこ 少領 [名] せうりやう(少領)に同じ。
すけのやかんこく 菅谷甘谷 [名] (人) 大阪の儒者。名は晨耀、字は子旭、通稱は小膳。初め堀南庵と號す。江戸の人。物徂徠に學ぶ。寶曆十四年歿す。年六十九。
すけのり 助則 [名] (人) いちもんじすけのり (文字助則) を見よ。
すけはかせ 助教 [名] 助博士の意」じよ

すけふさきやうき 資房卿記 [名] (書) じゆんき(春記)に同じ。
すけふし [名] 矢柄の節の名。のなかの節と舊巻との間の節。
すけべい 助平 [名] 次條に同じ。 平家女權皇敵のてかけめかけとなるやうなすけべいのいたづらもの」
すけべ 助兵衛 [名] 『好(カ)兵衛の轉訛するべし』「このみ(好色)を云ふ。(俚語)
すけみの 菅養 [名] 菅の草を編みて作りたる蓑。 諸曲(竹)「習はぬ業を菅養は寒風もたまらず」

すけみやつこ 少領 [名] すけのみやつこ(少領)に同じ。(古語)
すけむ 助四目 [名] 商拔けて、まはらになる。すけむ (古語) 源氏「口うちすけみて」
すけむね 助宗 [名] (人) いちもんじすけむね (文字助宗) を見よ。
すけん 素見 [名] すけんぶつ(素見物)の略。 柳樹「素見さんそれちやエ住と笑はれる」
すけん 修驗 [名] 次條の略。(古語)
すけんじや 修驗者 [名] じゆけんじや(修驗者の約。(古語)
すけんぶつ 素見物 [名] (素)は接頭語「物を見るのみにて、買はぬこと。すけ

すけん 素見 [名] すけんぶつ(素見物)の略。 柳樹「素見さんそれちやエ住と笑はれる」
すけん 修驗 [名] 次條の略。(古語)
すけんじや 修驗者 [名] じゆけんじや(修驗者の約。(古語)
すけんぶつ 素見物 [名] (素)は接頭語「物を見るのみにて、買はぬこと。すけ

すけん 素見 [名] すけんぶつ(素見物)の略。 柳樹「素見さんそれちやエ住と笑はれる」
すけん 修驗 [名] 次條の略。(古語)
すけんじや 修驗者 [名] じゆけんじや(修驗者の約。(古語)
すけんぶつ 素見物 [名] (素)は接頭語「物を見るのみにて、買はぬこと。すけ

すけはかせ 助教 [名] 助博士の意」じよ
すけふさきやうき 資房卿記 [名] (書) じゆんき(春記)に同じ。
すけふし [名] 矢柄の節の名。のなかの節と舊巻との間の節。
すけべい 助平 [名] 次條に同じ。 平家女權皇敵のてかけめかけとなるやうなすけべいのいたづらもの」
すけべ 助兵衛 [名] 『好(カ)兵衛の轉訛するべし』「このみ(好色)を云ふ。(俚語)
すけみの 菅養 [名] 菅の草を編みて作りたる蓑。 諸曲(竹)「習はぬ業を菅養は寒風もたまらず」
すけみやつこ 少領 [名] すけのみやつこ(少領)に同じ。(古語)
すけむ 助四目 [名] 商拔けて、まはらになる。すけむ (古語) 源氏「口うちすけみて」
すけむね 助宗 [名] (人) いちもんじすけむね (文字助宗) を見よ。
すけん 素見 [名] すけんぶつ(素見物)の略。 柳樹「素見さんそれちやエ住と笑はれる」
すけん 修驗 [名] 次條の略。(古語)
すけんじや 修驗者 [名] じゆけんじや(修驗者の約。(古語)
すけんぶつ 素見物 [名] (素)は接頭語「物を見るのみにて、買はぬこと。すけ

すけんも

ん。ひやかし。あぶらむし。犬の川端(のび)。
「櫻葉素見物土手て小田原評定し」

すけんもん 崇賢門 [名] すけんもん 崇賢門に同じ。

すけも 菅藻 [名] (植) あまも (大葉藻) [名] 菅藻に同じ。

すけやく 助役 [名] (じやく) (助役) に同じ。
すけゆり [名] (植) こねゆり (小鬼百合) に同じ。

すける 助ける [動下] 他 たすく。てだすけをなす。助勢す。〔但語〕 嵯峨天皇甘露雨「提氣味のよい盃、それを御身が皆飲むか。何のいの。すけて貰ふ人あると。ちよつと口付け、差しければ」

すけろく 助六 [名] 京都の俠客。元和年間、馬原の名妓鶴角(つづみ)と情交密なり。時に家康の子忠輝の臣眞柄(まがら)要人(まがら)といふ者。秀忠を害して、わが主を將軍たらしめんと欲して、忠輝の命と伴り、浪士と結びて將に事を舉げんとす。助六その友人源八のこれに驚きと聞き、説きて自首せしめしより、要人に嫉まれ、遂に泥酔中刺殺さる。〔歌舞伎十八番の一。大阪市日前にて、穂屋揚巻、萬屋助六の心中の事實を脚色せし。〕 正徳三年二代市川團十郎が江戸歌舞伎に移し、俠客花川戸助六の事に改作せしめ、山村座にて上演せり。その後、種種の名題にて、今に演ぜらる。〔三すけに錢を云ふ。〕 元祿時代の江戸の語に同じ。

すけろく いちやく [名] (植) いはるめ 岩梅に同じ。
すけろく しんちゆう 助六心中 [名] 淨瑠璃の一。延寶六年都一中の山本土佐佐木(ささき)の芝居にて語り初めしもの。筋は助六と揚巻との關係を主とし、遂に心中せんとし、闖ち命を全うし、夫婦となるに終る。この作に現れたる助六は、遊治郎の雛なく、跌宕磊落にして、歌舞伎十八番の助六も、これに胎胎せりと傳ふ。作者不詳。
すげあんざ 菅園座 [名] すげあんざ (菅園座) に同じ。

すけを 助丁・助男 [名] 助丁(すけ)にて、中男又は次丁ならんといふ。また好色男(すけ)の轉にて、好色の男なるべしともいふ。(正丁に對して) (古語) 萬葉をくさ男とを

すこ

ぐさすけをと潮舟のならべて見ればをぐさかちめり」

すこ 出舉 [名] すこ(出舉)に同じ。〔古語〕 素子 [名] しづ。やまがつの類。〔古語〕 拾遺すこがもる山田のなる風吹けばおのが夢をよおとるかすらん

すこあ 總譜・總譜表 (英・Soo) [名] 〔音〕 數多の樂器人聲又はその雙方にて合奏すべき樂曲の各音部の譜を、上下に連ねたる大譜表。

すこおろし 菓子下 [名] すろし(菓子下)に同じ。〔名] (動) 環蟲類に屬する蠅形(けい)動物。沙蠅(しや)の一種。體長一尺ばかり。長き管を作りて、その内に棲息す。

すこき 素拔 [名] すこき。〔名] 穀類の穂を挟み抜く農具。長さ三寸ばかりの二本の竹に穴を穿ちて、繩を通し繋ぎたるもの。

すこく 數刻 [副] すこく(數刻)に同じ。平素兵仗(へいそうへい)を帶して、討ちあひ切りあひ、數刻戦ふ。

すこく 素拔く [動四他] (じやく) 抜くに同じ。〔名] 素拔くもたる竹槍(たけやり)うりうと、素突(すこ)に素拔き試みつつ

すこし 少 [副] すこく。僅に。いささか。源氏風すこし吹きてたる夕ぐれ

すこし 少 [形] すこく(少)に同じ。〔但し〕 連體形の外、古書に用例なければ、すこし(少)の運用形の後世に至りて復活せしものと見るを得べけんか(古語) 平素泰加すこしきなり。誰れか助成せざらん

すこし 簾越 [名] 簾をへだてて見わたすこと。すだれごし。

すこし 凄 [形] 甚しく淋し。恐ろしく氣味わるし。すさまじく恐ろし。山雲ゆふされや檜原(ひの)の嶺を越えゆけばすこきこゆる山崩(やま)のこゑ

すこし 少 [副] すこし(少)に同じ。すこし 少 [副] いささか。ちつとも。毫も。其(その)古郷に咲けるものから櫻花色はすこしあせざりける

すこす 過す [動四他] すこす(過)に移りゆかしむ。過る。すぐす。源氏久しうなるまに、え念じすすまじう覺えたまへど」

すこら

すこら 蘇格藩 [名] (植) 蘇格の一種。スコットランド及び英國北部の原産。矮生にして葉小なれど、花甚だ多く、花壇又は生垣を作るに適す。

すこら 蘇格蘭哲學 [名] (哲) 英・Scottish philosophy 西紀第十八世紀の後半、ヒューム(D. Hume)の懷疑論に對する反動として、スコットランドに起りし一派の哲學說。吾人の直接の意識に訴へ、萬人の等しく承認せざるべからざる事實を根本原理として、認識・信仰・道德の基を立てんことを主張せしもの。リイド(R. Reid)この派の頭領たり。常識哲學。

すこら 勤上 [自] 甚しくこびる。こましくやれる。なまじきなり。源氏鳥子折「占部の新七取つて返し、渡合つて切合ひしが、太刀を捨てむと組む、白妙宛爾と打笑ひ、女と思ひ傷るな。主有る女に抱付くは、すこびたる徒者」 大藏院ええ、すこびた餓鬼め、待つて居れ

すこら 頗る [副] やや多く。一とほりに。〔古語〕 大聖皆こそ忘れ侍りにけれ、これはただすこぶる覺え侍るなり」 萬葉抄 頗る(はる)とは、すこぶるのこおもむきおはしけるとぞ申し傳へて」 おび

すこら 蘇格藩 [名] (植) 蘇格の一種。スコットランド及び英國北部の原産。矮生にして葉小なれど、花甚だ多く、花壇又は生垣を作るに適す。

すこら 蘇格蘭哲學 [名] (哲) 英・Scottish philosophy 西紀第十八世紀の後半、ヒューム(D. Hume)の懷疑論に對する反動として、スコットランドに起りし一派の哲學說。吾人の直接の意識に訴へ、萬人の等しく承認せざるべからざる事實を根本原理として、認識・信仰・道德の基を立てんことを主張せしもの。リイド(R. Reid)この派の頭領たり。常識哲學。

すこら 勤上 [自] 甚しくこびる。こましくやれる。なまじきなり。源氏鳥子折「占部の新七取つて返し、渡合つて切合ひしが、太刀を捨てむと組む、白妙宛爾と打笑ひ、女と思ひ傷るな。主有る女に抱付くは、すこびたる徒者」 大藏院ええ、すこびた餓鬼め、待つて居れ

すこら 頗る [副] やや多く。一とほりに。〔古語〕 大聖皆こそ忘れ侍りにけれ、これはただすこぶる覺え侍るなり」 萬葉抄 頗る(はる)とは、すこぶるのこおもむきおはしけるとぞ申し傳へて」 おび

すこら 蘇格藩 [名] (植) 蘇格の一種。スコットランド及び英國北部の原産。矮生にして葉小なれど、花甚だ多く、花壇又は生垣を作るに適す。

すこら 蘇格蘭哲學 [名] (哲) 英・Scottish philosophy 西紀第十八世紀の後半、ヒューム(D. Hume)の懷疑論に對する反動として、スコットランドに起りし一派の哲學說。吾人の直接の意識に訴へ、萬人の等しく承認せざるべからざる事實を根本原理として、認識・信仰・道德の基を立てんことを主張せしもの。リイド(R. Reid)この派の頭領たり。常識哲學。

すこら 勤上 [自] 甚しくこびる。こましくやれる。なまじきなり。源氏鳥子折「占部の新七取つて返し、渡合つて切合ひしが、太刀を捨てむと組む、白妙宛爾と打笑ひ、女と思ひ傷るな。主有る女に抱付くは、すこびたる徒者」 大藏院ええ、すこびた餓鬼め、待つて居れ

すこら 頗る [副] やや多く。一とほりに。〔古語〕 大聖皆こそ忘れ侍りにけれ、これはただすこぶる覺え侍るなり」 萬葉抄 頗る(はる)とは、すこぶるのこおもむきおはしけるとぞ申し傳へて」 おび

すこら 蘇格藩 [名] (植) 蘇格の一種。スコットランド及び英國北部の原産。矮生にして葉小なれど、花甚だ多く、花壇又は生垣を作るに適す。

すこら 蘇格蘭哲學 [名] (哲) 英・Scottish philosophy 西紀第十八世紀の後半、ヒューム(D. Hume)の懷疑論に對する反動として、スコットランドに起りし一派の哲學說。吾人の直接の意識に訴へ、萬人の等しく承認せざるべからざる事實を根本原理として、認識・信仰・道德の基を立てんことを主張せしもの。リイド(R. Reid)この派の頭領たり。常識哲學。

すこら 勤上 [自] 甚しくこびる。こましくやれる。なまじきなり。源氏鳥子折「占部の新七取つて返し、渡合つて切合ひしが、太刀を捨てむと組む、白妙宛爾と打笑ひ、女と思ひ傷るな。主有る女に抱付くは、すこびたる徒者」 大藏院ええ、すこびた餓鬼め、待つて居れ

すこら 頗る [副] やや多く。一とほりに。〔古語〕 大聖皆こそ忘れ侍りにけれ、これはただすこぶる覺え侍るなり」 萬葉抄 頗る(はる)とは、すこぶるのこおもむきおはしけるとぞ申し傳へて」 おび

すこら 蘇格藩 [名] (植) 蘇格の一種。スコットランド及び英國北部の原産。矮生にして葉小なれど、花甚だ多く、花壇又は生垣を作るに適す。

すこら 蘇格蘭哲學 [名] (哲) 英・Scottish philosophy 西紀第十八世紀の後半、ヒューム(D. Hume)の懷疑論に對する反動として、スコットランドに起りし一派の哲學說。吾人の直接の意識に訴へ、萬人の等しく承認せざるべからざる事實を根本原理として、認識・信仰・道德の基を立てんことを主張せしもの。リイド(R. Reid)この派の頭領たり。常識哲學。

すこら 勤上 [自] 甚しくこびる。こましくやれる。なまじきなり。源氏鳥子折「占部の新七取つて返し、渡合つて切合ひしが、太刀を捨てむと組む、白妙宛爾と打笑ひ、女と思ひ傷るな。主有る女に抱付くは、すこびたる徒者」 大藏院ええ、すこびた餓鬼め、待つて居れ

すこる

すこる 蘇格藩 [名] (植) 蘇格の一種。スコットランド及び英國北部の原産。矮生にして葉小なれど、花甚だ多く、花壇又は生垣を作るに適す。

すこる 蘇格蘭哲學 [名] (哲) 英・Scottish philosophy 西紀第十八世紀の後半、ヒューム(D. Hume)の懷疑論に對する反動として、スコットランドに起りし一派の哲學說。吾人の直接の意識に訴へ、萬人の等しく承認せざるべからざる事實を根本原理として、認識・信仰・道德の基を立てんことを主張せしもの。リイド(R. Reid)この派の頭領たり。常識哲學。

すこる 勤上 [自] 甚しくこびる。こましくやれる。なまじきなり。源氏鳥子折「占部の新七取つて返し、渡合つて切合ひしが、太刀を捨てむと組む、白妙宛爾と打笑ひ、女と思ひ傷るな。主有る女に抱付くは、すこびたる徒者」 大藏院ええ、すこびた餓鬼め、待つて居れ

すこる 頗る [副] やや多く。一とほりに。〔古語〕 大聖皆こそ忘れ侍りにけれ、これはただすこぶる覺え侍るなり」 萬葉抄 頗る(はる)とは、すこぶるのこおもむきおはしけるとぞ申し傳へて」 おび

すこる 蘇格藩 [名] (植) 蘇格の一種。スコットランド及び英國北部の原産。矮生にして葉小なれど、花甚だ多く、花壇又は生垣を作るに適す。

すこる 蘇格蘭哲學 [名] (哲) 英・Scottish philosophy 西紀第十八世紀の後半、ヒューム(D. Hume)の懷疑論に對する反動として、スコットランドに起りし一派の哲學說。吾人の直接の意識に訴へ、萬人の等しく承認せざるべからざる事實を根本原理として、認識・信仰・道德の基を立てんことを主張せしもの。リイド(R. Reid)この派の頭領たり。常識哲學。

すこる 勤上 [自] 甚しくこびる。こましくやれる。なまじきなり。源氏鳥子折「占部の新七取つて返し、渡合つて切合ひしが、太刀を捨てむと組む、白妙宛爾と打笑ひ、女と思ひ傷るな。主有る女に抱付くは、すこびたる徒者」 大藏院ええ、すこびた餓鬼め、待つて居れ

すこる 頗る [副] やや多く。一とほりに。〔古語〕 大聖皆こそ忘れ侍りにけれ、これはただすこぶる覺え侍るなり」 萬葉抄 頗る(はる)とは、すこぶるのこおもむきおはしけるとぞ申し傳へて」 おび

すこる 蘇格藩 [名] (植) 蘇格の一種。スコットランド及び英國北部の原産。矮生にして葉小なれど、花甚だ多く、花壇又は生垣を作るに適す。

すこる 蘇格蘭哲學 [名] (哲) 英・Scottish philosophy 西紀第十八世紀の後半、ヒューム(D. Hume)の懷疑論に對する反動として、スコットランドに起りし一派の哲學說。吾人の直接の意識に訴へ、萬人の等しく承認せざるべからざる事實を根本原理として、認識・信仰・道德の基を立てんことを主張せしもの。リイド(R. Reid)この派の頭領たり。常識哲學。

すこる 勤上 [自] 甚しくこびる。こましくやれる。なまじきなり。源氏鳥子折「占部の新七取つて返し、渡合つて切合ひしが、太刀を捨てむと組む、白妙宛爾と打笑ひ、女と思ひ傷るな。主有る女に抱付くは、すこびたる徒者」 大藏院ええ、すこびた餓鬼め、待つて居れ

すこる 頗る [副] やや多く。一とほりに。〔古語〕 大聖皆こそ忘れ侍りにけれ、これはただすこぶる覺え侍るなり」 萬葉抄 頗る(はる)とは、すこぶるのこおもむきおはしけるとぞ申し傳へて」 おび

すこる 蘇格藩 [名] (植) 蘇格の一種。スコットランド及び英國北部の原産。矮生にして葉小なれど、花甚だ多く、花壇又は生垣を作るに適す。

すこる 蘇格蘭哲學 [名] (哲) 英・Scottish philosophy 西紀第十八世紀の後半、ヒューム(D. Hume)の懷疑論に對する反動として、スコットランドに起りし一派の哲學說。吾人の直接の意識に訴へ、萬人の等しく承認せざるべからざる事實を根本原理として、認識・信仰・道德の基を立てんことを主張せしもの。リイド(R. Reid)この派の頭領たり。常識哲學。

すこる 勤上 [自] 甚しくこびる。こましくやれる。なまじきなり。源氏鳥子折「占部の新七取つて返し、渡合つて切合ひしが、太刀を捨てむと組む、白妙宛爾と打笑ひ、女と思ひ傷るな。主有る女に抱付くは、すこびたる徒者」 大藏院ええ、すこびた餓鬼め、待つて居れ

すこる 頗る [副] やや多く。一とほりに。〔古語〕 大聖皆こそ忘れ侍りにけれ、これはただすこぶる覺え侍るなり」 萬葉抄 頗る(はる)とは、すこぶるのこおもむきおはしけるとぞ申し傳へて」 おび

すこる 蘇格藩 [名] (植) 蘇格の一種。スコットランド及び英國北部の原産。矮生にして葉小なれど、花甚だ多く、花壇又は生垣を作るに適す。

すこる 蘇格蘭哲學 [名] (哲) 英・Scottish philosophy 西紀第十八世紀の後半、ヒューム(D. Hume)の懷疑論に對する反動として、スコットランドに起りし一派の哲學說。吾人の直接の意識に訴へ、萬人の等しく承認せざるべからざる事實を根本原理として、認識・信仰・道德の基を立てんことを主張せしもの。リイド(R. Reid)この派の頭領たり。常識哲學。

すこる 勤上 [自] 甚しくこびる。こましくやれる。なまじきなり。源氏鳥子折「占部の新七取つて返し、渡合つて切合ひしが、太刀を捨てむと組む、白妙宛爾と打笑ひ、女と思ひ傷るな。主有る女に抱付くは、すこびたる徒者」 大藏院ええ、すこびた餓鬼め、待つて居れ

すざい 數罪【名】すうざい(數罪)に同じ。



のをのみこと。
すさび荒〔名〕心のすずるにすすむと

すさむ 荒む【動下二他】すさばしむ。荒れしむ。(古語) 堀太、ひまもなく降りもす

しらはかりおして、三十はかり盛りたり」
すしう 首周【名】首に巻くもの。支那

と鋸齒を有し、縁邊甚だ不整齊に、春期
淡黄緑色の花を開く。ピラミット型に繁
り、水無き處にも煤煙の中にも成長するた
め、街路樹に用ひらる。ぼたんのき。ぶら
たぬす。

すずかけのきくわ 篠懸木科【名】「植」顯

花植物被子類雙子葉門 離瓣花區に屬す
る一科。既知のものは一、屬六種あるのみ
にて、その中、鈴懸木の一は、地中海地方
よりヒマラヤ地方にかけて生じ、他は皆北
米に生ず。

すずかけばら 數珠掛鳩【名】「動」しめこ

すずかさんみやく 鈴鹿山脈【名】「地」伊

勢海と琵琶湖大阪灣との分水界をなせる
山脈。北端は美濃國關ヶ原附近、南方は紀
伊山脈に連なる。

すずかぜ 涼風【名】「初秋の頃吹く涼しき

風。熱氣なき風。涼風(フユ)」。豫説(フユ)「す
ず風や我れより先に百合の花」。「同じ」。

すずかざり 鈴鹿芹【名】「植」せりもどきに

すずかち 鈴鹿路【名】「地」伊勢國鈴鹿郡
の街道。諸曲(第62)「湖むかふ鏡山、やう
やう行けば、鈴鹿路や、多氣(タキ)の都の程も
なく、度會(タカ)の宮に著きにけり」。

すずかのの 鈴鹿【名】「植」たつき(當歸)

すずかのの せき 鈴鹿關【名】「地」奈良朝
時代の三關の一。古、伊勢國鈴鹿山にあり
しものにて、今の伊勢國鈴鹿郡關町の西郊
邊に設けられしものなるべしといふ。

すずかは 鈴川【名】「地」駿河國富士郡元

吉原村の大字。鐵道東海道本線の一驛。こ
の邊一帶の海面は即ち田子(ウツ)浦なり。

すずかも 鈴鴨【名】「動」全身概して色黒く、

一種、雄の老いたるは、全身概して色黒く、
ただ腹部白く、背と翼ともに白色部を交
へ、雌と幼鳥とは、黒色の代りに茶褐色を
呈し、その鳴聲鈴の音の如し。秋冬の候、
我が國沿海に來る。なきはじろ。夫(ハ)夜
もすがら沖の鈴鴨はふりしてなききの宮
にきねつづみうつ」。

すずがもり 鈴森【名】「地」東京府荏原

郡大井村大字水神下に在る字。品川町の南
方にして、海に接す。江戸時代刑場のあり
たる所。今尚路傍に石佛を散見す。刑場は
慶安四年に設けられ、維新後廢す。

すずがや すすぎ【名】「植」こはんさう(小

判草)に同じ。

すずかや 鈴鹿山【名】「地」伊勢國鈴鹿

郡にある山。東海道はこの山中を通じ、古
はここに關所を設けたり。箱根に次ぐ難路
といふ。後撰「すずか山いせをのあまのす
て衣しほなれたり」と人や見るらん」。

すずかや 鈴鹿山【枕】鈴は鳴るものな

るより、なるにかけていふ。六帖(ハ)ものふ
のたつといふなるすずかやまならんかた
こそ聞かまほしけれ」。

すすぎ【名】叢生せる草の總稱。山蓼(ハ)よし

の山風にすすぎにさく花は人のをるさへ
をしまれぬかな」。

すすぎ 薄世【名】「植」前條の語の轉「木

本科に屬する多年生の草。山野に自生し、
莖に似て小さく、秋の末、莖頂に長き穗狀
花序をなして咲き、その色黄褐にして、
形獸の尾に似たるより尾花ともいひ、秋の
七草の一とす。莖と葉とは、屋根を葺くに
用ひ、また觀賞用に供す。古今、今よりは
つぎて降らんなんわがやどのすすぎよしな
み降れる白雪」。

薄の袖【句】「尾花の袖」に同じ。

すすぎ 濯【名】すすぐこと。洗濯(ハ)足の

料とする水又は湯。

すすぎ 鱈紫鰓魚【名】「動」硬鰭(カ)類に

屬する魚。河海(ハ)の間に産し、
春の末、川に溯り、秋海に入
る。長さ二三尺に達し、口大
く、鱗細かく、背部は淡蒼、腹
部は淡白、形やや鰻に似た
り。その小さきものを「せい
ご」といひ、尺餘なるを「すず
き」といひ、更に長じて「すす
ぎ」といふ。夏季は味最も美
なり。

すすぎ 鈴木【名】姓氏の一。種積保正の後

胤重基より出づ。重基より二十六世の孫に
重家重清あり。共に源義經に従ふ。龜井六



(き ザ す)

郎は乃ち重清の俗稱なり。重家の曾孫重信
三河に徙り、一宮司となり、子孫土著す。吉
野朝の頃、鈴木重行なるもの、楠木正成に
従ひ、王事に勤めたり。

すすぎ あきら 鈴木服【名】「人」國學者。

通稱は常助、離屋と號す。本居宣長の弟子。
名古屋の明倫堂の教授たり。源氏物語玉小
櫛補遺、雅語譯解等の著あり。天保八年歿
す。年七十四。

すすぎ あく 濯上ぐ【動】二他「十分にす

ずぐ。小町(ハ)親王「暑きをもすすぎあげた
る手水かな」。同、沼に名をすすぎあげた
る運かな」。

すすぎ おとし 鱈落【名】「突道湖の鱈は、

この雷を賦ひて、海に遁ぐといふにより
ていふ。十月の雷の異稱。(出雲國松江
の方言)。

すすぎ がき 薄垣【名】薄を折りかけ又は

結びて作れる垣。

すすぎ がき 濯川【名】「地」伊勢國にある

川。名蓋あはれてふ人もなき世に名にし
おはば身をすすぎがは清く流れよ」。

すすぎ きち 鈴木其【名】「人」畫家。

名は元長、通稱は爲三郎、別に善書また繪
喲とも號す。近江國の人。酒井抱一に學び、
人物花鳥を善くす。安政五年歿す。年六
十三。

すすぎ しげたね 鈴木重胤【名】「人」國學

者。本姓は藤原、通稱は勝左衛門。嚴楓本
(ハ)と稱す。淡路國の人。著すとろろ日
本書紀傳あり。しばしば孝明天皇に拜謁
し、恩賜を蒙る。文久三年自宅にて、刺客
に殺さる。年五十二。

すすぎ しげね 鈴木重嶺【名】「人」舊幕

臣。村山素行に従ひて國學を善くす。勘
定奉行佐渡奉行兵庫頭たり。明治三十一
年歿す。

すすぎ しやうさん 鈴木正三【名】「人」徳

川初期の假名字の作者。別名を聖三又は
昌三、通稱は九太夫、石平道人又は玄玄軒
と號す。三河の人。幼時より家康に従ひ、
戰功あり。後に佛門に歸依し、諸國を
遍歷す。後、三河國恩眞寺に住し、次いで江
戸淺草天徳院の側に、了心庵を結び、通俗

小説を以て、佛教の弘布に力め、因果物語
二人比丘尼等の著あり。明暦元年歿す。年
七十七。

すすぎ せんたく 濯洗濯【名】せんたく(洗

濯)に同じ。番の門徒飯でもたかせ、すす
ぎ洗濯、手足すすすらせ、一牛は糞ひごろし
すすぎをろふ濯汰【動】二他「えりす
ずぐ。選擇す。盛衰(ハ)濯ぎ汰へたる者の、
手に立つべき兵八十五騎にて」。

すすぎ だいがく 鈴木大學【名】「人」鈴木

派無念流劍法の祖。岡田十松に學ぶ。名は
重明、通稱は斧八郎。尾張侯に事ぶ。天保
二年歿す。

すすぎ だはやと 薄田隼人【名】「人」いは

みちゆうたろう(岩見重太郎)に同じ。

すすぎ なます 鱈脂【名】鱈の肉のなます。

すすぎ なんない 鈴木南嶺【名】「人」圓

山派の畫家。名は順、字は子信。通稱は猪
二郎、別號觀水軒。江戸の人。東洋に學
び、人物花鳥を能くす。弘化元年歿
す。年七十。

すすぎ のまる 薄丸【名】紋所の一。薄を

わがねて、穂と葉とを内に容れたるもの。
すすぎは鈴木派【名】すすぎだいがく鈴木
大學を見よ。

すすぎ はうちやう 鱈庖丁【名】能(ハ)の狂

言の一。淀附近の者京なる伯父より鯉を
あつらへられ、折角持參せし、類に啖は
れたりと偽をいふ。伯父その不埒を覺り、
口さきにてもてなすことを作れるもの。

すすぎ はぎ 薄刈【名】薄の葉を矢に撰し

たるもの。有斐竹の小弓、薄はぎの小矢
を取添へて、遠待に出て遊び居る。原。

すすぎ はるのぶ 鈴木春信【名】「人」浮世

繪師。通稱は又兵衛、湖龍齋、また長榮軒
と號す。西村重長の門人。明和の初、始め
て吾妻錦繪を畫き出して、世に稱せられし
も、終身役者の似顔を描かず。明和七年歿
す。年五十三。

すすぎ まつり 薄祭【名】甲斐國吉田淺間

神社の祭禮。七月二十二日に行ふ。翌日神
輿假宮を出て、裾野を渡御す。神官、使丁、

いともかしこしすすのみこ猿丸をこそ思ひいづらめ

すすのみち 跟蹤之鉤【句】鉤針を、すす

るぎて悪しくあれと詛ひていふ語。す

すち【古語】 跟蹤跡、此云三須須能美

賦【古語】

すすのや 鈴屋【名】「人」その書齋に三

十六箇の鈴を懸けたりしによりていふも

をるりのな【本居宣長】の家號。書

すすのやし 鈴屋集【名】「書」本居宣長

の和歌と文章とを集めたるもの。九卷。

すすはき 煤掃【名】家の内なる煤を拂ひ

て清むること。歳末に行ふを例とし、江戸

時代には、十二月の十三日を大奥の煤掃の

日とせり。すすはらひ。俳諧小文、けふ

は師走の十三日、煤掃のことぶきなり。

すすはく 錫箔【名】きんぱく銀箔を見よ。

すすばな 演【名】流れ出づる鼻じるを

すすりこむこと。【古語】 すすばなし

ありくち【古語】 はなはる鼻汁に同じ。【古

語】 和名漢、須須波奈鼻液也。

すすばむ 煤ばむ【動四自】すすく煤くに

同じ。煤掃あま【動四自】すすく煤くに

てありければすすみたりけれども。

すすはらひ 煤拂【名】すすはき【煤掃】に

同じ。

すすひき 數珠挽【名】ねんすひき【念珠挽

】に同じ。東北關人歌、すすひき、君もこ

ず我れも通はぬ中なればろくろひきにて

あはぬ頃かな。

すすぶ煤ば【動上三自】すすく煤くに同

じ。

すすぶね 鈴船【名】驛路の鈴を附けたる

船。驛路の船【古語】 ねには人すすぶ

ねとせしなむみその船とらせ。

すすふりばな 鈴振花【名】「植」さうだいぐ

さ【燈臺草】に同じ。

すすぶる 煤ぼる【動四自】すすぶる煤ぶ

る【古語】 すすぶるに同じ。

すすほのこ 鈴梓命【名】手力雄

す【古語】 鈴の御子。

すすほり 菫【名】野菜を漬物にすること、

又その野菜。

すすぼる 煤ぼる【動四自】すすぶる煤ぶ

る【古語】 すすぼるに同じ。すすぼるに

鳴くつばめ

すすさうし 鈴奏【名】「鈴の奏」に同じ。

すすまし 進まし【形二】心進めり。盛衰記

「雲上の御遊に、今はすすましからぬ程

のなからひなり」

すすみ 峰【名】さみ【飛火】に同じ。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

すすみ 進【名】先へ先へと歩み出づること。

床を見わたせば

すすみな【名】「植」ぎし【羊蹄】に同じ。

すすみぶね 涼舟・納涼船【名】川などに

浮べてすすみをするとき乗る船。召返す

すみ舟といし若衆の小鼓は。

すすみむしろ【名】「植」みみな【卷耳】に

同じ。

すすみを雀魚【名】「植」すめ【雀魚】

すすみ 進【動四自】先へ先へと歩み

出づ。佛足石敷ますらをのすすみさきだ

ちふめるあとを見つしはむただにあ

ふまてに【前む】「心はやる。いきむ。

玉簪待つことの心にすすむけふ日は暮

れじとすれやあまにすすむけふ日は暮

く。のぼる【官途などにいふ】。四上へ行

く。進歩す。上達す。うまくなる。四まさ

る。四調子づく。はずむ。

すすまぬ顔【句】氣のりのせぬ様子。不服

なる顔つき。

機嫌進まず【句】氣のりせず。豊年兩田

川殿の御機嫌すすまぬは、粗忽に魔所

の木を伐り、跡の祟を思召す御顔色。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すすむ 進【動下二他】前へ行かしむ。

すめ

薬に用ひたり。すずめのつば。【雀糞】
 雀の糞【雀】前條に同じ。【雀糞】
 雀の角【雀】假りに在りとするも、
 恐るるに足らぬものの糞。
 雀の涙【雀】物事の極めて些少なる糞。
 雀の糞喜【雀】雀が糞を米と見
 誤りて一時喜びしに、後にて落膽すといふ意よりいふ。初め喜びし事の、その効なき譬。ぬかよこび。
 雀の乞食【雀】時鳥【雀】の歸り
 おくれて、翌年の夏まで雀に養はるるもの。
 雀の枕【雀】雀の擔桶【雀】に同じ。
 【二羽の雀は一錢にて售】る【雀】
 『新約全書』馬太傳第十章に「二羽の雀は一錢にて售るるにあらずや。されど、天の父の許すならば、その一羽と雖も、地に落つることあらじ。爾曹の頭の髪は多き數へらるる故に懼るる勿れ。爾曹は多くの雀よりも優れり」とあるに本づく。天父が吾人を顧念守護し給ふこと斯くの如く深大なれば、此の世の災難迫害等のために心を勞する勿れ。【雀語】
 雀百まで願忘れず【雀】すずめをざり雀語に基きき。言出せるものなるべしといふ。幼き時よりの習慣は、老いても止まず。【雀語】

すずめ【接尾】前條の【雀】を見よ。ある物事の案内を知りてる人の意。【宮すずめ】樂屋すずめ【里】雀
 すずめありき雀行【雀】雀のねぐら離るるほどなる曉の歩行なりといふ。【古語】
 隆信集あかつきの綻ぎに、すずめありきするあみだのひじりの聲も、わが身一つにしむ心地して
 すずめいろさき雀色時【雀】夕ぐれ。ひくれがた。薄暮。黄昏。一説に、夕ぐれの雲なりと。
 すずめいを雀魚【雀】動すすめうを雀魚【雀】に同じ。

すずめうり雀瓜馬腰兒【雀】植山野に自生する蔓草。細長き莖を有し、卷鬚に由りて、他物にまとふ。葉は心臟形にして

すめ

尖り、鋸齒を有す。葉柄は長く互生し、花は小形單性にして黃白色、雌花と雄花と、同様に生ず。果實は小形白色の漿果なり。
 すずめうを雀魚【雀】動うみすめ【海雀】に同じ。
 すずめがくれ雀隠【雀】春、草木の漸く生ひのびて、雀の隠るるほどになりたるもの。【古語】新云もえいてし野邊の若草けさみればすずめがくれにはやなりけり
 すずめがしは雀柏【雀】古、數物をば、すべて、かしといふ。ちやだい茶臺に同じ。
 すずめがた雀形【雀】雀の翅をひろげたる形を圖く描きたるもの。多く屏風の模様などに用ふ。
 すずめがせん雀合戦【雀】多くの雀の群をなして争ひあひ合ふこと。
 すずめがひ雀貝【雀】動腹足類に屬する貝。殼形皿狀、表面褐色粗毛を具へ、布目に似たる彫刻様の文あり。殼の長さ三四分、我が國の近海に生ず。往往あわびささえ等に著生す。いそがひ。山蛸、波よびさしたけの泊のすずめがひ嬉しき世にもあひにけるかな
 すずめがや雀茅【雀】禾本科に屬する草本。原野に自生す。高さ一尺餘、莖葉ともに細し。初秋、淡綠色の小穂花を開く。
 すずめきんちやく雀巾著【雀】植いぬなづな【大葉】に同じ。
 すずめぐさ雀草【雀】植つめぐさ【墳草】
 すずめくち雀口【雀】雀の巢を造りたる時、出入する處となる意。軒先の瓦と瓦との間なる處。
 すずめぐり洲洲廻【雀】洲より洲へとめぐりゆくこと。【古語】堀次雲津よりすめぐりする浦船の沖こぎさかるほのぼのに見ゆ
 すずめぐり雀子【雀】雀の雛。昔燕すずめごと聲鳴きかはす風の集
 すずめこゆみ雀小弓【雀】すめゆみ雀弓【雀】に同じ。
 すずめした雀舌【雀】茶の一種。品質佳なり
 すずめすし雀鮓【雀】攝津國福島にて製する、一種の鮓。江鮓の腹に飯を多く入

れてつくり、大ききも形も雀の如し。炭俵「あさみや菅（せ）にすずめずし盛る」
 小鯛を押したる鮓【議内の語】
 すずめだか雀鯛【雀】動えさ【悦哉】に同じ。
 すずめたこ雀擔桶【雀】植へこそがら【牛皮革】に同じ。
 すずめたひ雀鯛【雀】動硬鯛【鯛】類に屬する魚。體椭圆形にして背部彎曲し、口甚だ斜なり。全身紫色を呈し、内海の岩礁の間に棲息す。あぶらうを。
 すずめちや雀茶【雀】染色の一。栗色にやや黄のまじれるもの。焦茶よりも赤味を帯びたるもの。
 すずめつき錫鍍金【雀】或金屬の上に錫を固著せしむること。石鹼・硫酸・磨砂等にて磨きたる被鍍物を、硝酸鹽錫・明礬・酒石水の混合液中に浸し、後、炭酸マグネシヤの液中にて洗へば得。
 すずめてふ雀蛾【雀】動鱗翅【蛾】類に屬する昆蟲。蛾の一種。各地に産す。體長一寸餘、肥大なり。幼蟲は葡萄を食害す。
 すずめのあは雀栗【雀】植あこのささ【狗尾草】を見よ。
 すずめのあみ雀網【雀】植のみのつりを見よ。
 すずめのうり雀瓜【雀】植こさる合子草【雀】を云ふ。東國の方言
 すずめのうを雀魚【雀】動わかき【若鷺】を云ふ。【駿河國の方言】
 すずめののやど雀御宿【雀】山城國伏見町にありて、雀を飼へる家の稱。
 すずめののかくれ【雀】植きかくれ【雄子隠】に同じ。
 すずめののけやり【雀】植くさやつて【草八手】に同じ。
 すずめののこざり雀子捕【雀】こさることを子捕子捕に同じ。
 すずめののした雀舌【雀】植あめのめ網目【雀】に同じ。
 すずめののたうがらし雀唐辛【雀】植玄參【玄參科】に屬する草。湿地に自生す。形、昨唐辛子【紅蓼】におなじく、夏季、淡紅紫

色の花を開く。
 すずめののちやひき雀茶挽【雀】植禾本科に屬する草。原野に自生す。莖の高さ一二尺。形、烏麥に似たり。夏季、紡錘【紡錘】狀の小穂を垂る。すずめののちやひきぐさ
 すずめののちやひきぐさ雀茶挽草【雀】植前條に同じ。
 すずめののてばう雀鐵砲看麥娘【雀】植禾本科に屬する多年生又一年生の草。山野に自生す。莖は地上に傾き、葉は細長し。春、圓錐狀穗形の小花を開く。すずめのまくらすずめのやり
 すずめののはかま雀袴【雀】植かたばみ【酸漿草】に同じ。
 すずめののはき雀萩【雀】をんじ遺志【雀】を云ふ。【東國の方言】
 すずめのひえ雀稗【雀】植禾本科に屬する多年生の草本。原野に自生す。高さ一二尺。葉は細長くして毛茸【毛茸】を生ず。夏季穂を出す。家畜の飼料に供せらる。からすのやり。燈心草科に屬する多年生の草。芝地に自生す。高さ數寸。春夏の交、葉間より五六寸の花軸を出して、球狀の穂花を著く。地中に澱粉【澱粉】塊を有するが故に、一に芝草【芝草】ともいふ。
 すずめののひやく雀柄杓【雀】植からすびやく【烏柄杓】に同じ。
 すずめのふえ雀笛【雀】小供の玩具の一。中に笛を仕掛けたる莖の上に、張子の雀を乗せたもの。
 すずめののまくら雀枕【雀】植すずめのてばう雀鐵砲に同じ。
 すずめののまつばら雀松原【雀】植津州武庫【郡】魚崎【郡】より深江邊の海濱の松原をいふならんといふ。太平記一族の手勢二百餘騎雀の松原木陰に控へて
 すずめののやり雀槍【雀】植すずめのてばう雀鐵砲に同じ。
 すずめののあんどう雀豌豆小巢菜【雀】植豆科に屬する草。山野に自生し、葉は楕圓形にして、先端は卷鬚を有す。春、淡紫色の蝶形花數箇を著け、莢を結ぶ。牧草とす。いぬえんどう。ひめえんどう。

すめだ

すめの

すずめ(の)をけ 雀等桶・白前【名】蘿摩

(雀科)に属する多年生の草。山野に自生し、春宿根より發生し、高さ一尺ばかりに達す。葉は歪形にて、葉茎共に毛茸あり。初夏の頃、梢の葉の間に、五瓣にして淡紅色もしくは白色な小花むらがり開く。

すずめばうき 雀帚【名】(植) かなびきさう(金引草)【名】(植) ひはき姫萩

すずめはき 雀萩【名】(植) ひはき姫萩を云ふ。(東京の語)

すずめばち 雀蜂【名】(動) くまはち熊蜂すずめひえ 雀碑【名】(植) すずめひえ雀稗【名】(動) 同。

すずめひさご 雀瓢【名】 蘿摩(の)の實。すずめふく 雀河豚【名】 (動) うみすずめ(海雀)【名】 同。

すずめほふし 勸法師【名】 寺院堂宇の建立を勸説する僧。普門出家の身にて、口入せん事、すずめ法師に似たらんれば、すずめまご 雀的【名】 すずめゆみ 雀弓【名】 同。

すずめむぎ 雀麥【名】 (植) ちからすむぎ燕麥に同じ。【名】 ちひさ雀麥に同じ。

すずめや 雀屋【名】 徳川時代に、江戸兩國橋の畔、茅(や)町にありて、大名屋敷などに奉公を望む者の口入を業とせし家。 雀梅【名】 雀屋を御宿はどこか聞いてとめ。

すずめやき 雀焼【名】 餅を開きて、腹雀分忍の如き形となし、串にさして焼き、醬油と酒を合せる汁を附けたる食品。

すずめゆみ 雀弓【名】 雀などを射るほどの小さき弓。一説に、小さき楊弓なりとすずめこゆみ。すずめままと。山雀しのためすずめゆみ張るをのわらはひたひあほしのほしげなるかな。

すずめをどり 雀踊【名】 雀の形に似せて、翅を附け、藥の笠を被りて踊るもの。すずめや 篤屋【名】 小竹にて作りたる屋。堀太東路のしづのすずやのしたさえて山とよまて、候ふるなり。

すずや 錫屋【名】 錫にて徳利などの器具を造る家又これを商ふ家。

すずやか 涼やか【名】 貌 すすしく又は清く

さわやかなるさま。すずやかなる眼

すずやま 錫山【名】 錫を産する山。すずやまくわさん 錫山嶺山【名】 (地) 薩摩國鹿兒郡谷山村にある嶺山。錫を産すること本邦第一とす。明暦元年の發見と傳へ、元禄以後、藩主島津家の有たり。

すずめ 煤湯【名】 煤拂の後に、身に附著せる煤埃などを落すために浴する湯。 澤世風呂 今日煤湯を浴びて、五塵の垢を落し

すずらん 鈴蘭【名】 (植) 蘭科に属する多年生の草木。湿地に自生す。莖の高さ一尺餘。葉は卵圓形。春夏、穂状をなせる深黄色の花を開く。はくさんらん。かきらん。さばらん。

すずり 吸【動四他】 すすること、又そのもの。 鷺鷥 御湯をこしめせと、なくなくきこえたまへば、ひとりすすりまゐるを

すずり 硯【名】 すみすり(墨磨)の略轉 石又は瓦などを形(は)雀めて造り、墨をするに用ふるもの。すみすり。すすりいし。 派氏【名】 すずりおしすすりて

硯の海【名】 げんかい(硯海)の直譯 硯面の上方にありて、一段窪みて墨汁を湛ふる處。硯海。硯池。墨地。

硯の瓶【名】 すずりがめ(硯瓶)に同じ。 硯の箱【名】 すずりばこ(硯箱)に同じ。 硯の蓋【名】 すずりふた(硯蓋)【名】 同

硯の蓋【名】 すずりふた(硯蓋)【名】 同。 硯の蓋【名】 すずりふた(硯蓋)【名】 同。 硯の蓋【名】 すずりふた(硯蓋)【名】 同。

すずりあがり 暖上ぐ【動下二自】 しやくりあぐ。 東海通名所出典阿彌すずり上げて泣きければ

すずりあらひ 硯洗【名】 昔、七月六日に、兒童の肌及び硯を洗ひしこと。その日は硯に梶の葉を添へて、北野の菅公の社に供ふ例なれば、これにならひしなり。つくゑあらひ

すずりいし 硯石【名】 すずり(硯)に同じ。 七職人歌あふことはなほ難ければすずりいし金剛しやうもかなはざりけり

硯の材料となる石。

すずりかみ 硯紙【名】 硯と紙と。 五人女「とかはよろしき女ばかり書きとめよ、と硯紙取寄せて、それを寫しけるに」

すずりがめ 硯瓶【名】 硯にさすための水を入れおく瓶。 みづいれ。 すみすりがめ。 源氏御前のなでしこと……宮の御前の御すずりがめにささせたまへるを

すずりがめ 吸【名】 小供の生れてより三日目の硯に用ふる。 粥。 餅。 玉。 玉。 仁安二年十一月六日庚午自其夜亥時許、有産氣色、卯刻許、平産男子、八日今夜三夜也、吸粥並御前物許也

吸粥の硯【名】 赤兒の産れてより三日めに、吸粥を硯式。

すずりきり 硯切【名】 石又は瓦などを切りて、硯に造ること。又その工人。 七職人歌あふすずりきり。あふことはなほ難けれど硯石こんがうしやうもかなはざりけり

すずりし 硯師【名】 硯を製造する職人。 すずりだんご 吸園子【名】 餅四割と粳(こ)六割との粉にて作りたる園子。

すずりさき 硯磨【名】 硯を磨ぐこと、又その職人。

すずりなき 吸泣【名】 はなしるをすすりつつ泣くこと。 歔歔。 飲泣。 哽咽。 すずりなく 吸泣く【動四自】 すずりあげて泣く。 關八州警馬我れを忘れてすすりなく

すずりのちみ 硯海【名】 (地) 「古來、門司を文字の意にとりなして詠める歌多きによりていふなるべし」とぞ。 豊前國門司(さ)市の前面なる海。 細川園蓋 漢沙草かく袂をもぬらすかな硯の海の水の名残に

すずりばこ 硯箱【名】 硯及びそれに附屬せる墨筆などを入れおく箱。

すずりぶきやう 硯奉行【名】 室町幕府の時、諸家にて、將軍來臨の時、臨時に置き、筆墨文鎮など硯當に附屬したる器具を沙汰することを奉行せしめし役。

すずりふた 硯蓋【名】 硯箱の蓋。 古は花果などを載するに用ひたり。 【名】 その形を【名】に模して造り、口取者などを盛るに用ひしもの、又その盛りたる口取者など。

廣蓋(の)類。 すずりふたもの 硯蓋物【名】 くちざりかな(口取者)を見よ。

すする 吸る【動四他】 氣息を内にひきて吸込む。 すずるふ。 吸る。 參照 御湯をこしめせと、泣く泣くきこえたまへば、一すずりまゐるを 【名】 漢の氣息につれて吸込む。 派氏 鼻すずりあへり

すずる 漫【名】 何となく心進むさま。 ぞろ。 みだり。 あてなし。 むやみ。 すずろ。 すずろか。 派氏 よべもすずろに起きあかして 【名】 思ひもかけぬさま。 何の理由關係もなきさま。 ぞろろ。 唐突。 派氏 すずろなる人も、ところからものあはれなり

すずろありき 漫歩【名】 あてどもなく歩むこと。 ぞろろありき。 散策。 徐歩。 漸正 黨はしだかのすずろありきにあらばこそかりとも人の思ひなされぬ

すずろか 漫【名】 すずる漫に同じ。 (古語) すずろがまじ 漫がまし【形】 心すずろなるさまなり。 すざばらし。 (古語) 夫不「山里のそとの岡の高き木にすずろがましき秋せみのこと」

すずろぐ 漫【動四自】 心すずろに進む。 心はやる。 氣進む。 ぞろろ。 (古語) 派氏 この男、いたくすずろきて、門近き廊のすのこだつものに尻かけて、 【名】 すずろに恥して。 ぞろろ。 (古語) 參照 いとすずろきて、とみにいひもいだし

すずろくさ 漫種【名】 すずろなるしわざ。 よしなき仕業(古語) 左京大夫黨すずろぐさなりしを、ついでに、誠しく申しわたらししかど

すずろこころ 漫心【名】 すずろなる心。 何となき心。 あてもなき考。 よしなきおもひ。 ぞろろ。 (古語)

すずろこと 漫事【名】 すずろなる事がら。 あてもなき事。 よしなしこと。 (古語)

すずろこと 漫言【名】 よしなきものがたり。 すずろなる言葉。 (古語) 派氏 例は筆にむかしうすたる、すずろことをさへいはせまほしうしたまふを

すずろはじ 漫はし【形】 すずろにてあ

すずろ

「すずろはし。そぞろはし。」(古語) 聖花
「うちおもひたまへる御けしきども、すずろはし。くおぼさるべし」

「すずろふ。吸ふ。」(動四他) する(吸ふ)の延。
[古語] 萬葉「雨まじり雪の降る夜はすべもなく寒くしあればかたしほをとりつつしるひ糟湯酒うちすするひて」

「すずろふ。漫。」(動上二自) するろに感ず。
思はずにてあり。(古語) 源氏「さすがに、うちあたままへるけしきはしたなうすずろふたり」

「すずろ。もの。が。たり。漫。物。語。」[名] 何となき話。とりとめなき物語。すずろごと。(古語) 著聞「雨降り、風おどろおどろしかりける夜、侍ども集りて、すずろものがたりしけるに」

「すずろ。を。り。落。」[名] 歳末の煤掃(すすり)。東里新話「中華のすずろはきは正月晦日なり。ただ吳國は十二月なり。歳時紀異に、十二月二十七日掃屋塵曰除殘、十二月十三日すずろをさめ、清官曆曰十二月十三日宜掃屋宇と、これは、雍正年中の曆にて、甚だ近代のことなり。今東都も、この日を以て家々すずろをさむ。誠にめでたきためしなるかな」

「すずろ。を。り。落。」[名] 歳末の煤掃(すすり)。東里新話「中華のすずろはきは正月晦日なり。ただ吳國は十二月なり。歳時紀異に、十二月二十七日掃屋塵曰除殘、十二月十三日すずろをさめ、清官曆曰十二月十三日宜掃屋宇と、これは、雍正年中の曆にて、甚だ近代のことなり。今東都も、この日を以て家々すずろをさむ。誠にめでたきためしなるかな」

「すずろ。を。り。落。」[名] 歳末の煤掃(すすり)。東里新話「中華のすずろはきは正月晦日なり。ただ吳國は十二月なり。歳時紀異に、十二月二十七日掃屋塵曰除殘、十二月十三日すずろをさめ、清官曆曰十二月十三日宜掃屋宇と、これは、雍正年中の曆にて、甚だ近代のことなり。今東都も、この日を以て家々すずろをさむ。誠にめでたきためしなるかな」

「すずろ。を。り。落。」[名] 歳末の煤掃(すすり)。東里新話「中華のすずろはきは正月晦日なり。ただ吳國は十二月なり。歳時紀異に、十二月二十七日掃屋塵曰除殘、十二月十三日すずろをさめ、清官曆曰十二月十三日宜掃屋宇と、これは、雍正年中の曆にて、甚だ近代のことなり。今東都も、この日を以て家々すずろをさむ。誠にめでたきためしなるかな」

「すずろ。を。り。落。」[名] 歳末の煤掃(すすり)。東里新話「中華のすずろはきは正月晦日なり。ただ吳國は十二月なり。歳時紀異に、十二月二十七日掃屋塵曰除殘、十二月十三日すずろをさめ、清官曆曰十二月十三日宜掃屋宇と、これは、雍正年中の曆にて、甚だ近代のことなり。今東都も、この日を以て家々すずろをさむ。誠にめでたきためしなるかな」

「すずろ。を。り。落。」[名] 歳末の煤掃(すすり)。東里新話「中華のすずろはきは正月晦日なり。ただ吳國は十二月なり。歳時紀異に、十二月二十七日掃屋塵曰除殘、十二月十三日すずろをさめ、清官曆曰十二月十三日宜掃屋宇と、これは、雍正年中の曆にて、甚だ近代のことなり。今東都も、この日を以て家々すずろをさむ。誠にめでたきためしなるかな」

すそ

「入りかかるをちの夕日はかげきてすそより暮るるうすぎりの山」[馬]の四足を洗ふこと。洗馬。狂言御書「お馬のすそを冷す」

「すそ。呪。呪。呪。」[名] じゆそ(呪詛)の約。
[古語] 聖恩「その大將をすそし、殺したてまつりても」

「すそ。呪。呪。呪。」[名] じゆそ(呪詛)の約。
呪詛の被(ひ)。(古語) 其「ものよくいふ被(ひ)除く祈禱(ご)」。河原に出て、すそのおんやうじして、河原に出て、すそのはらへしたる」

「すそ。あ。ひ。だ。に。裾。合。谷。」[名] 火山の裾野の相合して、作りたる谷。[古語] 其「ものよくいふ被(ひ)除く祈禱(ご)」。河原に出て、すそのおんやうじして、河原に出て、すそのはらへしたる」

「すそ。あ。ひ。だ。に。裾。合。谷。」[名] 火山の裾野の相合して、作りたる谷。[古語] 其「ものよくいふ被(ひ)除く祈禱(ご)」。河原に出て、すそのおんやうじして、河原に出て、すそのはらへしたる」

「すそ。あ。ひ。だ。に。裾。合。谷。」[名] 火山の裾野の相合して、作りたる谷。[古語] 其「ものよくいふ被(ひ)除く祈禱(ご)」。河原に出て、すそのおんやうじして、河原に出て、すそのはらへしたる」

「すそ。あ。ひ。だ。に。裾。合。谷。」[名] 火山の裾野の相合して、作りたる谷。[古語] 其「ものよくいふ被(ひ)除く祈禱(ご)」。河原に出て、すそのおんやうじして、河原に出て、すそのはらへしたる」

「すそ。あ。ひ。だ。に。裾。合。谷。」[名] 火山の裾野の相合して、作りたる谷。[古語] 其「ものよくいふ被(ひ)除く祈禱(ご)」。河原に出て、すそのおんやうじして、河原に出て、すそのはらへしたる」

「すそ。あ。ひ。だ。に。裾。合。谷。」[名] 火山の裾野の相合して、作りたる谷。[古語] 其「ものよくいふ被(ひ)除く祈禱(ご)」。河原に出て、すそのおんやうじして、河原に出て、すそのはらへしたる」

「すそ。あ。ひ。だ。に。裾。合。谷。」[名] 火山の裾野の相合して、作りたる谷。[古語] 其「ものよくいふ被(ひ)除く祈禱(ご)」。河原に出て、すそのおんやうじして、河原に出て、すそのはらへしたる」

すそつき

「すそつき。裾。附。」[名] 著物の裾のありさま。聖恩「御ぞの重なりたるすそつき」

「すそつき。裾。附。」[名] 著物の裾のありさま。聖恩「御ぞの重なりたるすそつき」

「すそつき。裾。附。」[名] 著物の裾のありさま。聖恩「御ぞの重なりたるすそつき」

「すそつき。裾。附。」[名] 著物の裾のありさま。聖恩「御ぞの重なりたるすそつき」

「すそつき。裾。附。」[名] 著物の裾のありさま。聖恩「御ぞの重なりたるすそつき」

「すそつき。裾。附。」[名] 著物の裾のありさま。聖恩「御ぞの重なりたるすそつき」

「すそつき。裾。附。」[名] 著物の裾のありさま。聖恩「御ぞの重なりたるすそつき」

「すそつき。裾。附。」[名] 著物の裾のありさま。聖恩「御ぞの重なりたるすそつき」

「すそつき。裾。附。」[名] 著物の裾のありさま。聖恩「御ぞの重なりたるすそつき」

「すそつき。裾。附。」[名] 著物の裾のありさま。聖恩「御ぞの重なりたるすそつき」

すぞろ

「すぞろはし。漫はし。」[形二] するばし漫はしに同じ。(古語) 左京大夫「わが心のうちも、つれなくすぞろはし。藤壺の方さまたちも見るに、昔住みにし事のみ思ひ出でられて」

「すぞろはし。漫はし。」[形二] するばし漫はしに同じ。(古語) 左京大夫「わが心のうちも、つれなくすぞろはし。藤壺の方さまたちも見るに、昔住みにし事のみ思ひ出でられて」

「すぞろはし。漫はし。」[形二] するばし漫はしに同じ。(古語) 左京大夫「わが心のうちも、つれなくすぞろはし。藤壺の方さまたちも見るに、昔住みにし事のみ思ひ出でられて」

「すぞろはし。漫はし。」[形二] するばし漫はしに同じ。(古語) 左京大夫「わが心のうちも、つれなくすぞろはし。藤壺の方さまたちも見るに、昔住みにし事のみ思ひ出でられて」

「すぞろはし。漫はし。」[形二] するばし漫はしに同じ。(古語) 左京大夫「わが心のうちも、つれなくすぞろはし。藤壺の方さまたちも見るに、昔住みにし事のみ思ひ出でられて」

「すぞろはし。漫はし。」[形二] するばし漫はしに同じ。(古語) 左京大夫「わが心のうちも、つれなくすぞろはし。藤壺の方さまたちも見るに、昔住みにし事のみ思ひ出でられて」

「すぞろはし。漫はし。」[形二] するばし漫はしに同じ。(古語) 左京大夫「わが心のうちも、つれなくすぞろはし。藤壺の方さまたちも見るに、昔住みにし事のみ思ひ出でられて」

「すぞろはし。漫はし。」[形二] するばし漫はしに同じ。(古語) 左京大夫「わが心のうちも、つれなくすぞろはし。藤壺の方さまたちも見るに、昔住みにし事のみ思ひ出でられて」

「すぞろはし。漫はし。」[形二] するばし漫はしに同じ。(古語) 左京大夫「わが心のうちも、つれなくすぞろはし。藤壺の方さまたちも見るに、昔住みにし事のみ思ひ出でられて」

「すぞろはし。漫はし。」[形二] するばし漫はしに同じ。(古語) 左京大夫「わが心のうちも、つれなくすぞろはし。藤壺の方さまたちも見るに、昔住みにし事のみ思ひ出でられて」

との關係にて、我が一圓につき、英貨二志
(約)二片(約)の類。
すだいじん 寸大臣【名】すは接頭語のす
すだいじん 寸大臣【名】すは接頭語のす
(素)なるべし」大臣にして、兼官なきも
の。後世群臣す大臣號「香取官人」召具條
勿論

すたいる (英 State) 【名】すたいうさい。すが
た。風體。【美】やうし(様式)に同じ。
すたうじんけいりくわうてい 崇道盡敬皇帝
【名】(人)とせりんやうてい(舍人親王)を見よ。
すたうてんわう 崇道天皇【名】(人)「早良
(天)親王の追號。光仁天皇の皇子。桓武天
皇の御代に、皇太子となりて、萬機を攝せ
しむ。延暦四年中納言藤原種繼を思み、乙
未にして射殺せしめたる罪によりて、乙訓
(の)寺に幽せられ、のち淡路に流され、途
中に薨す。同十一年この尊號を贈らる。

すたか 巢鷹【名】巢の中に居る雛鷹。狩
に使用する鷹は、これ等を馴養せしなり。
すたかやま 巢鷹山【名】すま巢山に
同じ。

すたか 巢鷹【名】巢の中に居る雛鷹。狩
に使用する鷹は、これ等を馴養せしなり。
すたかやま 巢鷹山【名】すま巢山に
同じ。

すたか 巢鷹【名】巢の中に居る雛鷹。狩
に使用する鷹は、これ等を馴養せしなり。
すたかやま 巢鷹山【名】すま巢山に
同じ。

すたか 巢鷹【名】巢の中に居る雛鷹。狩
に使用する鷹は、これ等を馴養せしなり。
すたかやま 巢鷹山【名】すま巢山に
同じ。

すたか 巢鷹【名】巢の中に居る雛鷹。狩
に使用する鷹は、これ等を馴養せしなり。
すたかやま 巢鷹山【名】すま巢山に
同じ。

すたか 巢鷹【名】巢の中に居る雛鷹。狩
に使用する鷹は、これ等を馴養せしなり。
すたかやま 巢鷹山【名】すま巢山に
同じ。

人坊主の類。手に扇と錫杖を持ち、鉢巻
をしめ、寒中素襦袢にて、腰に注連縄を引
きまはし「すたすたすたすたすたすた坊主
のくる時は、腰に七九のしめを張り云云」
とたひ、門に立ちて、物を乞ひし乞食僧。
京阪地方にて、天保の頃尙存せしとい
ふ。雙生開川、難行苦行のすたすた坊主
すたすたいふてぞ加持しける」

すたち 酢橘【名】「酢」橘(の)の略。橘
より絞れたる酢。(阿波國の方言)
すたち 巢立【名】鳥の雛の巢だつこと。
【産婦が産後健康回復し、床上げするこ
と。】小供が父兄の監督を離れて、獨立
すること。

すたち 直立【名】眞直に生ひたる木。盛
衰の極の木のすたち、一本ねち切り」
すたち ちかぶら 巢立燕【名】もやしの燕
すたち ちどり 巢立鳥【名】始めて巢だちた
る鳥。

すたちやう (英 Satiate) 【名】しきま(視距離)
すたちやう (英 Satiate) 【名】しきま(視距離)
すたちやう (英 Satiate) 【名】しきま(視距離)
すたちやう (英 Satiate) 【名】しきま(視距離)

すたつ 巢立つ【動四自】鳥の雛、成長し
て、巢を離れ去る。源氏ひきわかれとし
はふれども鶯のすたつし松のねをわすれ
めや」
すたつ 巢立つ【動二他】巢だつやうに
なかしむ。拾遺松が枝のかよへる枝をと
ぐらてすたつてらるべき鶴の雛かな」

すたつ 須達【梵 Satvata】【名】(人)「しゅだち
(須達)を見よ。
すたつ かつか (伊 Saccato) 【名】(音)音の分
離を鮮明に奏唱すべき意を示すために、
音符の上又は下に附する黒點又は垂線。
超音。

すたつ ちやうじや 須達長者【名】(人)「し
ゆだちやうじや須達長者」を見よ。太平記
「合備國の大須達長者、この國に一つの
精舎を建て、佛を安置し奉らんとために、
すたつ 素手綱【名】手綱を手に執らず、
鞍の前輪に懸ること。(馬術の語)
すたつ (英 Saddle) 【名】汽車が各膝を發車
する毎に、機關士が、腰長より受くる許可

すたつ (英 Saddle) 【名】汽車が各膝を發車
する毎に、機關士が、腰長より受くる許可

の發車證。形は種種あれど、いづれも銅製
にして、木製の柄を有す。兩隣間にただ一
箇あるのみ。また各隣間、その形を異にす。
すたつ ちきつ ぶ staffers 切符【名】汽車を
續發せしむる場合に、staffs 代用として、
與ふる切符。Staffs の鍵にあらずれば開
く能はざる函に納め置くものとす。
すたて 素建【名】新築の家の未だ屋根、
壁柱などのみにて、造作の出来あがらぬ
こと又その家。

すたて 簀立【名】「清湖のとき、海中に簀
を立てきりおき、干沙に伴ひて出でんとす
る魚を捕ふこと。【語味】(の)の中に立
置く竹籠。圓くして長く底なきもの。籠の
中に集り来る汁を汲取るために設く。
すたて 簀立【名】竹の籠を厚くつくり、弓
矢を防ぐ楯に用ひしもの、昔、船戰に用ひ
きといふ。

すたて 酢立 醋立【名】魚の薄身を四角
に切り、五分許にして、刺身の添(の)とする
もの。食せざるを禮とす。【料理の語】
すたないたいし 須達拳太子【名】(人)「そだ
なたいし(蘇達拳太子)に同じ。
すたのちきし 須田浮島【名】(地)「うき
しま(浮島)を見よ。
すたのはは 節【名】(度)「元祿頃流
行せる一種の小唄。

すたべ 數度【名】(度)「數度」に同じ。
すたべ 葉戸【名】おくつすたべ(奥津葉戸)
を見よ。起葉戸、此云須多(の)「
すたま 魑魅【名】鬼の類。山林木石の精
氣。(古語)和名魑魅。山海經云、魑、須太
萬、鬼類也。唐韻云、魑魅也、玉篇云、魑老物
精也」

すたん かは スタン草【名】さかんかは(サチ
ン草)に同じ。
すたん ぶ (英 Stamp) 【名】けいん(消印)に
すたん (蘭 Stamped) 【名】經に麻を緯に
は羊毛を用ひたる一種の織物。徳川時代
に、和蘭國より舶來せり。博多小女(の)遺基金
に、匳かした衣裳つき、各さるぜ・羅紗(の)
すためん (蘭 Stannet) 【名】前條に同じ。

すたらん しし【名】(動)わじな(格)に同じ。
すたり 廢【名】すたれ(廢)に同じ。「じ。
すたり がみ 廢紙【名】かみくづ(紙屑)に同
すたり もの 廢物【名】すたれもの(廢物)に
同じ。
すたり もの 廢者【名】すたれもの(廢者)に
同じ。
すたる 廢る【動四自】すつ(捨つ)と語源
を同じくす「衰へて捨てる。不用にな
る。はやらぬやうになる。
すたる 廢る【動下二自】前條に同じ。
すたれ 廢【名】すたるること。すたり。
すたれ 廢【名】「養(の)垂(の)義」竹を
細く裂き、編み列て物の隔とし、又は日
光を遮るなどに用ふ。和名簾須太證
編竹帷也」【古の牛車(の)輿等に備へ
し具。【横綱(の)】のある織物。
青葉の簾【名】古、卯月初日に、大内の
南の角に、もろ柳とて、相對して二株あ
る柳に懸け、その日の暮がたに取入れら
れたる簾。この日は宮中に更衣(の)知
儀行はれしにより、簾を綺麗にして掛け
られしなり。

すたれ あげ 簾上【名】越後地方の雪國に
て、八十八夜の頃より降雪止むや、冬の間
雪を防ぐために、家の門口におろしたる
簾を上げて、商を始むること。
すたれ がみ 簾貝【名】(動)辨鰒(の)類に
屬する軟體動物。あきりに似て大きく、
殻の表面に簾の如き密なる條理ある貝。
山嵐(の)波かふふきあげの濱のすたれがひ
風もぞおろすいそぎ拾はる」
すたれ ちし 簾越【名】簾を隔つること。
一代女簾越に色聲掛けて、寄らうやれませ
いといふも、よしなや」
すたれ しやうじ 簾障子【名】中央又は一
部に簾を張りこめたる障子。夏用ふ。
すたれ ちざり 簾千鳥【名】瘦せたる、一
種の千鳥を描ける模鳥。
すたれ ちやうや 簾茶屋【名】粗末なる簾に
すたれ ちやうや 簾茶屋【名】粗末なる簾に
すたれ ちやうや 簾茶屋【名】粗末なる簾に
すたれ ちやうや 簾茶屋【名】粗末なる簾に

すたれ ちやうや 簾茶屋【名】粗末なる簾に
すたれ ちやうや 簾茶屋【名】粗末なる簾に
すたれ ちやうや 簾茶屋【名】粗末なる簾に
すたれ ちやうや 簾茶屋【名】粗末なる簾に

すだれふ

すだれふ 簾懸「名」焼豆腐のごとき形に薄く製し、簾の間に挟みて懸して、細かき横條を印せしめたる簾。

すたれもの 廢物「名」不用となりたる物。すたれもの。はいぶつ。

すたれもの 廢者「名」使ひみちの絶えたる人。無用の者。すたりもの。

すち 須知「名」地 丹波國船井郡にある町。國部「名」町の西北二里半。一名、志宇知。

すち 周智「名」地 遠江國六郡の一。郡役所を森町に置く。

すち筋「名」筋肉の纖維。血脈。血管。血脈。名義筋脈スデチノミチ。細長きもの。線。細長く通りたるもの。綫物の縫ひの綫。綫物の表面に見ゆるあや。すじやち。家のつづき。いへがら。

すちめ 血統。血脈。家系。「古語」源氏「父おとどのすちさへくははればにや、しなたかくうつくしげなり。」すちみち。すちめ。とわけ。いはれ。修理。事理。道理。源氏常にかやなるすち、のたまひつくる心のほどこそ、われながらうたましけれ。曲曲山山「何とてすちなき事を申すぞ。」すちの方面。「そのすちの黒人」。

すち 越向「名」芝居のすち。船の荷替に附くもの。芝居の鉢の上部。八幡座より周邊へ派出せる筋金。癩病の遺傳ある家すち。「東京の語」。

筋「名」筋肉の纖維。血脈。血管。血脈。名義筋脈スデチノミチ。細長きもの。線。細長く通りたるもの。綫物の縫ひの綫。綫物の表面に見ゆるあや。すじやち。家のつづき。いへがら。

筋「名」筋肉の纖維。血脈。血管。血脈。名義筋脈スデチノミチ。細長きもの。線。細長く通りたるもの。綫物の縫ひの綫。綫物の表面に見ゆるあや。すじやち。家のつづき。いへがら。

筋「名」筋肉の纖維。血脈。血管。血脈。名義筋脈スデチノミチ。細長きもの。線。細長く通りたるもの。綫物の縫ひの綫。綫物の表面に見ゆるあや。すじやち。家のつづき。いへがら。

筋「名」筋肉の纖維。血脈。血管。血脈。名義筋脈スデチノミチ。細長きもの。線。細長く通りたるもの。綫物の縫ひの綫。綫物の表面に見ゆるあや。すじやち。家のつづき。いへがら。

筋「名」筋肉の纖維。血脈。血管。血脈。名義筋脈スデチノミチ。細長きもの。線。細長く通りたるもの。綫物の縫ひの綫。綫物の表面に見ゆるあや。すじやち。家のつづき。いへがら。

筋「名」筋肉の纖維。血脈。血管。血脈。名義筋脈スデチノミチ。細長きもの。線。細長く通りたるもの。綫物の縫ひの綫。綫物の表面に見ゆるあや。すじやち。家のつづき。いへがら。

筋「名」筋肉の纖維。血脈。血管。血脈。名義筋脈スデチノミチ。細長きもの。線。細長く通りたるもの。綫物の縫ひの綫。綫物の表面に見ゆるあや。すじやち。家のつづき。いへがら。

すち

すち筋「助数」線又は棒状の物を数ふる時にいふ語。三筋の線。平道矢一筋にそれほど弱るか。百文づつ錢差のに差したる錢を数ふる時にいふ語。丹波興作「おあし三筋買ひたい物買やや」古今百馬馬の蹄に、玉屋で御一筋。

すち 術「名」じつ術の轉。「古語」

すちあひ 筋言「名」事の廻りあひ。修理。いひ立て、他を批難すること、又その人。とくに理屈をいふ人。

すちいひ 筋言「名」何につけても道理をいひ立て、他を批難すること、又その人。とくに理屈をいふ人。

すちいひ 筋言「名」何につけても道理をいひ立て、他を批難すること、又その人。とくに理屈をいふ人。

すちいひ 筋言「名」何につけても道理をいひ立て、他を批難すること、又その人。とくに理屈をいふ人。

すちいひ 筋言「名」何につけても道理をいひ立て、他を批難すること、又その人。とくに理屈をいふ人。

すちいひ 筋言「名」何につけても道理をいひ立て、他を批難すること、又その人。とくに理屈をいふ人。

すちいひ 筋言「名」何につけても道理をいひ立て、他を批難すること、又その人。とくに理屈をいふ人。

すちいひ 筋言「名」何につけても道理をいひ立て、他を批難すること、又その人。とくに理屈をいふ人。

すちいひ 筋言「名」何につけても道理をいひ立て、他を批難すること、又その人。とくに理屈をいふ人。

すちいひ 筋言「名」何につけても道理をいひ立て、他を批難すること、又その人。とくに理屈をいふ人。

すちいひ 筋言「名」何につけても道理をいひ立て、他を批難すること、又その人。とくに理屈をいふ人。

すちいひ 筋言「名」何につけても道理をいひ立て、他を批難すること、又その人。とくに理屈をいふ人。

すちいひ 筋言「名」何につけても道理をいひ立て、他を批難すること、又その人。とくに理屈をいふ人。

すちかみ

すちかみ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちかみ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちかみ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちかみ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちかみ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちかみ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちかみ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちかみ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちかみ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちかみ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちかみ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちかみ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちかみ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちかみ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちかみ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちぐろ

すちぐろ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちぐろ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちぐろ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちぐろ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちぐろ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちぐろ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちぐろ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちぐろ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちぐろ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちぐろ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちぐろ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちぐろ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちぐろ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちぐろ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すちぐろ 筋違身「名」すちかみにしたる形。傾城と喚ぶ。三味線の天柱に貌をすちかみ身、絲の音色も月の色も。

すぢみす 筋簾 **【名】**すぢすたれ(筋簾)に
同じ。

ままにす。見過ぐす。かまはず。見すつ
目なげ出す。失ふ。おとす。

すつすつの木地の臺前へすつしり飾らせたり」

【貌】物の滯らず滑かにすべりゆを

すつとんとん【貌】前條に同じ。

そのままだし置く。

すてがかり 捨簀 [名] 番人も置かず、ただ焚放しにしたる簀。 蕪 [名] みじか夜や波うちぎはのすてがかり

すてがき 捨書 [名] かくすて、書捨 [名] にすてふた捨札 [名] に同じ。

すてがく 捨書 [名] 動四他 [名] すてがきにす。書きすつ。 [古語] 源氏「白き紙にすてがいたまへるしもぞ、なかなかをかしげなる」

すてがな 捨假名 [名] おくりがな送假名 [名] に同じ。

すてがね 捨鐘 [名] 時の鐘を鳴らす前に、まづ注意のために、三度打つ鐘。捨鼓 [名] 捨太鼓の類。 [定数として數へざる回数。

すてがね 捨金・捨銀 [名] 身受をし、妾を雇ふ時などにまづ渡す金。 雪女五人羽子板 [名] 酒のお伽に、それ機を、三年限つて置きたいとの御事。三十兩は捨金、四季のしきせに遣ひがね。 世間娘賀すてがねにて萬の質物を受けもどし。 [無駄に費す金。返済を豫期せぬ金。

すてがはけ 捨土器 [名] 酒を飲む時、餘瀝をしたむけはけ。ひきがはけ。したがはけ。すてがき。 [名] 退却の際、後に伏屈 (おろ) の兵を残し置くこと。 甲冑軍勢拂ひたる陣屋に人数を残し置くは、すてがかりといふ物なり

すてがみ 捨髪 [名] 産毛 (うぶ) のそぎ捨てたるもの。

すてき 素敵・素敵 [名] 非常。めっぽ。澤山。仰山。 [但語] 「すてきに早い」

すてきん 捨金 [名] すてがね (捨金) に同じ。一代玄 [名] 奉公人の肝煎渡世とすること。捨金 [名] 百兩の内、一兩取るなり

すてきめ 素敵減法 [名] すてき素敵に同じ。

すてきめ ばうかい 素敵減法 [名] 條に同じ。すてき 捨草 [名] 捨てたる草。 用明天皇 暇人髪身をうめ草と捨草も、まことに照らす月草の

すてが 捨草 [名] 蠶 (さ) が藻鹽に焼きたる

すてぐすり 捨藥 [名] 効力なしとは知りながら使用する藥。

すてぐり 捨首 [名] 切り捨てたる首。 [歩卒の首]

すてぐる 捨郭 [名] 山城を築く時、郭のごとく地を切りならしたるまゝにて、塀を設けずにおきたるもの。 去来月見せん伏見の城のすてぐるわ

すてぐ 捨子捨兒 [名] 親の貧しきか、又は事情ありて育つることかなはぬため、往來などに捨てたる赤子。 棄兒 [名] 棄兒 [名] 捨てこに添へたりし歌

すてぐ 捨子 [名] 捨子の如く世にたよることなき者は、みづから困難に耐へて、心を練ること多ければ、そのため

すてぐ 捨詞 [名] 立去る際に言放ちて行く詞。すてぜりふ。 本朝三國義を知らぬ女、あれいなせいなせと御捨詞にがにがしく、御簀さつと下るるを見て

すてぐ 葉子花 [名] 〔植〕 しびさば (死人花) に同じ。

すてぐ 孫子偏 [名] 漢字の偏の「孔」孫「孤」などの左にある子の字。

すてぐ 捨衣 [名] 見殺しにすること。すてぐ 捨衣 [名] 著る人もなく捨てたる衣服。 [古語] 後集「すてぐかいせをのあまのすてぐろもしほなれたり人々見るらん」

すてぐ 捨盆 [名] 返盆を豫期せずになす盆。 酒宴の終などにす盆。 手に取る人なくして取散しある盆。 若風鶴いまだ枕に在りし捨盆を取上げて、これ皆君のお口の添ひし跡ぞと戴かせて

すてぐ 葉三寶 [名] 物を疎末にとりあつかふこと。

すてぐ 捨城 [名] あきじ (明城) に同じ。すてぐ 捨臺詞・捨白 [名] 俳優が登場又は退場する時、相手なしに、一人つてや詞。 [すてぐは捨詞] に同じ。

すてぐ 捨訴 [名] 江戸幕府時代に、訴狀を評定所又はその他の官衙・老中等の門前に陰かに置いて、願意を達せんとせしこと、

又その訴狀。すてぶみ。

すてそ 捨訴狀 [名] 捨訴 (す) の訴狀。すてぶみ。

すてそ 捨育 [名] 親に捨てられてそだつこと。 捨兒同様にせられながらも生長すること。

すてだい 捨太鼓 [名] 時の太鼓を打つ前に、先づ注意のため、數の外に鳴らす太鼓。捨鐘捨鼓 [名] の類。

すてき 捨 [名] 英 Composing 略記 (文選) の濟みの活字を組むとき、左の手に持て、その活字を植えならぶ金屬製の淺き箱形のもの。

すてきばん スタツキ版 [名] すろちんぐまじんの俗稱。

すてつ 捨土 [名] 高き處を崩しなどして不用になりたる土。 [ふ語]

すてつ 素丁稚 [名] 丁稚を蔑しめて、すてつ 捨鼓 [名] 王朝時代に、時を報ずる鼓を打つ場合、まづ注意のために、定數以外に打鳴らししこと。 捨鐘捨太鼓の類。

すてつ 素頂邊 [名] 〔素〕は接頭語 [一番に高きところ。この上なきてつべん [但語]

すてつ 捨妻 [名] 見捨てたる女房。縁を絶ちたる妻。

すてつ 素手 [名] 次條の略。すてつ 素手踊 [名] 短き滑稽なる踊の一。落語家圓遊の創めしものといふ。すてつ

すてつ 素手 [名] 元祿頃、江戸吉原にて流行せる一種の小唄の節。すてつ 捨時 [名] 捨つべき時期。 也有

すてつ 捨時 [名] 捨つべき時期。 也有 [すてつを知らぬ案山子の弓矢かな]

すてつ 捨處 [名] 捨つる場所。 天の綱鳥ふたり命のすてつ 柳 津香は生きたおやちのすてつ

すてに 既に・已に [副] 前より。早く。より。とくに。 萬葉 梓弓ひきみゆるべみ思ひみてすてに心はよりにしものを [残らず。ことごとく。 [古語] 萬葉 天の下すてにおほひてふる雪のひかりを見ればたふとくもあるか] [はや。もはや。今すこしにて。すんでのこと。すつてのこと。に。殆んど。

既に斯う [句] 「今は斯う」に同じ。 平家 既にかうと見えし時

すてに 既に・已に [副] 〔接〕 かくするうちに。 かかる間に。 [價]

すてね 捨直 [名] 捨つるが如く安く賣るすてのことに 既にの事に [副] すてに既に [に] に同じ。

すてばう 捨坊主 [名] 宿もなく流浪せる僧。また僧を罵りていふ語。 娘歌加留多 [源五驚きやあ捨坊主いはれぬ命もらひだてか] 五人玄油断のならぬ世の中に、殊更見せまじきは、道中の肌附金の彩、酒の酔に脇差、娘のきはに捨坊主と

すてばう 捨柱 [名] 庇の下柱の、地上まで達ししもの。

すてばう 捨撥 [名] 三味線を弾く時、定まりたる曲の前又は後に調子づくるために撥を使ふこと。

すてばう 捨鉢 [名] 己れの思ふとほりにならぬより、自暴自棄の行をすること。やけくそ。 [但語]

すてび 捨火 [名] 背、清浄なる火を使用せんとする時、新に鑽火 (くわ) にて調へて用ひ、もとの火又はそれに煮沸したるものを、捨てて用ひざりしこと。 [る庇]

すてび 捨庇 [名] 〔建〕 捨柱の附きたすてび 捨髪 [名] 上下 (うへ) の袴の兩側、あひびきの上部に斜めにあるひだ。

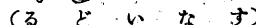
すてび 捨人 [名] 〔すてび世捨人〕 に同じ。 [古語] 仲思染色をむる木の葉はよきてすてびとの袖にしろれの降るかひぞなき [備曲檢道] ころは處も白河の水さへ深きその罪を、浮びやすと捨人に値遇を運ぶ足りの山下庵に著きにけり

すてぶ 捨歩 [名] 竿入 (つ) の際、不良の

破を蒸す「句」二枚麤糸の六丁・阿蘇糸
不_レ斷_レ姪修_二禪定_一者、如下_二蒸_一砂石_二欲_二中_一
成_二飯_一とあり』物の成るべからざる譬

1.0000

BBC



40511

すなごり

すなごりふね 漁船【名】いさりふね(漁船)【目】同じ。

すなごる 漁る【動四他】魚貝などを取る。漁獲をなす。いさる。【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなごり 沙塗 砂塗【名】すなかべ(砂壁)【目】同じ。

すなほ

夜著を掛けて横臥し、床下より火氣を通じて暖を取る装置のもの。明治の末より東京市外大森邊にその營業をなすもの多し。さき(砂浴)参照。

すなほ 素直【名】飾なくありのままなさま。質素。質朴。古語。古今早ぶる神代には、歌の文字も定まらず、すなほにして、事の心わきがたかりけらし。心の曲らぬさま。正直。柔和にして、人に逆はぬこと。従順。【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなほ 沙埃 砂埃【名】すなごり(沙埃)【目】同じ。

すなも

づから草を刈り、土石を撿ひ、泥濘を乾かせて、参詣往來の煩なし。古例今に絶えず、神前に眞砂を撿ひたまふ。これを遊行の砂持と申しはべると、亭主の語りける。【目】同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなも 砂持 砂持草 砂持草【名】(植)いも草(石持草)に同じ。

すなあて

脇より火を出す【句】困窮甚しくして、奔走す。脇から火が出る。不可得物語「外には、富貴の物がたり。内には、脇より火を出す」

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。

すなあて 脇 脇【名】父兄の厄介になる。すなあて(脇)参照。【目】同じ。



(白てあねす)

すねす 素鼠【名】染色の一。鼠色の最も淡きもの。まじりけなき鼠色。

すねはき 脇脛【名】次條の註。平家安藤島一足行きては歩みかね、すべる飛脚の脛ばき。

すねはき 脇脛【名】足のすねとはぎと狂言大目すなはち身共をば、脇脛ばかり伸ひ居て、厚く折檻なされる。

すねはき 脇脛【名】能の狂言の一。生蓮手と被褥と道連になりて、芥川(形)の天神(夢語)の途中、互に歌を詠みて、相手を罵り合ふことを作れるもの。芥川。

すねふり 脇振【名】遊客の花街をひやかしく歩くこと。ちまはり。そそり。一説に、俠客なりと。「肥前國長崎の方言」。藤栗毛「なんだ此の廓ども、脇ふりにづらんばい」と云ひをつたのちや。

すねぼね 脇骨【名】脇の骨。

すねん 數年【名】すねん(數年)に同じ。

すねもの 勘者【名】すねてわがままをいふ人。世に不平ありて、人に背く人。

すねる 勘(勘下)【名】ねちけるやうに我意を張る。不平らしく人に背く。わざと溢りて人に從はず。見教訓人にはすねていぶりて。勘算載入の何をすねてか六阿彌陀。

すのこ 簀子【名】石南(花材)科に屬する灌木。高さ三四尺。黒き實を結ぶ。うすいちご。うすのき。うすのみ。

ある崎。東京湾口の東角を成し、また大武(つ)と相對して、館山(崎)灣を擁す。西(崎)村に屬す。徳川時代の末に、砲臺を置きたり。「見よ」。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

すのき 洲の崎【包】すのきの條下を。

〔藤原運ず〕の異稱。葉花みこもおはせぬ女御の、后にゐたまひぬる事や、すからぬ事に世の人なやみまうして、すはらの后とぞ附けたてまつりたりける。

すはら須原〔名〕〔地〕信濃國西筑摩郡大桑村の大字。中仙道の一驛。鐵道中央西線の停車場あり。名物にとろろ汁、櫻の花漬あり。鼓蘇路の里須原の町家數十軒ばかり。大にして長き橋あり。大島村より五六町行きて、關山の橋坂の上にあり。

すはらし素晴し〔形二〕いかめし。立派なり。えらし。〔東京の語〕。

すばり窄〔名〕すばりわじや(窄若衆)の略。犬子集うすなきかくる若衆はすばりにて。

すばり〔説〕ためらはず決断するさま。すば。すば。すばり。すばり。〔管などにて物を吸ふさま。すばすば。〕

すばり〔説〕前條に同じ。

すばりう誼訪流〔名〕劍法の一派。北條氏康の臣方波見の備前守の創めたるもの。傳説詳かならず。〔放鷹法の一。流。〕

すばりかわき窄乾〔名〕若衆の、人に無心などをするもの。すばり。増補下學集窄乾。スバリカワキ。口號呼々無心若衆云云。〔稱。〕

すばりぐさ〔名〕〔植〕かたくり(片栗)の異名。すばりすばり〔説〕すばすばに同じ。盛衰記「おほ刀を拔出し髪に、すばりすばりとひきあてければ」。

すばりわかしめ窄若衆〔名〕かばま。男色。若衆。犬子集「我ればかり物を思ふてたしなみぬ」といふ句に「すばり若衆も人のゆるさず」。

すばり〔名〕〔動〕めばる(眼張)を云ふ。〔陸前國仙臺の方言〕。

すばり〔名〕〔動二他〕吸ひて上の方に來らしむ。

すばり〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すばり〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すばり〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すばり〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すばり〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すばり〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すばり〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

縮る。縮み固まる。

すはるぐさ〔名〕〔植〕ぐさ(草)の一種。すはるのたまたま統玉〔名〕みすまのたまたま御統玉に同じ。古語。

すはるぼし昂星〔名〕すはる(昂)に同じ。國仙臺の方言。

すひあけ吸上〔名〕〔動二他〕吸ひて上の方に來らしむ。

すひあけ吸上〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すひあけ吸上〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すひあけ吸上〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すひあけ吸上〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すひあけ吸上〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すひあけ吸上〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すひあけ吸上〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すひあけ吸上〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すひあけ吸上〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すひあけ吸上〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すひあけ吸上〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すひあけ吸上〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すひあけ吸上〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すひあけ吸上〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すひあけ吸上〔名〕〔動〕吸ひあぐること。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。忍冬(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひかづらく忍冬科〔名〕〔植〕顯花植物被子類雙子葉門合瓣花區の一種。忍冬接骨木(忍冬)の葉、箱根漫遊(忍冬)の葉、金銀木、蔓手鞠等、これに屬する。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

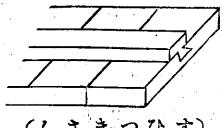
すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。

すひだす吸出す〔動四他〕すひだす(吸出す)たれ素直垂〔名〕直垂の袴の下に白大口を著すして、ただちに直垂のみを著ること。



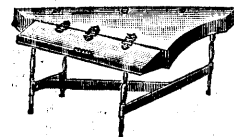
そと

押しつけて、その端(へ)を吸取らしむるた
めの紙。おしがみ。吸墨紙。

すひとる 吸取る【動四他】吸出して取
る。吸込ませて取る。他人の金銭・利
益を、己れの方に取込む。せびりとる。

すびね(英 Spline)【名】伊太利人スピ
ネチ(Spinnetti)の發
明に係りし故名づく

第十七世紀頃、歐羅巴
にて用ひられし樂器。
現今のピアノの前身。
その形箱形にて、方身
角形等をなし、音を發せ
しむるには鳥の羽莖を
以て絃を弾くの裝置を
なす。



(とっねびす)

すびねる(英 Spline)【名】(植)せんじやう
よく尖晶玉に同じ。

すびはく 吸吐【名】じやう(漏斗)を云ふ。
【上野國の方言】

すびくへ 吸瓢【名】身體の惡血を吸取
るに用ふる具。多く硝子にて製し、圓く空
虚にて口すばみ、その中にて火を點じて、
中の空氣を稀薄ならしめ、吸附かせて、血
を吸取らしむ。

すひん 師兄【名】漢字の宋音。僧侶の兄
弟子。法兄(禪宗の語)

すひん 素養【名】役者の、技を演ずる時、
臺を用ひること。

すひもの 吸物【名】あつもの羹に同じ。
彈栗糖。江戸みその鯛の吸物

すひもの せん【名】吸物を客に供するに用
ふる膳。

すひもの わん 吸物椀【名】吸物を盛る椀。
普通の椀よりは淺く、口徑は大なり。

すひよす 吸寄す【動下二他】吸ひて引寄
す。すひつく。

すびるへえた(羅 Spirochæta)【名】螺旋狀
に彎曲せる、極めて狭長なる微生體。原蟲
なりや細菌なりや、疑問の裡に在れども、
細菌に近き原生動物なりとする者多し。高
度に靡して檢鏡すれば、コルク状の形を呈
し、表面には薄き邊縁を被り、體の屈曲に

す

よりて、活潑に運動す。既知のもの十數種
ありて、多くは家畜又は人類の組織もしくは
腔中に寄生し、再歸熱・梅毒等の原因を
なすものと、病原性なきものとあり、また
稀には、水中腐敗液中に存在するものも
あり。

すふ 周布【名】(地)「スウと發音す」伊豫
國の舊郡の一。明治二十九年桑村縣と合し
て周桑の郡となる。

すふ 吸ふ【動四他】空氣を口にひきこ
む。ひいきと共に物を口にひき入る。
「血を吸ふ」(浸)しみこます。「地下水を
すふ」(掘)わが方に寄らしむ。この方に
ひきよす。「磁石が鐵をすふ」

すふ 統ぶ【動下二他】「ひとしくくり
にまとも。取りつかぬ。よせあつむ。配下となす。統率す。

すぶ 容ぶ【動下二他】すばます。
すぶ【名】裕のさしこ。陸奥國の方言。
すぶ【動】すばりに同じ。發心無ずぶと、海
におち入りぬ」

すぶ 隨分【副】すばふ隨分の略。(東京
の語)「笑ふすばふな木だうて」

すふいんくす(英 Sinking)【名】上古、エジ
プト等にて、王宮・神殿・墳墓等の入口の飾
として据ゑ、又ギリシヤにて碑に描きたる
怪物の石像。エジプトには男面獅身、ギリ
シヤのは女面に、通行者を捕へて、謎(ひ
を發し、解き得ざる者は、皆巖上より深谷
に墜ししが、或人それを解くに及びて、ス
フィンクス自ら深谷に墜きたりて傳ふ。

すぶうんきやうさう 匙競争(英 Spoon ha-
sing)【名】競争遊戲の一。匙の上に手鞠を
載せて、落さぬ様に走るもの。

すぶあつ 一あお(伊 Storatio)【名】(音)
「増勢力の義」樂音中或一音符に限り、特
に強勢を示すこと。Si、又はFを符とす。

すぶくじ 崇福寺【名】しがら志賀寺に
同じ。

すぶくろ 素袋【名】刀の鞘袋の類なるべ
すぶす 搾搾【動】すばまりて狭きさま。
【古語】「風外はほらほら内はすぶす」

すぶす 観【動】すぶを重ねていふ語。

すた

すた 素札【名】(素)に同じ。
すた 簀蓋【名】簀に曲物(か)の縁を附
け、食器を蓋ふに用ふる具。

すたぬれ ずぶ濡【名】ずぶと水中に陥り
て、全身濡れとほること。びしょぬれ。

すたね 素船【名】からぶね(空船)に同じ。
すたね【名】う(着)上衣を云ふ。(陸奥國の
方言)

すぶり 観【動】物の水中などに沈む音の形
容。ずぶ。ずんぶ。ずんぶ。ずぶ。ずぶ。ずぶ。
ざぶ。ざぶ。ざぶ。ざぶ。十分分に濡れた
るさま。ずぶ。ずぶ。ずぶ。ずぶ。ずぶ。ずぶ。
ずぶ。ずぶ。ずぶ。ずぶ。ずぶ。ずぶ。

すぶりんぐばらんす(英 Spring balance)
【名】ぜんまいばかり(發秤)に同じ。

すべ 術【名】すべき方法。しかた。手だ
て。手段。萬葉・心にはちたびしくしくお
事(の次第。仕儀。薩摩・逃すなとは誰がこ
と。術にて此の源五が立退かば立退き
もせん、逃ぐるといふ字が聞きにくい」

術のたつき【句】よるべき手段。
術のたつき【句】前條に同じ。

すべ【名】すべたの略(但語)

すべ 皇【接頭】すめ皇を見よ。(古語)「
皇皇(すめ)神漏岐(すめ)命神漏美(すめ)命
もて」

すべい 爲可い【形】すべし。なすべし。具
町女腹切「お花はおれが女房、すべい奉公し
まへん、はまふ殿でござらうが」

すべいん 西班牙(英 Spain)【名】(地)歐
羅巴洲の西南端に位する王國。首府を、マ
ドリッド(Madrid)と稱す。すべいはや。

すべえと(英 Spade)【名】トラップ札の一。
黒く鋤の形を畫けるもの。

すべがみ 皇神【名】すめがみ(皇神)に同じ。
すべ神のみにてあらはれなまはしものを
すべ神のみにてあらはれなまはしものを

すべからく 須く【副】爲(さ)可(く)くあ
る。くあ(二音)約りて、かとなり、あの一音
延びてくとなれるもの。すべき事は。(上
にこの語あれば、多く助動詞べにて受く)
佳然徳をつかと思へば、すべからく先づ

すべ

その心づかひを修行すべし」
すべからくは 須くは【副】前條に同じ。
【古語】大鷲、すべからくは、次第のまま
に、「一の皇子すべなん春の宮とすべれど」

すべくくる 統括る【動四他】とりしめる。
總括す。統括(し)す。【に同じ】。

すべくらむ(英 Spectrum)【名】(理)大條
すべくらむ(英 Spectrum)【名】(理)發光體
より出づる複雑なる光線が分光器を通過
するとき、その單純なる成分の屈折率の異
なるに従ひ、分散せられて映ずる色帶。例
へば太陽のスペクトル、大略、紫・藍・綠・
黄・橙・赤の七色より成るが如し。輝線ス
ペクトル・吸收スペクトル・連續スペクト
ルの三種あり。光線分析帶。きんぐわいせん
(華外線)せきぐわいせん(赤外線)參照。

すべくらむくわうさく(英 Spectral)光
度計(英 Spectro-photometer)【名】分光器
と偏光光度計とを組合はせたる光度計。

すべくらむふんせき スペクトル分析
(英 Spectrum analysis)【名】(理)スペクト
ルを應用する分析。即ち各元素は、高熱の
氣體となる時、それぞれ特有の輝線スペク
トルを生ずる理に本づき、吾人既知の元素
の輝線を定めおき、或物質を無色なる燐の
中に入れて高熱し、依りて生ずる輝線を既
知元素のそれと比較して、その物質中にい
かなる元素が含有せらるるかをを知るを得
る。獨逸人フンゼン(R. W. Bunson)及
びキルヒッフ(G. R. Kirchhoff)の西曆一
八六〇年に創めしものにて、天體の分析に
も利用せられて、大いに効果を奏したり。
分光折。

すべくらむくわうさく(英 Spectro-scope)【名】
かんくわうさく(分光器)に同じ。

すべくらむり 滑草履【名】『すべ』滑はしべ
(替)の轉。なめき(り)中拔草履を云ふ。
【京都の語】

すべがみ 垂髪【名】きげみ(下髪)に
すべし(も)り垂髪【名】前條に同じ。

【古語】「垂髪スベシモトリ」
すべす 滑す【動四他】そつと衣を脱ぐ。(古
語)「源氏御ぞをすべしおきて、ゐざりの

大入色

File 34



(ゆびりべす)

1

すば

すば【名】つぎ(苞)を云ふ。(西國・四國の方言)

すば【名】すばけ【】に同じ。(中國邊の方言)

すば坊主【名】「洒落て、わざと、さかしまにいふ語」ばす(坊主)に同じ。(俚語)

すばいも【名】(蘭)Smit【名】薬液を注射して、患部を洗滌するに用ふる醫藥器具。

すばおとね【名】(蘭)Drop zoot【名】(蘭)の託【名】痰の薬。甘草を濃き汁に煎じ出して、煉固めたるものといふ。もと和蘭より舶來せるもの。おらんだんきり。たんきり。

すばき【名】こむ(豚)を云ふ。(讃岐國の方言)

すばけ【名】「さき」の尖り居らぬこと。かどなくしてまのぬけたること。(俚語) ③成童になりても、龜頭のなほ皮を冠りをるさま。かはかぶり。包莖。(俚語)

すばし角【名】「天」か(角)に同じ。

すばし素乾【名】「かばし」陰乾に同じ。

すばしむし【名】素乾の略。(九州の方言)

すばし窄【名】(形)「すばまりて細し。括りよせたる如し。諸曲(清經)「眼裏に座あつて、三界すばく」 ②「みすばらし(見登し)に同じ。古語」 方丈記「富める家の隣にをるものは、朝夕にすばき姿をはちて、へつらひつ」

すばしあち【名】素干鏝【名】かばしにしたる鏝。

すばししいわし【名】素乾鏝【名】こまめ鏝に同じ。

すばすば窄【名】「すばまりてあるさま。(俚語)

すばすば【名】「すばすばに同じ。 ③「すばんすばんに同じ。 ④「すばらめ(すばら飯)を見よ」 水分の乏しき食品を食ふときの感じ。(俚語)

すばた【名】「うづわがつ(渦輪鏝)」の異稱。

すばだい【名】須菩提【名】「人」し(ゆばだい)須菩提に同じ。

すばたん【名】素牡丹【名】女の袖の、表は練貫(す)にて裏は紅梅色のもの。「じ。

すばひき【名】すば引【名】はうびき(寶引)に同じ。

すばふ【名】修法【名】しゆほう(修法)の約。(古

すばふ

語) 源氏「すばふ讀經(す)まつり。はらへと、みちみちにさむくは」

修法の阿闍梨【名】(佛)「修法(す)の阿闍梨に同じ。(古語) 其六月のす

すばふらん【名】修法院【名】しんごん(眞言院)に同じ。

すばまる【名】「動四自」すばむ(窄む)に

すばみ窄【名】すばむこと。すばみてある

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばむ窄む【名】(動四自)「末になればなる

すばめ

すばら【名】すばら【】の轉。

すばり窄【名】すばみ窄に同じ。

すばり【名】「すばりに同じ。

すばり【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すばる【名】「すばりに同じ。

すまし

すま【名】「絶えずいましめにやる」

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまし澄【名】「水の濁を去りて清くせし

すまじ

きて懸かり、その爪には屈折ありて、引上
ぐる際、その物の重なるに従ひ、喰ひしめ、一
且かかれる物は、必ず離さず引上ぐるやう
に仕掛けたるもの。一層小さき形なるを、
すまるといふ。すばる。

すまろくさ 天門冬【名】「植」てんもんどう
（天門冬）に同じ。「古語」和名天門冬、須
末路久佐、今案、楊支操音義、冬作「東也」

すみ炭【名】木の焼けて黒くなりて残れ
るもの。伊勢そのさかづきの血に、つい
まつものすみして、歌の末を書きつゝ、
木を黒くむしやきにせるもの。火鉢などの
火に用ふ。また別に骨炭あり。催涙。木炭
（すま）すみま炭（すま）和名炭、須美、
樹木以火焼く之、仙人嚴青造也」

堅き炭【句】かたすみ（堅炭）に同じ。拾
玉、堅き炭をかきうづむ火の消えなくに
霜にまかせて明くるしのめ」

すみ墨【名】「前條の語の轉とも、染（す）の
轉ともいふ」油煙又は松煙を、膠の汁
にて固め、香料などを加へ、型にて造
りたるもの。硯にて磨れば、黒き汁となり
書畫を書くに用ひらる。和名墨、須美、
以三松柏烟、和膠合成也」墨を磨りて
溶きたる汁。ほくじふ。色は何色にて
も繪の具を固め、水にて磨り、溶きて用ふ
るやうにしたるもの。「朱すみ」「藍すみ」

すみぞめ（墨染の略。風俗文選すみの袂、
何故となく、しほるばかりになん侍る」
すみなは墨繩の略。鳥賊（の）體内
にある黒き液。危難にかりたる時、これ
を吐出して、油を濁して、その跡をくら
ます。油煙。煤煙。博多小女郎浪鼓鍋の
すみでは細眉作り」

墨附く【句】墨に染まる。（古の諺に、人
より懸慕せらるる時は、袖に墨附くとい
へり）當代忍ばれむことぞともなき水
茎のたがひた袖にすみのつくかな」

墨雪【句】非常に白くはなれたる二
つの物を比較する譬。水炭。諺語
墨に近づけば黒し【句】不真の人と交
はれば、己れもいつか邪惡に感染するこ
と。諺語

墨の柄【句】すみづか（墨柄）に同じ。

すみ

墨は餓鬼に磨らせ、筆は鬼に持たせ
よ【句】書道の式にて、墨を磨る時は、
成る可く力を入れぬ様にし、執筆には、
力を入む可き色をいふ。諺語。「す
墨を入る【句】罪人にいれずみを施
す。隅角【名】隅入込み又は差出たる
はし。かど。すま。源氏南のすみの間よ
り、格子たたき、ののしりて」すみのをじ
（隅折敷）の略。船の名所。さてて月
立。參照

隅から隅まで【句】こまかき點までも
隅の及ぶさま。
隅に置かれぬ【句】思の外、世情に通
じて、相語るに足る。「に同じ」

隅の折敷【句】隅すみをしき（隅折敷）
角が入る【句】角前髪（へ）になる。「江
戸時代の語」

角を入れる【句】前條に同じ。一代男
「十五歳にして、その三月六日より角を
も入れて」一代女年頃は十六七なるが、
角さへ入れぬ前髪、在郷家にはつやある
若衆」

すみ桧【名】「植」蘇葉科に屬する落
葉喬木。山野に自生す。高さ五六尺より二
三丈に達す。葉は楕圓形にして、縁に決刻
及び大小の鋸齒を有す。春季開花す。五つ
の花弁は淡紅色にして、のち豌豆大の赤色
又は黄色の果を結ぶ。

すみ須彌【名】「佛」じゆみ（須彌）に同じ。
すみ酸味【名】「みは形容詞の語幹に添ふ
接尾語味と書くは假借の文字なり」酸き
ほどあり

すみあか隅赤【名】四隅を雲形に少し高
くして朱塗にし、その他の部分は黒塗と
し、蒔繪など施したる手箱。古専ら婚禮
の時用いたるものなりといふ。

すみあし住悪し【形】住みにくし。住
みて居るにつらし。みごころわるし。住
好しに對して。「古語」萬葉ひと國はす
みあしとぞいふすむやけくはやかへりま
せこひしなぬとに」

すみあぶらぶきやう炭油奉行【名】室町

すみあ

幕府の時、將軍の諸大名の第に臨む際に、
その第にて、臨時に任命して、炭油の事を
掌らしめし職。
すみあらし住荒す【動四他】住みてあら
す。すみふらす。續古今八十（）あまり西
のむかへを待ちかねて住みあらしたる柴
の趣ぞ」

すみあり隅蟻【名】接合法の一。一の板
の木口に蟻溝（を）を作り、又他の板の木口
にこれに適合する蟻頭（を）を作りて、押
糊にて接合（は）せ、木釘にて止む。厚き板
にて作れる箱の隅などに應用す。

すみいし隅石【名】石造又は煉瓦造等の
壁の四隅に据附ける石。

すみいど墨糸【名】すみづぼ（墨糸）を見
よ。
すみいれ隅入【名】すみいれかく（隅入角）
すみいれ角入【名】角（を）入ること、
又その時の儀式。

すみいれ炭入【名】すみざり（炭取）に同じ。
すみいれ墨入【名】すみづぼ（墨蓋）に同じ。
すみいれかく隅入角【名】正方形の四
隅に、少し窪みを附けたる形。すみいれ。
すみかく。紋所の一。平角（の）の四隅を
筒形のどくにしたるもの。

すみいろ墨色【名】書き又は染めなど
せる墨の色。ほくしよく。次條の略。
すみいろはんだん墨色判斷【名】書きた
る文字の色合によりて、その人の運勢の吉
凶を占ふこと。

すみうろ住浮る【動下二目】住兼ねて、
他へ浮れ相づ。浮れ出て、他所に住みか
ふ。「古語」續古今都をすみうかれて、野
中の清水をすぐとて」續後撰園城寺にす
みうかれける頃」

すみうし性愛し【形】住みにくし。住
みづらし。伊勢京やすみうかりけん、あ
づまの方にゆきて、すみどころ求むとて」

すみうち墨打【名】墨繩にて線をしるす
こと。

すみうまたし角馬出【名】城の馬出の、
上部を隅角形にしたるもの。（丸馬出など
に對して）

すみう

すみうり炭賣【名】炭を賣りあるること、
又その商人。
すみか住處【名】すまひ（住）に同じ。
すみかき炭狐【名】炭をかき寄せ、かき交
ぜなどする具。鐵にて造り、先端熊手のご
とくに彎曲す。鍛冶屋などに用ふ。

すみかき墨書【名】繪を墨にて書きたる
ままだらぬこと、又その書きたるの畫。
すみあ（へ）つくり給に對して」源氏にいし
へすみあがきり給に對して」

すみかく隅角【名】すみきりかく（隅切角）
すみかけ墨掛【名】大材より板又は小材
を取らんとする時、これに要する大きき
を、大材の木口に、墨差（を）にて記すこと。
すみかけたく墨掛大工【名】墨掛に堪
能なる大工。「れるすみと」

すみかか炭籠【名】竹などにて編みて造
すみかき墨傘【名】地紙を黒く染めたる
日傘。

すみかき【名】（動）めばる（目張る）の異
すみかしら炭頭【名】炭のよく焼けず
して、けぶるもの。炭俵の中に、最も
大なる炭。

すみかた濟方【名】事のすみむこと。事件
すみかた墨形【名】黒く染出したる模様
なるべし。五人玄白じゆすに墨形の肌著」
すみかね規矩【名】きくは（規矩法）に同
じ。津國女夫連、引く繩筋の曲みなき、代代
のおきてもすみかねも」

すみかね墨金墨曲尺【名】まがりかね。
東北職人歌、番匠。すみかねの直きをただ
す身なれども傾く月にかふはりぞなき」

すみかはら隅瓦【名】屋根の二つの流（み
じ）の相會する處に用ふる瓦、即ち隅棟の下
の瓦。

すみかき炭窯炭竈【名】木を焼きて炭
に製する竈。多く山中に設け、地中に深さ
二三尺の坑を掘りたるもの、地上に四五
尺の高さに石垣を築きたるものとありて、
これに生の木材を堆積して、三四日乃至五
六日間蒸焼（を）す。すみやきがま。後
拾遺都にも初雪ふれば小野山の楨のすみ

がまやきまざるらん」
すみがまやく 炭遣役【名】江戸時代に、炭竈の箇敷に應じて課したる大役。

すみかれ 墨枯【名】墨色の薄れかするること。「古語」墨をさばかり塗りかため書きたる繪に、つゆもすみかれせず書きたれたまへる、あさましうめたし。

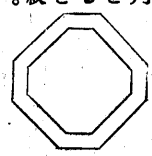
すみき 隅木・角木・桷【名】「建」隅棟の下に在りて、種々の上端を承くる木。すみだるき。

すみき 炭木【名】焼きて炭とする木。新六「とにかくに大原山の荷をおもみ冬はすみぎをかりやふらん」

すみきはり【名】木を張りて弓の如くに造りたるものなりといふ。盛衰角きはりを以て、馬の太腹を射よ。「敷」に同じ。

すみきら 隅切【名】炭を切ることを。すみきり 隅切角切【名】指物【形】の一。旗の上の隅を斜に切除きたるもの。すみと。次條の略。すみきりげた【隅切下駄】の略。

すみきり かく 隅切角【名】方形の四隅を少し切りてそぎたる形。すみきり。すみと。すみかく。紋所の一。下の圖を見よ。



すみきり 隅切形【名】隅切角にしたる形。すみと。隅切角にげた 隅切下駄【名】下駄の臺を隅切角にしたるもの。すみきり。

すみきり さん 角切三【名】紋所の一。二重に畫ける四邊形の四隅を切りて、中に二重文字の三の字を容れたるもの。

すみくち 濟口【名】事をなし終へたること。一段落のつきたる部分。

すみくち 濟口【名】濟口證文【名】争の濟みたる事件を記したる證文。

すみくつ 炭屑【名】炭の屑。屑の炭。兒童「すみくづに小野の枯菊にほひけり」すみくろま 炭車【名】炭を積める車。すみづみぐるま。夫木「いざひきて氷をきしる

すみぐるま 重きうれひはわれぞまされる」すみくろ 墨黒【名】墨にて書きたる文字などの、濃く黒きさま。著園をといふ文字を、只一つ黒くろに書きて。鳩頭語門口に雪隠を建て、側に手鉢を据ゑ、墨ぐろに貨雪隠一度三文、と書きつけた看板を懸けたした。

すみけし 墨消・墨滅【名】書きたる文字などを墨にて消すこと。

墨滅の歌【句】古今和歌集の、古來諸家の證本と稱するものうちに書入れてはありながら、墨にて消したるもの。大抵の本には、これを卷末にまゝとて掲載せり。

すみけし 炭消【名】ひけしほ火消盡に同じ。一代男炭消に、しめ繩張りて出せば。

すみこみ 住込【名】すみこむこと。芝居に抱へらるること。

すみこむ 住込む【動四自】雇人となりて主人の家に寝泊【形】す。

すみころも 墨衣【名】すみぞめころも【墨染衣】に同じ。五人女【墨衣著たる比丘尼】すみこゑ 清音【名】すみたること。濁らぬ聲。せいおん。

すみさ 炭坂【名】すみさ【炭座】に同じ。すみさ 隅坂【名】まがりたる坂。入りこみたる坂。古語。蕪葉もたらずやそ隅坂にたむけせば過ぎにし人にけだし逢はむかも。

すみさけ 清酒【名】せいしゆ【清酒】に同じ。すみさけ 墨差・墨窓【名】竹の先を細かに割りたる筆。墨窓の黒肉に差して、木材に印【形】又は線などを引くに用ふるもの。和名墨窓、以篋爲筆目窓、須美佐之。

すみさす 隅扱首【名】「建」縁側の角【形】より外部に突出したる木。えんすすみぎ。

すみじたて 炭仕立【名】薪を用ひず、炭にて煮焼【形】すること。奢りたる生活を形容していふ。「江戸時代の語」

すみじやうらい 蘇民將來【名】そみんじやうらい【蘇民將來】の訛。

すみすまし 濟濟【名】結束。結局。浮世風呂おれが濟みすましを附けたから、けち

りんも間違はねえ」すみすみ 隅隅【名】こかしこの隅。すみすむ 住込む【動四自】つづけて住む。萬葉「しなまかる越【形】に五とせすみすみて立ち別れなき情しき宵かも」

すみすり 墨磨【名】墨を磨ること、又その人。【すり】硯に同じ。「古語」

すみすり 墨摺【名】版を摺るに色を用ひず、墨のみにて摺ること、又その摺りもの。

すみすり 瓶瓶【名】すりがめ【硯瓶】に同じ。「古語」和名水滴器、須美須理賀美。

すみすり 墨摺摺【名】浮世繪の一種。墨のみにて摺り、繪の具を加へざるもの。寛永貞享の頃行はれたり。

すみせん 須彌山【名】佛【しゆみせん】須彌山の約。「古語」

すみそ 酔味増【名】酔を加へて解きたる味噌。肉菜などに附けて食ふ。

すみそあへ 酔味増和【名】酔味増にて和へたる食品。

すみぞめ 墨染【名】黒く染めたる僧衣又は喪服の色。くろぞめ。後拾遺すみぞめの濃きものすきもみる時はかざねてもぞ悲しかりけり」次條の略。

墨染の雲【句】黒き色の雲。信明【いかにして君が心にたちつらん小松の山のすみぞめの雲】

墨染の袈裟【句】黒く染めたる袈裟。墨染の衣【句】すみぞめころも【墨染衣】に同じ。

墨染の袖【句】墨染衣の袖。新古今「しきまつ山路の露にぬれにけり晚おきの墨染の袖」

すみぞめ ころも 墨染衣【名】黒く染めて僧の著る衣。墨染の衣。新古今「うきたびにあまり涙をしぼるとすみぞめ衣袖ではつる」

すみぞめ くら 墨染櫻【名】「植」櫻の一種。花は單瓣にして小さく、色は白く、莖葉共に青く、薄墨の如く見ゆるもの。

ば今年ばかりはすみぞめに咲け」と一首の歌を詠じたりに、その春は墨染の色に咲きたりといふその櫻。實物集「かんつけの峰雄といふ者、今に深草の墨染櫻とてあり」

【諸曲の一。前項のことを作れるもの。】すみぞめ 墨染の「枕」墨染は黒きものなる縁より、ゆふ【夕】たがれ【黄昏】の間に闇しに、かけていふ。古今すみぞめはゆふべになればひとり居てあはれあはれと嘆きあまひ。六帖すみぞめはたそがれどきの臘夜にありとし君にさやにあれ見つ」後撰「墨染のくら【闇】鞍馬の山に入る人はたどるたどるもかへり來なん」

すみだい 墨臺【名】墨を載せおく臺。多

すみだい 炭炭【名】「人」俳人。江戸の人。初、雲津水國に就き、のち慶紀逸の門に入りて、不夜庵と號す。京都に上りて、住し明和八年歿す。年六十三。

すみだいふぶし 角太夫節【名】かくだいふぶし【角太夫節】を見よ。

すみだ 隅田川【名】「地」紀伊國紀川【名】の、同國伊都【郡】隅田【村】の邊を流る間の特稱。「角田川」萬葉「まづ山ゆふこえゆきていほさきのすみだがはらにひとりかもねむ」

「地」武藏國荒川の downstream 千住【郡】大橋あたりより下、吾妻橋邊に至る間の部分。その以南を、單に大川といふ。古、この川以東は、下總國に屬したり。墨水。「角田川・墨田川・墨田川」伊勢

「武藏國と下ふきの國との間に」といふ大きな川あり。それをすみだ川といふ。昔の日本酒の銘。江戸淺草並木【町】の山屋半三郎といふ者、隅田川の水を用ひて、元を造れりといふ。華花五大力「隅田川一升、われらが御見舞」

【諸曲の一。梅若丸の母、我が子の行方を尋ねて、東國まで下りしが、梅若丸すでに死し、隅田川の渡守よりその末期のさまを聞き、空しく墓前に念佛を手向くる事を作れるもの。うめわかつか【梅若丸】參照。

すみだがは 隅田川【名】隅田川諸白【名】江戸時代、隅田川の水にて製したる諸白。

すみだがは やき 隅田川焼【名】陶器の一

木事業に功あり。學を藤原惺窩に受け、詩歌書道茶儀に通達す。所謂嵯峨本、また角倉本を刊行し、藤原系圖及び武家系圖を著す。寛永九年歿す。年六十三。

すみくら 角倉了意【名】一人豪商。土木家。本姓は吉田。名は光好、小字は與七。玄叟と號す。土木工業を好み、徳川家康の命により、大船を造りて、安南に通商して、互利を博し、大井川の大石及び砂利を浚渫して、舟行に便し、また富士川に舟路を開き、京都に高瀬川を開き、大いに民利を進む。慶長十九年歿す。年六十一。

すみくろけ 墨黒毛【名】くろげ(黒毛)に同じ。

すみのさ 炭座【名】七座の一。炭を商ふすみのつか墨の柄【句】すみ墨の條下を見よ。

すみのぼる 澄昇る【動四自】澄みて昇る。高く澄む。堀江竹のよきさへ月や照らすらん空にも聲のすみのぼるかな

すみのやま 須彌山【名】しゆみせん須彌山に同じ。【古語】源氏みづからすみの山を右の手にささげたり

すみのを すみ隅の折敷【句】すみ(隅)の條下を見よ。【市】に同じ。

すみばうし 角帽子【名】すみづきん(角頭)すみばさみ墨挾【名】手のよこれぬやうに磨りへらせし墨を挾むに用ふ具。多くは竹にて造る。すみづか。すみのつか。

すみばし 住場所【名】住む場所。すみどころ。すみか。

すみはなる 住離る【動下二他】住みたる所を離る。住所を去る。【天婦】愛情失せて、寄りつかぬやうになる。(住著くに對して)【すむ】住む【參照】古語】取替さばかり住みはなれたる所ある御心に、よもうけひき給はじ

を作れば、顔も姿も文十郎にあらず」**すみひた** 角額【名】角前髪を置きたる額。室町千疊敷指添役たまへば」しふつと切つて投けたまへば」

すみよつて 墨筆【名】墨と筆と。墨をつけて書く筆。

すみあて つつみ墨筆包【名】折形の一。下の圖を見よ。

すみふ 墨太【名】書きたる文字の墨附ふこと。

すみまじる 住離る【動四自】まじりて住む。去來都にもすみまじりけり相撲取

すみまへ がみ角前髪【名】昔、男子の十五六歳になりて、即ち元服のすこし前に、前髪の生際(みぎ)を少し剃込みしこと。すんま。あまじほ。かどす。こびたひ。半元服。【角】を入れる【參照】夕暮阿波舞頭は見えねども角前髪のお小姓らしい

すみみつ 住満つ【動四自】多數の人住む。源氏勢ことに住みみちたまへれば、けせうに人しげくもあるべし

すみみつ 澄水【名】澄みたる水。【みづもり】みづな。新可笑島彼の大工、身に備はりし家職、墨かねすみみづの見やうはおろそかにして

すみむね 隅棟【名】「建」方形造の隅は寄棟造(やせだ)の屋根に於ける二つの流(なが)の相會する處(おほ)棟くんだり棟等に對して

すみや 炭屋【名】炭を商ふ家、又その人。五合高砂の炭屋の下女、何心もなく足手息手にて

とて人をば人のたのむのかは」**すみやき** た炭焼鯛【名】(動)形こいちに似て、色は少し赤ばみ、墨などひきたるが如き、黒きすぢある魚。

すみやく 速く【動四自】速くなる。いそぐ。いらだつ。古語】捨置君をわが思ふ心は大原やいつしかとのみすみやかれつ

すみやぐら 角櫓【名】城郭の角に立てるすみややく 壽美屋焼【名】樂焼の一種。文化文政の頃、讃岐國高松の豪商津島某の製せしもの。主に茶器の類なり。

すみより 墨遣【名】つぎ(墨遣)に同じ。

すみよし 住吉【名】(地)攝津國の舊郡の一。明治二十九年東成(あきなり)郡に合す。【(地)】攝津國東成(あきなり)郡にある村。大阪と堺との中間に位し、官幣大社住吉神社の所在地として名高く、南海鐵道の一驛。古稱すみのえ。【攝津國武庫(たくら)郡】にある村。古稱、すみのえ。また元住吉の稱あり。

すみよしじんじや (住吉神社)【參照】古今すみよしと人とはつづとも長居すなむれ草生ふといふなり

すみよし 郡にある町。福岡市の南郊、那珂川に跨る。因氏(いんじ)の一家、畫家慶恩を祖とする。その住地攝津國住吉の名を取りたるもの。慶恩の歿後、その家中絶せしが、如慶(にょけい)再興し、その子具慶に至りて、狩野家と並びて江戸幕府の御畫師となり、父子共に名聲を馳せたり。その畫風を住吉派といひ、土佐派の分派にして、土佐派の、狩野風を交へたるに比して、古風を守りたり。

住吉の潮湯【句】六月十四日攝津國東成(あきなり)郡の住吉神社に詣て、その海に浴して、諸病の平癒を祈ること。住吉の泥湯。住吉の神興洗。

住吉の泥湯【句】前條に同じ。

住吉の神興洗【句】前條に同じ。

に彼せらる。筆力勁健、活氣に富むことは父を凌駕す。寛永二年歿す。年七十五。

すみよしけいおん 住吉慶恩【名】(人)畫家。住吉の畫所となり、攝津國住吉に住す。法眼に彼せらる。畫風、細緻にして、鋭氣活動せり。建仁元久頃の人。

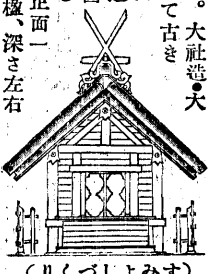
すみよしじんじや 住吉神社【名】(地)攝津國東成(あきなり)郡住吉村に鎮坐せる官幣大社。祭神は表筒男(うはつづみ)命、中筒男(なかつづみ)命、神功皇后(じんこうこう后)征韓の際、この神に祈りて靈驗ありしより創建せられたるもの。もと今の武庫(たくら)郡住吉村にありしを、仁徳天皇の時、遷ししもの。後世は神功皇后を前記三神に配して、祭神とせり。古來歌道守護の神とせらる。

住吉神社【名】(地)攝津國武庫(たくら)郡住吉村に鎮坐せる郷社。東成郡住吉村なる住吉神社の舊地に名残を留めたるもの。この地もとは荒原(あらかた)に屬したり。一名、茨地。【住吉神社】長門豐浦(とよの)郡勝山村大字楠野に鎮坐せる國幣中社。祭神は表筒男(うはつづみ)命、中筒男(なかつづみ)命、底筒男(そこづみ)命、荒御魂(あらかみたま)神。【國幣中社】祭神は表筒男(うはつづみ)命、中筒男(なかつづみ)命、底筒男(そこづみ)命。

すみよしじんじや 住吉如慶【名】(人)住吉派の畫家。幼名は光陳、通稱は内記。初名は廣道、如慶は難慶後の稱。江戸幕府の畫師となり、法眼に彼せらる。畫風、緻密にして麗(うつく)し。住吉家中興の祖。寛文十年歿す。年七十二。

すみよし 住吉造【名】(建)神社の建築式の一。大社造。大鳥造に次ぎて古きもの。平面は、大鳥造を縦に二箇を接したるがごとく、正面一楹、後面二楹、深さ左右側面各四楹あり、その他は殆どすべて大鳥造に同じ。攝津國東成(あきなり)郡の住吉神社はこれを代表す。

すみよし にんぎやう 住吉人形【名】攝津國住吉より出す土製の人形。雅趣あり。



(りくづしよみす)

すみよし

すみよしのをかし 住吉岡 [名] (地) 攝津

國にある岡。拾遺すみよしのをかし松かさしつれば雨は降るといふなみの(否) 義(印南野)はきじ」

すみよしは 住吉派 [名] すみよし(住吉) 古派の書家。廣尙の子。具慶の六世の孫。

初名は廣定、また弘定、内記と稱す。畫風生氣あり、有職故實を研究し、家名を再興し、守住貫魚山名實義等の門下を出せり。文久三年歿す。年七十一。

すみよしをうて 住吉詣 [名] 住吉神社に參詣する。折、明石上(折)も、播磨國より、船にて參詣せられ、思はず相逢ふ事を、源氏物語に基きて作れるもの。

すみよしものがたり 住吉物語 [名] (書) 中納言にて左衛門督を兼ねたる人の女繼母に憎まれて、住吉に流浪せしが、後に少將なる人に迎へられて、その夫人となり、富榮たる由を作れる小説。趣向、落窪物語に類せり。作者不詳。平安朝にも同名の物語ありしに、散佚して傳はらざるを、鎌倉時代に至り、その名を襲きて作りたるもの、この書なるべしといふ。一卷。

すみよしをどり 住吉踊 [名] 攝津の住吉に行はれし踊。衣服手

甲、股引、脚絆、甲掛は必ず白木綿を用ひ、腰衣(こし)を著し、笠笠に茜(せき)木綿布を垂れたるを戴き、蒲團扇を手に持ち、帶の背にも挿み、五六人一組となりて、同じく茜木綿を垂れたる大なる二蓋傘を中央に樹て、傘の柄を打ちつつ踊り歩く。天智天皇の三笠の幹に紅のめかを張りて、御顔を隠し、住吉踊に仕立てなば、答むる人も候ふまじ」

すみら [名] (植) あまな(山慈姑)に同じ。

すみるちや 素海松茶 [名] 薺色を帯びたる茶色。



(りどをしよみす)

すみれ

すみれ 堇 [名] (植) 堇菜(すいれい)科に屬する多年生の草。原野に自生し、葉は根生し、その形、畫顔のに似て小さく、縁に缺刻あり。春、紫又は白色の不整齊なる五瓣の小さき花を開く。その花と莖との連なるところ、鈎の如く曲りたるを、小供など、戯に引掛けて、引合ふ故に、すまふとどぐさ、又ちからぐさといふ。後に、莢を結ぶ。西洋にては、この花を戀愛の象徴とす。ききやうぐさ。堇菜(前頭草) 和名堇菜、俗之謂「堇菜」須美體」すみれ(堇菜)の略。

すみれあぶら 堇油 [名] 句(堇菜)の花を蒸溜し又は浸出して製したる揮發油。帶黄色にして、芳香あり。主に化粧用として、香水香油匂入石鹼の材料などに用ふ。

すみれいし 堇色 [名] 堇の花に似たる、淡紫の色。すみれ。

すみれくさ 堇草 [名] (植) すみれ(堇)に同じ。昔、堇やまぢ來て何やらゆかし堇草」

すみれくわ 堇菜科 [名] (植) 顯花植物。被子類、雙子葉門、離瓣花區の一種。堇三色(すいさん)句(すいさん)堇菜(すいさん)など、これに屬す。きんさくくわ。

すみれさいしん 堇細羊 [名] (植) 堇菜(すいれい)科に屬する草。山地に自生す。無莖にして、根莖太く、葉は心臟形、鈍鋸齒を有す。春季、淡紫色にし、線紋を有する花を開く。

すみれてふ 堇蝶 [名] 紋所の一。下の圖を見よ。

すみれの 堇野 [名] 堇の多く生えたる野。

すみれゆ 堇油 [名] すみれあぶら(堇油)に同じ。

すみろ 隅爐 [名] 茶室三疊以下の小間の左又は右の隅に切りたる爐。妙喜庵に始めて仕附けしより、妙喜庵とも呼ぶ。

すみろ墨繪 [名] 黒にて描ける繪畫。黒すみをじき 隅折敷 [名] 隅切にしたる折敷。



(ふてれみす)

すみ

すみ ぬみのをじき。すみ。

すみ 澄む [動] 四自 [名] 清くなる。濁なくなる。曇なくなる。透明になる。「清む」源氏「底清くすまぬ水に」

「おちつく。靜かになる。くすむ。まじめになる。更科「うそふに見まはし、いとやみにまじうすみたるさまり」

「増廣」こまやかにまめかしうすみたる様して、あてにうつくし」

「獨樂」同轉中、眞棒をふらずに、全く不動の如く見ゆること。

千代(きよ)に「たび澄む水」句「王子年あ拾遺記に「黄河千年一清」とあるに本づく」古今に稀なるめたき世時の譬。

今、眞宮造りたる國の司など、七十二人とか、位たまはりなどす。中頃かばかりの政なきを、千代に「たびすめる水なるべし」とぞ思ひあへる。

「たび澄める水」句 前條に同じ。紫花有栖川の「たびすめる水の心のどけき世に」

すみ 濟む [動] 四自 [名] 前條のと語源を同じくす。ととのひ終る。殘るところ無くなる。一定る。さます。すま(濟す)參照。

「歴歷」これで、さますんだ。あのお五の生れどしに、このふくべがなりてあつたと同とかく、物しりと連れたねば、理がすまぬ」

「他人に對して、言譯(ことば)が立つ(おも)に否定の形に用ふ。桂川(きしかわ)前はきつすまぬ顔ぢやが」

濟んだ事を云ふぢや、風が笑ふ」句 過去りし事は、後よりとかく言ふとも、その効なし」(諺語)

すみ 住む [動] 四自 [名] (集) を活用せしめて動詞としたもの。常にある所と定む。すまふ。源氏「こなたは、すみたまはぬたいなれば」

「天となりて、女の許に通ふ。すみつく(住附く)すみはなる(住離る)參照。古語」

後撰「公賴朝臣のむすめにしるびてすみはべりけるに」

「集を營みて居る」(栖む)棲む」萬葉人國は須美(すみ)とぞいふ」

すみじ

馴れば、榮しく思はる。(諺語) 俗曲鳥「鳥もかよはぬ山なれど、すめば都よ、わが里よ」

すみじてふ すみじ蝶 [名] (動) 蝶類に屬する小蝶。各地に産す。前翅は白色、後翅は褐色。幼蟲は黒色にして、黒子(くろこ)といひ、華(はな)を害す。

すみつかり [名] 酒粕を搾りて、漉(こ)したものと、大根おろしのしぼりたるものと、蒸(こ)りて酢をかけた大豆との三種を交えて煮、醬油を加へて、味を調へたる食品。すみつかり。古事談「すみつかりとて、苦みてよくはさまし候なり」

すみ のり 紫苔 [名] (植) あささのり(淺草海苔)に同じ。「古語」字彙「紫苔、紫(須年乃利)」

すみやけし 速けし [形] 速かなり。早し。とむ(古語) 萬葉「人國は佳惡しとぞいふ、すみやけくはや歸りませこひしなぬと」

すみす [名] 長さ。寸法。長町(長八町)脇指、すは一尺四寸五分「寸が短し」

「しばらく。少時。すんの間」 犬千代(いぬちよ)「待ちまちてほととぎすんの隙(すき)もなし」

すん [感] 鼻息の音。ちよととの聲。(但語)「うんととすん」とも

すん 寸 [助數] 長さの單位。尺の十分の一。分(ふ)の十倍。(馬のたけを計るには、きといふ) 源氏「七八寸ばかりぞ餘り給へる」

寸に斷る [句] 切りたる上に切る。短く切る。

寸を屈して、尺を伸ぶ [句] 文子の上義篤及び戸子に「屈(く)寸而伸(の)尺」、文心彫龍に「屈(く)寸而伸(の)尺、枉(か)尺以直(の)寸」とあり

「小利を捨てて大利を取る譬」(諺語) すん 順 [名] じゆん(順)の約。ずん(順)なる順流(しる)參照。古語」

業式部日記「盃のずん(順)のを、大將はおちたまふこと」

順の舞 [句] 次次に舞ふこと。參照「このずんの舞は知りたらんかし」

順の和歌 [句] 順順に讀出たる和歌。參照「かくてずんの和歌、行政の少將の書きつく」

ずん [名] そのしんにまつずぐの所。まつずるをぬわ

るもの』すねもじ(推文字)に同じ。『女の話
簾中舊記』よろづほれし程に、御すもじ有と

す。すうめ。



「さりとて、すやうは、をひとしたみ、
し侍りなんや」

すやね 素家根【名】うはや（上屋）②に

人を卑しめていふ語。曾我扇八景「大名方
お墓のそば、見苦しき素浪人の古塚」

挿粉木を食はぬ者は無し【包】「挿粉木は使用するに從ひて短くなる故、味噌汁の中には、味噌を挿へる時の挿粉木の屑の多少交りる苦なるよりいふ、味噌汁を食はぬ者なき譬。(俚語)」

すりこぎ 挿粉木手【名】尻の丸き茶入。すりこし 磨擦【名】相撲(マ)四十八手の一。

すりこする 磨擦る【動四他】磨りてこす。すりこすて 挿小袖【名】摺模様の小袖。すりこばち 挿粉鉢【名】すりばち(挿鉢)に同じ。

すりこみ 挿込摩込【名】摩込むこと。すりこみ 刷込【名】刷込むこと。すりこみかた 挿込型繪【名】次條に同じ。すりこみさいしき 挿込彩色繪【名】墨摺の繪に型紙(カ)を載せて、上より彩色を挿入れたるもの。安永の頃、橋本江の創めたもの。挿込型繪。

すりこみぞめ 挿込染【名】布帛の上に型紙(カ)を置き、その上より、染料液を含ませたる刷毛にて、種種の色を挿込みて、模様を染出すこと。すりぞめ。

すりこむ 挿込む 摩込む【動四他】すりこみて、物の中へ入る。磨擦して中へ入れ込む。箔をすりこむ【三】箔がひつらふ。胡麻をする。(俚語)

すりこむ 刷込む【動四他】印刷して入る。印刷して入れ込む。

すりこも 摺衣【名】摺繪の衣服。すりこぬ。(古語) 伊勢春日野の若紫のすりこぬのぶのみだれかざり知られず。すりこゑ 時音【名】諸曲にて、先づ聲を發せず、外に聞えぬやうに胸中にて讀ふこと。

すりさがる 滑下る【動四自】すべるやうにしてさがる。(すり上るに對して)

すりさんせう 擦山椒【名】山椒の實をすりつぶしたるもの。

すりし 摺師【名】版木にて書畫を印刷するを職とする人。七職人歌合、すりし、梅の花ばかり、するほどに易き。

すりしき 修理職【名】じゆりしき(修理職)の約。(古語) 源氏さとの殿は、すりしきたくみづかきに宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ。

すりすり 磨白【名】すりうす(磨白)の略。袖中、すりすりといふ物に入れて、すりて米にはなすなり。

すりすかん 摺水干【名】摺繪の水干。著、僧正、柿のすり水干を著て。

すりぞめ 摺染【名】すりこみぞめ(挿込染)に同じ。

すりだし 磨出【名】すりだすこと、又そのすりだし 剃出【名】昔の髮結の弟子。すりだし 刷出 摺出【名】すりだすこと、又そのもの。

すりだし 擦出【名】まっち(構寸)を云ふ。(畿内の語)

すりだしき 磨出 磨出 磨出 磨出【名】ときだしき、久野出、磨出に同じ。

すりだす 磨出す【動四他】磨りみがきて、外面に現す。出ず。發行す。

すりだす 摺出す【動四他】印刷して、世にすりだす 摺出す【名】すれちがひ(擦違)に同じ。丹波興作、すりちがひに、小脇を取り、こぶらを蹴返し。

すりちがひ 摩違ふ【動四自】すれちがひ(擦違)に同じ。

すりちや 摩茶【名】ひきちや(挽茶)に同じ。大宛渡すきの衆あづまの旅におもむきてたづねやすり茶つばのいしふみ。

すりつく 摩附く 擦附く【動下二他】すりて附かしむ。【三】摩擦し、又は燧石に打合せて火を附く。【マツチをすりつく】すりつく 摺附く【動下二他】すりて附かしむ。萬葉かきつばたねにすりつけてますらをのきそひ狩する月は來にけり。

すりづく 摺盡【名】各種の模様を摺出すこと。義經、すりづくしの直垂(カ)にすりつけ 擦附木【名】すりつけ(附木)を見よ。まっち(構寸)に同じ。

すりつけ 擦附箋【名】接合法の一。二枚の板の側面をまっちに削り、押糊を

附けて接合し、兩手にて強く壓し、そのまゝ側立にしてかわかすこと。小割の材をつきあはするに用ふ。

すりづみ 摺鼓 摩鼓【名】羯鼓の類の樂器。指にて、磨りて鳴らすものなりといふ。(古語) 和名、律書樂圖云、摺鼓、摺摩也、俗云、須利都都美。

すりば 英(Shippa)【名】うば(上靴)に同じ。すりば 磨演【名】すりつぶすこと。すりつぶしたるもの。

すりつぶす 磨演す【動四他】すりてつぶす。すりて細末にする。【三】失敗して、財産全部を失ふ。すりきる。する。

すりつぶりんぐ 英(Shippa)【名】(理)電氣の交流ダイナモ、及びモートルのアマチュアのコイルと、外部導線とを連絡するために、アマチュアのアの軸に互に絶縁せられ、固着せる金屬製のブラシ。集電環。

すりな 摺縄【名】土蔵の壁などに、疣結(カ)として摺込を擦相繩。

すりぬか 磨糠【名】もみぬか(粗糠)に同じ。一代、夏をのがれる故もあればとて、摺鉢にすり、糖を煙らせる。

すりぬける 摩脱【動下一他】人ごみの中を掠めて脱出づ。(俚語)

すりぬひ 摺縫【名】摺物と縫物と。模様の摺込み、その上に縫をしたる衣服。すりぬる 摩塗る【動四他】すりて塗りつく。

すりの かみ 修理大夫【名】じゆりのかみ(修理大夫)の約。(古語) 栗蓬その折のすりのかみにては。

すりのく 摩退く【動四自】膝をすりて退く。日本武尊、善惡、御免御免とすりのけは。

すりのこぎり 摺鋸【名】船匠が木の接合部を合はする時に用ふる鋸形は普通の鋸に同じ。

すりの はまをんせん 摺濱温泉【名】(地)薩摩國掛箱郡掛箱村にある温泉。泉質は鹽類泉に屬す。砂蒸(カ)もあり。

すりばがし 磨刺【名】すりてはがすこと、又そのはがしたる物。

すりばか 摺袴【名】摺繪の袴。拾遺「すり袴、すりて造しけるを、運しと責めければ」すり袴の脇の方、股の通りを、雙方より縫にてつなぎからめたるもの。

すりばく 摺箔【名】金銀の箔を摺附くこと、又その物。五人玄産者(カ)の模様にせんきく、萬祝ひて、鶴龜松竹のすり箔はと申されけるに。【三】能の装束の一。白地に金銀箔を摺附けたるもの。著附に用ふ。

すりばくや 摺箔屋【名】摺箔を業とするすりばく 摺鉢【名】形は多く朝顔なりにて、内面に刻み目を附けたる鉢。食物を入れて、挿粉木にてすり砕く。すりこばち。あたりばち。

すりばち 挿鉢 挿鉢【名】昔の男の髪のとおり方の一。奴などの間に行はれたり。すりばちむし 挿鉢蟲【名】(動)「挿鉢の如き形の孔の中に居るよりいふ」あさびさ(後退)に同じ。

すりばん 擦半【名】次條の略。(東京の語)すりばん 擦半鐘【名】半鐘を續けざまに打鳴らすこと。近火の知らせに行ふ。すりばん。(東京の語)

すりばり たらげ 磨針峠【名】(地)近江國大上郡にある峠。彦根町の東一里。中仙道これに通じ、鳥居本(カ)驛は山南に、番場驛は山北に、醍醐(カ)驛は山北に在り。

すりび 擦火【名】摩擦して取りたる火。多く槍を用ふ。【三】まっち(構寸)を云ふ。(關西の語)

すりびし 摺醬【名】魚類、鳥類などの肉を細かに切り、鹽を加へ、酒をかけた食品。すりぶくろ 擦袋【名】ひらちぶくろ(火打袋)に同じ。籠の袋の義にて、籠に入る袋。又は籠を作る材料にて製したる袋ともいふ。(古語) 萬葉、針袋これはたばりぬすりぶくろ今はえてし翁さびせむ。

すりへらす 磨減らす【動四他】すりてへらす。こすりてへらす。

すりぼ

すりぼふし 剃法師【名】あらたに剃髪せる法師。いま道心。そりたてぼふし。蓋馬四條の室町にふりたる郎等のありけり。すり法師なりけるが、これは怖しき者の子なり。

すりぼん 摺本【名】印刷したる書籍。すりまき。印本。刊本。版本。(寫本に對して)百餘部十六羅漢像、並摺本一切經。

すりまき 摺卷【名】前條に同じ。

すりみ 摺身・摺肉【名】魚肉を摺鉢にて磨り、雞卵を交せて、又よく摺り、適宜につくれ、吸卵などに入る食品。【摺節】を製する時生じたる缺損・龜裂を修補する材料とするために、石臼にて搗き、更に摺鉢にてよく摺りたる肉。せくひ。ぬか。もみ。

すりむき 擦刺【名】すりむくこと、又すりむく 擦刺【動四他】物に擦りあてて、外皮に疵を附く。

すりむく 擦刺【動二自】外皮、摩擦せられて傷く。

すりむけ 擦刺【名】すりむき(擦刺)に同じ。

すりめ 摺目【名】模様など摺附けたところ。紫式部日記裳は、かいぶを織りて、大海のすりめにかたどれり。取替あふ事は遠山りのすりめにしづ心なく見けるたれなり。

すりめ 刷目【名】印刷したる筋目。

すりも 摺裳【名】摺繪の裳。髪並、大うみの摺裳、水の色あざやかになどして。

すりも 摺かす 摺斑【名】【動四他】もちずり振摺を見よ。斑に色どりと、模様などを附く。【古語】其あをいりて、模様の衣、すりもどろかしたる水干袴にて。

すりもの 摺物・刷物【名】版木にて刷りたる物。印刷物。【大小俳句・狂歌などに畫を添へて版行せる一枚摺のもの。多くは、奉書摺にて、雅致あるを旨とする。享保頃より始り、文化・文政に流行す。明治以後は、文人・墨客の改名披露・遊藝のさらひの番組などに稀に行はれたり。摺物繪。

すりもの 摺物繪【名】前條に同じ。

すりもやう 摺模様【名】摺りて附けたる模様。

すりや

すりや【接】すればの訛。(俚語) 生寫朝顔話「かはいや、遂に死にやつたわいの。むむ。すりや、淺香どのには最期とや」。

すりやう 受領【名】じゆりやう(受領)の約。【古語】眞兵衛國のすりやうの北の方になしたてまつらん。

受領の土代【句】こがて(小書出)に同じ。【又】又は受領下書ともいふなり。

すりやう けいじ 受領下書【名】こがて(小書出)に同じ。前條參照。

すりやう ぼん 壽草品【名】【書】じゆりやうぼん(壽草品)の約。【古語】髪並泣く泣くざりやうぼんを讀ませたまふに、大駭うちみじろぎたまひて、打ちあざ笑はせたまふ。

すりより 摩寄る【動四自】摩れあはんば、膝をはこびて近寄る。【すりわりたるまば、膝をはこびて近寄る。

すりあ 摺繪【名】印刷したる繪。(かき繪に對して)【刷繪】草木の花葉などの模様の、山藍・月草などの染草にて摺りてあらはしたるもの。ちずり。すりかきぬ(摺狩衣)すりすまん(摺水干)すりこぎ(摺小袖)すりどろ(摺衣)すりばか(摺袴)すりも(摺裳參照。曾我助道、その日の装束には、秋の花野のすりめせしに。

すりあ 摺餌【名】鶯駒鳥などの小鳥を飼ふ餌。炙りたる餅(餅)などと、野菜或は熬糖(あじ)などを交へて摺りたるもの。

すりあがき 摺繪書【名】摺繪を附けること、又摺繪を施したる布帛。

すりたる 摺尾【名】矢羽の黒き羽に、白くかすりたる斑のあるもの。

すり 磨る【動四他】物と物とを強く磨れしむ。こする。【磨る・擦る】摺鉢又は磨臼にて、物をおろし砕く。【摺る】用ひ盡す。費し果す。【身代をすり】版木に刻める模様の、墨又は繪具などを塗りて、紙に寫し取る。印刷す。【摺る・磨る・搦る】靑貝すりす。平並拍みづくすりたる鼓。【帆をおろす】(船頭の語)。

する

する【胡麻をする】に同じ。【摺る】(俚語)磨つたの、揉んだの【包】かれこれと口論す。冤やかくと争ふ。

磨つた揉んだ【句】もつれ。もんちゃく。葛藤。

する 刺る【動四他】その刺の轉訛。

する【動四他】『前條の語の意』人の携帯品を、處に乗じてすばやく拔取る。掏摸(とくも)を爲す。

する【名】ずるきこと、又その人(俚語)ずる【動四自】ずる(磨る)の轉訛するや々にして移る。

するうぶ(英語)【名】汽船のうち、貨物船又は漁船などにおける一種の帆装法、又その帆装を施す汽船。

するが 駿河【名】(地)東海道十五國の一。静岡市及び駿東富士庵原(分)安倍・志太の五郡に分つ。全國静岡縣の管轄に屬す。駿河。

するが 富士ミ一里塚【句】非常に隔ある響。(諺語)

するが せん 駿河御前【名】(人)あさひのか(朝日方)に同じ。

するが せん 駿河小判【名】慶長小判金的一種。文祿慶長の間に、徳川家康が駿河國の金座にて鑄造せしめしもの。縦二寸五分、横一寸六分五厘、重さ四錢二分五厘あり。面に京目一兩と後藤の二字及び花押との墨書あり。駿河墨小判金。

するが せん 駿河細工【名】駿河國静岡市にて製する寄木(木)細工。楠・栗・柳などの薄木を染料に浸し、著色して、種種に組合せ、蒔繪を加へ、或は螺鈿(らでん)を施しなどしたるもの。するがぬり。しづをかざいく。

するが すみばん 駿河墨判【名】次條に同じ。

するが すみばん 駿河墨判小判金【名】するがせん(駿河小判)に同じ。

するが だい 駿河臺【名】(地)東京市神田區の北端に在る高臺一帯の稱。神田川を隔てて本郷區に相對す。

するが だい かの 駿河臺狩野【名】『その

するが

するが 江戸駿河臺にありしよりいふ(狩野)洞雲を祖とする畫家狩野家の一家。かのは(狩野派)參照。

するが だいな せん 駿河大納言【名】(人)さかたはだ(徳川忠長)に同じ。

するが づつみ 駿河包【名】駿河座にて、金を包むつみかた。異通(異通)紙おし廣げ、くるくと駿河包に五十兩、墨黒に似せも似せたり五十兩はい。

するが ざひ 駿河問【名】江戸の初期時代にあつた問法、四人の手足を背後に回し、一つにくり、背に石を載せ、宙に吊上げて振回すもの。糞汁を飲ましめしことありといふ。駿河問狀。

するが 駿河煮【名】餡(あん)を洗ひ、そのだしたまりに酢を加へ、(煮)の抜くるまで煮ること、又その物。

するが ぬり 駿河塗【名】するがせん(駿河細工)に同じ。

するが ばん 駿河版【名】徳川家康が駿河にて版行せしめし書籍。駿河本。

するが ばん 駿河判【名】するがせん(駿河小判)に同じ。

するが ばん 駿河半紙【名】三極(さんごく)の織維にて製したる粗造の半紙。天保時代の創製に係り、専ら駿河國駿東郡より出ししもの。普通の半紙よりは判も小さく、價も廉なりしが、石灰にて煮熱し、しかも漂白せざるため、赤褐色を帯びて美ならず、改其半紙の行はるるに及び、漸次市場に跡を絶つに至れり。

するが まひ 駿河舞【名】『駿河國有渡(う)濱に、天人の降り遊びし體を寫したるものと傳ふるによりていふ』あづま(東舞)に同じ。

するが もの 駿河者【名】駿河國に生れたる人。御尊(みも)駿河もの手まへの物のやうに云ひ。(富士山のことをいへるなり)

するが もんじやう 駿河問狀【名】するが(駿河問)に同じ。

するが らん 駿河蘭建蘭【名】(種)蘭科に屬する多年生の草木。駿河國及び我が國暖地に自生す。高さ二三尺、葉は細長に

して失り、平行脈あり。葉叢の間より花茎出づ。淡黄色に紫色を帯べる不齊花を著く、觀賞用として栽培す。あをぐき。あをし。秋蘭。

するがわん 駿河灣【名】(地) 伊豆半島の尖端なる石廊の灣と遠江國の御前(灣)の間に彎入せる海。

するけ【名】ずけること、又その人。(但語)ずるける【動下】「自」ずらうに構ふ。横著す。しまりなくなる。(但語)

するこける【動下】「自」ずれて落ちかかる。すべりて抜ける。(但語)

するし【形一】「のろし」おそし。緩かなり。【す】らうなり。横著なり。【惡賢くして、慾深し。狡猾なり。こすい。こすつからい。

するす 磔【名】すりうす(磨白)の約。するす 匹如身【名】一物の貯もなきこと。無一物。(古語) 沙石集、人の一物も手に持たぬを、するすといふ。

するす 磨臺【名】「磨は磨りて用ふるよりいふ」す(磨)に同じ。【摺臺】(古語) 長圓集、するすをもどきがほにて洗ふなかくせし名馬。宇治川先登の源頼朝の所有せし名馬。宇治川先登のとき、梶原景季の乗りしもの。陸奥國三月(の)の産。盛衰馬、兵衛佐殿には、をりふし秘藏の御馬三匹あり。生暖(の)磨臺若白毛(の)とぞ申しける。

するす する【名】する(磨)を云ふ。(女の語)するす【名】「する」に同じ。宇治例よりもするすとおひたちて、いみじくおほきになりたり。【物の滑かにするす。

するす する【名】物の長く垂れてひきずるさま。【絛のなきさま。長ひきさま。長びき。【ひにそのままになるさま。ずるずるべったり。釋迦如来誕生會、ひたりと抱付て、一度手並を見せ給はば、後はずるずる此方の物。

するす する【名】前條【名】に同じ。(但語)するす【名】(英、Sultan)【名】アラビア語、權力の義より轉じて、權力者の稱、オスマンリ、トルコ(Osmali)【名】帝國に於ける主權者の稱號。するす。

するす する【名】「と。手すれ。すれあひ 摩合 擦合【名】すれあふこと。すれあふ 摩合 擦合【名】(動四自)【互にこするやうになる。摩擦しあふ。互に伸縮する。(たてて)摩生す。軋轢す。すれえ【名】(英、Stale)【名】(鐵)青みを帯びたて、石盤、根瓦壁瓦等に用ふ。

すれえ【名】スレート 葺【名】石盤石を材料とし、瓦葺の如く葺きたる屋根。洋風

するす する【名】「と。手すれ。すれあひ 摩合 擦合【名】すれあふこと。すれあふ 摩合 擦合【名】(動四自)【互にこするやうになる。摩擦しあふ。互に伸縮する。(たてて)摩生す。軋轢す。すれえ【名】(英、Stale)【名】(鐵)青みを帯びたて、石盤、根瓦壁瓦等に用ふ。

すれえ【名】スレート 葺【名】石盤石を材料とし、瓦葺の如く葺きたる屋根。洋風

するす する【名】「と。手すれ。すれあひ 摩合 擦合【名】すれあふこと。すれあふ 摩合 擦合【名】(動四自)【互にこするやうになる。摩擦しあふ。互に伸縮する。(たてて)摩生す。軋轢す。すれえ【名】(英、Stale)【名】(鐵)青みを帯びたて、石盤、根瓦壁瓦等に用ふ。

すれえ【名】スレート 葺【名】石盤石を材料とし、瓦葺の如く葺きたる屋根。洋風

するす する【名】「と。手すれ。すれあひ 摩合 擦合【名】すれあふこと。すれあふ 摩合 擦合【名】(動四自)【互にこするやうになる。摩擦しあふ。互に伸縮する。(たてて)摩生す。軋轢す。すれえ【名】(英、Stale)【名】(鐵)青みを帯びたて、石盤、根瓦壁瓦等に用ふ。

すれえ【名】スレート 葺【名】石盤石を材料とし、瓦葺の如く葺きたる屋根。洋風

するす する【名】「と。手すれ。すれあひ 摩合 擦合【名】すれあふこと。すれあふ 摩合 擦合【名】(動四自)【互にこするやうになる。摩擦しあふ。互に伸縮する。(たてて)摩生す。軋轢す。すれえ【名】(英、Stale)【名】(鐵)青みを帯びたて、石盤、根瓦壁瓦等に用ふ。

すれえ【名】スレート 葺【名】石盤石を材料とし、瓦葺の如く葺きたる屋根。洋風

するす する【名】「と。手すれ。すれあひ 摩合 擦合【名】すれあふこと。すれあふ 摩合 擦合【名】(動四自)【互にこするやうになる。摩擦しあふ。互に伸縮する。(たてて)摩生す。軋轢す。すれえ【名】(英、Stale)【名】(鐵)青みを帯びたて、石盤、根瓦壁瓦等に用ふ。

すれえ【名】スレート 葺【名】石盤石を材料とし、瓦葺の如く葺きたる屋根。洋風

するす する【名】「と。手すれ。すれあひ 摩合 擦合【名】すれあふこと。すれあふ 摩合 擦合【名】(動四自)【互にこするやうになる。摩擦しあふ。互に伸縮する。(たてて)摩生す。軋轢す。すれえ【名】(英、Stale)【名】(鐵)青みを帯びたて、石盤、根瓦壁瓦等に用ふ。

すれえ【名】スレート 葺【名】石盤石を材料とし、瓦葺の如く葺きたる屋根。洋風

の建物に用ひらる。石盤葺。すれからし 擦枯【名】すり切れたる層。すりからし。【人ずれて、性質のずるくなりたる人。【切る。すれける 擦切る【動下】「自」すれあひてすれける 擦擦【名】「幸うじて相觸れ、又は今すこしにて相觸るるほどに近づくこと。【互に伸のわること。軋轢。諸人、すれすれの中に花咲く木賊かな。すれちがひ 擦違【名】すれちがふこと。すれちがひ。すれちがふ 摩違ふ 擦違ふ【動四自】すれちがひ 摩違ふ 擦違ふ 相觸れて行合ふ。すれちがひからし 擦枯【名】すれからし(擦枯)の訛。

すれは【接】さうすれば。然ある上は。さては。すりや。狂言記(文相)「いやいや、汝共にふたりぢや。すれは、新座ものは、一人でござる。なかなかな、さうぢや。」に同じ。すれは 摩目 擦目【名】すれ損じたる跡。すれたるき。

すれもの 擦者【名】世間に馴れてある人。人ずれてある人。一代互に男ぶりを争ひ、野秋にあひそめ、兩方なれ者、後は金銀の沙汰にもあらず、命あふなし。すれる 摩れる 擦れる【動下】「自」すれる 摩れる 擦れる【名】人中に採まる。世馴る。【世馴れて悪くなる。人ずれる。すれからしになる。

すれ 機欄【名】「植」しゆる(機欄)の約。(古語) 夫木「朝まき梢ばかりに音立てて、すの葉すのむら時雨かな」。

すれ 素羅【名】無紋の白きうすもの。庭訓往來素羅、スロ。

すれ 鐘樓【名】しゆる(鐘樓)の約。(古語) 鐘樓、鐘藏すところ。南の廓などの「すれちんぐめいじん」縦切機、鑿削機(英、Shaping machine) 縦切機、鑿削機に用ふる機械。すてきばん。

すれのき 機欄木【名】「植」する(機欄)に同じ。(古語) 其すの木の、からめきて、わ

るき家のものとは見えす。するんは 數論派【名】(佛)印度古代の哲學の一派。迦尼羅伽を祖として、神我(心)と自性(色)との二元を以て、宇宙の發展を綜合的に説明す。僧法。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。

すわえ 楚枯【名】すは(楚枯)を見よ。紀「昔杖、ホソキスワエントキスワエ」。



(ひだりわす)

すわりは

すわりばじよ坐場所【名】前條に同じ。
すわりもち坐餅【名】かみもち鏡餅を
云ふ。(東國の方言)

すわる坐る【動四自】「すう(据う)と語源を
同じくす」【足】を膝より折曲げて、席にお
ちつく。坐す。【おちつき】定まる。靜ま
る。動かさず。【水底】などに、船膠着して
動かす。【印形押捺(分)】せらる。

すきの字に坐る【句】「姿勢、平假名の
「き」の字に類するよりいふ」片足をす
こし伸ばし、體を崩して坐る。

すの水【名】(佛)四大の一。みづ。「地
水火風」【すの梓】に同じ。吉原屋ま
づ水なる男一度かかる、初對面なれば、も
たれずふらず世間なみにはなす。

すの推【名】おしはかること。推察。推量。
推測。狂言連比類沙門「もし尾沙門天て
ばしごさるか。遅い推かな」

すの錐【名】(きり)錐に同じ。【(數)
立體の一。角錐圓錐の別あり、又、角錐に
三角錐方錐等の別あり。錐體。

すの驢【名】(爾雅)「驢蒼白雜毛馬也」と
あり。鼠色の毛を有する馬。

すの帥率【名】主將。全軍の長。【一
軍のかしら】をさ。

すの錘【名】(博雅)「權謂之錘、其形垂
也」とあり。はかりの分銅。

すの燧【名】(禮記)「左佩金燧、右佩木
燧」とあり。火打(火)。切火(火)。
燧を鑽(る)【句】切火をきりて、火を
作る。

すの隧【名】左傳に「闕地及泉、隧而相
見」とあり。地の中の路。はかみち。穴路。
すの衰【名】衰ふること、又衰へること。
すの翠【名】青ばみたる。みどり色。翠色。
すの醉【名】酒に酔ふこと。あひ。
すの粹【名】まじりけなきこと。純粹。
心中庚申。若衆様の兄様とは「黒白すの
の兄弟」【すづれたるもの】「粹を選ぶ」
【洒落にて、能く人情に通じ、世事に明ら
かなること、又その人。長町女腹切「これ半
七伯母は粹ぢや跡でしつぽりと話しやい

すゐ

の【四花柳社會の事情に通じてあるこ
と、又その人。いき。(やばに對して)
粹が身を食ふ【句】粹人は身を亡
すに至る。【諺語】「幸町千疊敷、かはいご
かしに粹が身をくふ、根引身受は金が幅
する」

すの藤【名】すゐ(藤)に同じ。
すの葎、蕨、藥【名】植物の生殖器械の一。
即ち雄蕊雌蕊の總稱。しべ。【べ。
すの穂【名】(植)穂の中心の莖。わらし
すの瑞【名】めてたきこと。靈瑞。瑞祥。
春迎如來誕生會、去年七月十五夜の夢の瑞、白
象胎内に飛入ると御覽じて」

すの髓【名】(醫)こつす(骨髓)の略。
【(植)莖】莖の中心にあるその基本
組織系の一部。主として、柔組織より成り、
海綿狀組織をなす。幹の成長と共に壓迫せ
られ、年を経るに従ひて、つひに消失する
こと多し。すゐん(髓線)參照。【柔き部
分。【しん。しんぼう。中心。髓腔のず
ゐから天井のぞく】「技藝の妙所。神髓。
こつ」

すの隨【名】きずむ。きまふ。わがまま。
【隨義】今までは公界向(公)の由、この後
は私を致して遊ばし候へ」

すの隋【名】支那の朝廷の一。六朝(の)の
後、唐朝の前にありて、わが紀元一二二四
年より一二七七年まで續けり。

すのあい翠靄【名】翠色のものや。
すのあがんとく、水蛙眼目【名】(書)せい
あせ(井蛙)を見よ。

すのあつ水壓機【名】水の壓力。
すのあつつき水壓機【名】(理)液體の傳達
する壓力によりて、物體を高く揚げ、又は
壓搾する機械。大なる活塞を有する筒筒と
一の押上ポンプとを結合し、そのポンプよ
り送り出せる水の力を、活塞の下面に加
はらしむる装置をなせるもの。

すのあつつきくわん水壓機關【名】原動力
に強水壓を用ふる機關。その壓力、蒸汽機
關に比すれば、非常に高し。必要の時のみ
短時間働くを常とす。

すのあつつきくわん水壓起重機【名】す
の【四花柳社會の事情に通じてあるこ
と、又その人。いき。(やばに對して)
粹が身を食ふ【句】粹人は身を亡
すに至る。【諺語】「幸町千疊敷、かはいご
かしに粹が身をくふ、根引身受は金が幅
する」

すゐあつ

すゐあつつきくわん水壓起重機【名】す
の【四花柳社會の事情に通じてあるこ
と、又その人。いき。(やばに對して)
粹が身を食ふ【句】粹人は身を亡
すに至る。【諺語】「幸町千疊敷、かはいご
かしに粹が身をくふ、根引身受は金が幅
する」

すゐあつつきくわん水壓起重機【名】す
の【四花柳社會の事情に通じてあるこ
と、又その人。いき。(やばに對して)
粹が身を食ふ【句】粹人は身を亡
すに至る。【諺語】「幸町千疊敷、かはいご
かしに粹が身をくふ、根引身受は金が幅
する」

すゐあつつきくわん水壓起重機【名】す
の【四花柳社會の事情に通じてあるこ
と、又その人。いき。(やばに對して)
粹が身を食ふ【句】粹人は身を亡
すに至る。【諺語】「幸町千疊敷、かはいご
かしに粹が身をくふ、根引身受は金が幅
する」

すゐあつつきくわん水壓起重機【名】す
の【四花柳社會の事情に通じてあるこ
と、又その人。いき。(やばに對して)
粹が身を食ふ【句】粹人は身を亡
すに至る。【諺語】「幸町千疊敷、かはいご
かしに粹が身をくふ、根引身受は金が幅
する」

すゐあつつきくわん水壓起重機【名】す
の【四花柳社會の事情に通じてあるこ
と、又その人。いき。(やばに對して)
粹が身を食ふ【句】粹人は身を亡
すに至る。【諺語】「幸町千疊敷、かはいご
かしに粹が身をくふ、根引身受は金が幅
する」

すゐあつつきくわん水壓起重機【名】す
の【四花柳社會の事情に通じてあるこ
と、又その人。いき。(やばに對して)
粹が身を食ふ【句】粹人は身を亡
すに至る。【諺語】「幸町千疊敷、かはいご
かしに粹が身をくふ、根引身受は金が幅
する」

すゐあつつきくわん水壓起重機【名】す
の【四花柳社會の事情に通じてあるこ
と、又その人。いき。(やばに對して)
粹が身を食ふ【句】粹人は身を亡
すに至る。【諺語】「幸町千疊敷、かはいご
かしに粹が身をくふ、根引身受は金が幅
する」

すゐあつつきくわん水壓起重機【名】す
の【四花柳社會の事情に通じてあるこ
と、又その人。いき。(やばに對して)
粹が身を食ふ【句】粹人は身を亡
すに至る。【諺語】「幸町千疊敷、かはいご
かしに粹が身をくふ、根引身受は金が幅
する」

すゐあつつきくわん水壓起重機【名】す
の【四花柳社會の事情に通じてあるこ
と、又その人。いき。(やばに對して)
粹が身を食ふ【句】粹人は身を亡
すに至る。【諺語】「幸町千疊敷、かはいご
かしに粹が身をくふ、根引身受は金が幅
する」

すゐあつつきくわん水壓起重機【名】す
の【四花柳社會の事情に通じてあるこ
と、又その人。いき。(やばに對して)
粹が身を食ふ【句】粹人は身を亡
すに至る。【諺語】「幸町千疊敷、かはいご
かしに粹が身をくふ、根引身受は金が幅
する」

すゐあつつきくわん水壓起重機【名】す
の【四花柳社會の事情に通じてあるこ
と、又その人。いき。(やばに對して)
粹が身を食ふ【句】粹人は身を亡
すに至る。【諺語】「幸町千疊敷、かはいご
かしに粹が身をくふ、根引身受は金が幅
する」

すゐいさ

講に同じ。醒睡笑老僧。小僧。ち若衆言
ひ合はせて、すゐい講のまはし始まれり」
すゐいさく隨意作【名】(農)かてさく(勝
手作)に同じ。

すゐいしゆらうしゆくち隨意終了借
地【名】(英)「tenant at will」地主又は小作
人の中、一方が借地契約の解除を申し出づ
れば、何時にも、これに應ずることを約束
する借地法。

すゐいさく隨意【名】多くの物事のうちの
第一。さしげ。

すゐいさく隨意【名】隨意なるさま。
すゐいさく隨意【名】随意的動作【名】い
うてさく(有意的動作)に同じ。

すゐいさく随意【名】随意的動作【名】い
うてさく(有意的動作)に同じ。

すゐいさく随意【名】随意的動作【名】い
うてさく(有意的動作)に同じ。

すゐいさく随意【名】随意的動作【名】い
うてさく(有意的動作)に同じ。

すゐいさく随意【名】随意的動作【名】い
うてさく(有意的動作)に同じ。

すゐいさく随意【名】随意的動作【名】い
うてさく(有意的動作)に同じ。

すゐいさく随意【名】随意的動作【名】い
うてさく(有意的動作)に同じ。

すゐいさく随意【名】随意的動作【名】い
うてさく(有意的動作)に同じ。

するえい 垂櫻【名】下方に垂れたる櫻。諸大臣の用ふるもの。たれえい。

するえい 水泳【名】およぎ。水練。游泳。するえいじゆつ 水泳術【名】水泳の技。水練。游泳術。

するえう 水曜【名】七曜の一。水星。曜天皇廿四地に水輪あり、星に水曜、北方一徳の水あり。【三】するえうび(水曜日)の略。

するえう 瑞妖【名】めでたきさざしと災のきざしと。吉瑞と凶兆と。

するえう 水曜日【名】七曜中の第四の日。火曜日の次、水曜日の前日。するえう。

するえき 水驛【名】船つきば。津驛。するえき 唾液【名】『醫』獨 Pankreas 分泌液の一。その最も主要をなす。唾液より分泌するもの。胆汁と共に、輸尿管より十二指腸中に注ぐ。無色透明にして、わずかに鹹味を有し、数種の有機物質を含み、強きアルカリ性を帯び、唾液、胃液、胆汁の三者の性を兼ね備へ、澱粉及び蛋白質を液化し、また脂肪を乳化する能あり。

するえん 炊烟 炊煙【名】飯を焚く煙(け)の煙。するえん 燧烟 燧煙【名】のろし。燧火。するえん 水烟 水煙【名】湖水海川などの上に立つ霧(き)。【三】火に縁ある名を避けて、水に因める稱呼を用ふるは、我が國工匠の習慣なり。塔の九輪の上の方に、飾として取附くる火烟。後世には、火烟の性質を脱したる形のもの尠からず。

するえん 翠烟 翠煙【名】みどりのけむり。

するえん 垂涎 垂涎【名】するせん(垂涎)の誤讀。するえん 推行 推行【名】ふえん(敷衍)に同じ。

するえん 水鉛【名】『鐵』もりぶでんに同じ。するえん 瑞烟 瑞煙【名】めでたきけむり。

するえん 隨縁 隨縁【名】(佛)縁につれて、自體の動作すること。例へば、風の縁に應じて、水の波を起し、佛陀の衆生の機に應じて、教化を施す類。

するえん 水鉛鉛【名】(鐵)より成る鐵石。結晶は正方晶にして、錐形又は卓狀をなし、透明乃至半透明の淡黄、灰赤等の色を呈し、質は柔かにして脆く、熔けやすし。我が國にては、越前國に産す。するえん 隨縁眞如【名】(佛)眞如はもと一なれども、縁に隨ひて、萬法にあらはれること。本體が諸種の現象を呈すること。聖德太子繪御並前に法性無漏の海、隨縁眞如の波は打つとも。

するえん 瑞應 瑞應【名】めでたき感應。瑞應。するえん 瑞應寺【名】長門國阿武(び)郡椿郷西分(ぶん)村字青海にある臨濟宗南禪寺派の寺。創建の年代詳かならず。舊稱 觀喜寺、中世以後大照院といひ、明治以後、今の名に變れり。もと天台宗に屬したりといふ。

するえん 翠霞 翠霞【名】翠色のかすみ。するえん 醉歌 醉歌【名】酔ひて、歌を作り、又は歌ふこと、又その歌。するえん 誰何 誰何【名】『淮南子』に「不知誰何之者誰何」とあり。誰れなるか、その姓名の何と呼ぶか、不明なること。なんびと。たれ。【二】何を呵の意に用ひたるもの。漢書儀に、呵の字を用ひたる例あり。誰ぞやと聲をかけて、通行人の名をただすこと。【誰呵】

するえん 垂下 垂下【名】垂れさがること。垂しさがること。下垂。【開竅】を見よ。

するえん 垂加 垂加【名】(人)やまきあんさい(山崎)の敬稱。【佛】すだ(垂語)に同じ。

するえん 水界 水界【名】地球上水に屬する部分。【佛】すだ(垂語)に同じ。

するえん 水害 水害【名】洪水のわざはひ。出水のための損害。水災。水患。水難。するえん 水涯 水涯【名】水のほとり。水邊。するえん 翠蓋 翠蓋【名】翠色のきぬがさ。

するえん 水界線 水界線【名】(地)するえん(水位)に同じ。

するえん 水界地理學 水界地理學【名】(地)するえん(水圏學)に同じ。

するえん 水害豫防 水害豫防【名】水害を未然に防ぐこと。

するえん 水害豫防組合 水害豫防組合【名】水害豫防に關する事業のために設くる組合。水害を受くべき土地の區域内に於て、土地、家屋及び組合規約に指定せる工作物を所有せる者を以て組織す。

するえん 水交 水交【名】(淡交)に同じ。するえん 水耕 水耕【名】『英』Water culture 土壌を用ひず、諸種の養液を以て、植物を養育すること。蒸溜水に溶したる硝酸石灰、硝酸加里、硫酸苦土などの液中にて試養す。専ら植物養分の試験に行ふ。

するえん 水行 水行【名】水をわたること。するえん 水の流れること。

するえん 遂行 遂行【名】なしとぐること。おこなふこと。

するえん 垂囊 垂囊【名】『囊』即ち弓袋を垂るる義にて、その中に弓の無きをいふ。左傳の昭公元年の條に見ゆ。平和の有様形容考ふること。思考。思案。

するえん 推敲 推敲【名】『書言故事』に「賈島於京師(驢)蹄得句、鳥宿池邊樹、僧敲月下門、始欲著推字、又欲下敲字、鍾未定、引手作敲推勢、時韓愈推京尹、島不覺衝至第三節、左右擁至尹前、島具道所所得、愈曰敲字佳、與並韓韓爲布衣交、ことあるに本づく。詩文など作る時、さまざまに用語用字を工夫鍛鍊すること。【と】

するえん 推考 推考【名】推窮して拷問すること。

するえん 衰耗 衰耗【名】おとろへ減すること。するえん 隨行 隨行【名】長上のしりへに附隨ひて行くこと。ともをすること。

するえん 瑞香 瑞香【名】おんちやうげ(瑞香)の異稱。『曲金』に「梅檀沈瑞香の上に立上る雲烟を立てて」。

するえん 髓腔 髓腔【名】(醫)長骨の中空なる部分。骨の重量を減じて、運動を敏速ならしむる効あり。

するえん 瑞香科 瑞香科【名】(植)顯花植物。被子類雙子葉門、離瓣花區の一科。灌木又は喬木、稀に草本にして、木皮強靱。葉は單葉全邊。互生又は對生、托葉を缺く。花は兩性、稀に單性にて、整齊花被を有し、簇生す。この科の植物は、通常有毒なるも、觀賞用藥用等に用ふべきものあり。ちんちやうげくわ。

するえん 水硬計 水硬計【名】『英』Hydrameter 石鹼液を用ひて、水の硬度を測定する裝置。

するえん 水交社 水交社【名】東京市京橋區築地及びその他各鎮守府各要港部の所在地にある海軍將校の集會所。

するえん 隨行者 隨行者【名】するえん(隨行員)に同じ。

するえん 水硬石灰 水硬石灰【名】(鐵)水中にてもよく硬化する石灰。硫酸石灰、磷酸石灰の外に、多量の生石灰を含有す。石灰石の成分中、百分の七三乃至九二の岩酸石灰を有し、他は粘土もしくは硫酸石灰なる時、燒きて得たるもの。

するえん 垂坑道 垂坑道【名】垂直に穿ちたる坑道。(平坑道に對して)。

するえん 水耕法 水耕法【名】(植)するえん(水耕)に同じ。

するえん 隨行員 隨行員【名】隨行する人。

するえん 水閣 水閣【名】水のほとりにある樓閣。水亭。

するえん 醉客 醉客【名】酒に酔ひたる人。互得、愈曰敲字佳、與並韓韓爲布衣交、ことあるに本づく。詩文など作る時、さまざまに用語用字を工夫鍛鍊すること。【と】

するえん 水客 水客【名】せんどう。漁夫。【愛の花】。

するえん 推敲 推敲【名】つとめて穿義すること。おしはかりきはむること。

するえん 衰耗 衰耗【名】おとろへ減すること。するえん 隨行 隨行【名】長上のしりへに附隨ひて行くこと。ともをすること。

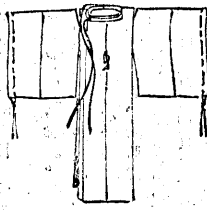
するえん 瑞香 瑞香【名】おんちやうげ(瑞香)の異稱。『曲金』に「梅檀沈瑞香の上に立上る雲烟を立てて」。

すかん

すかんく 吹角【名】くどぶえを吹くこと。
すかんくしゆ 吹角手【名】喇叭を吹く人。
すかんしんたう 垂加神道【名】『垂加の二字は神道五部書の一なる寶基本紀に「神垂以三神爲先、冥加以正直爲本」とあるに本づく』山崎闇齋を祖とする神道の一派。闇齋は忌部（？）神道の流を汲める石田（？）勢力（？）に就きて、神道を學べり。垂加流。

すかん 水開【名】『ひのくち。水門。』
すかんふ 開門【名】同じ。
すかんがほ 粹顔【名】粹らしき顔。通人ぶること。若風、人の氣の附かぬ所に心を働かせ、粹顔なる法師の。
すかん 水檻【名】水邊のすすり。水に臨める欄檻。

すかん 水干【名】『着用するにしなやかならしめんがために、水張にして干したる絹。』水干の絹。『水干の狩衣の義』裝束の一。仕立は狩衣と同じくして、胸と背面の左右の袖、及び腋の四箇所に、上下二つづつの菊綴（きくづ）を附け、九組の紐（ひも）の上、まへ、及び後方の中央に附けたるもの。地は紗精好練平絹（さけうれんへいけん）などを用ひ、色は概ね白く、袴は貴人は直垂（ちかたけ）の似たるを用ひ、普通は半袴を用ひたり。王朝以後、狩衣の少しく變りたるものにて、官服にあらず。内内の服なるが故に、一般に著用し、童子も用ひたり。宇治著たりける水干を脱きて。『水干のほとり。水涯。』と、ひでりと。



(すかんかみ)

すかん 水早【名】洪水と旱魃と。でみづと、ひでりと。
すかん 推勘【名】罪狀を取調ること。せ
すかん 醉眼【名】酒に酔ひたる人。ゑひ
すかん 衰顔【名】衰へたる顔。憔悴したるがん 醉顔【名】酒に酔ひたる顔。

すかん 衰顔【名】衰へたる顔。憔悴したるがん 醉顔【名】酒に酔ひたる顔。

すかん

すかん 醉眼【名】酒に酔ひたる時、ものをみる目つき。『老眼。』
すかん 翠岸【名】草木繁茂し、青苔の生えて翠色をなせる岸。
すかん 水窟【名】『羅（Roma）全身の營養障害を受けたる幼児に發する腫瘍。最初、頬部殊に口角の粘膜を侵し、蔓延速かにして、壞血を來し、多く死に至らしむ。』
すかん 隨感【名】思ふまま。感ずるまま。

隨感隨筆【包】感ずるままに書附くること。又その書附けたる文書。
隨感隨錄【包】すかんろく（隨感錄）に同じ。

すかん 瑞威【包】すかんろく（瑞威）に同じ。
すかん 水干鞍【名】『水干狩衣などを著用せる時、用ふる鞍の義。』山形薄く、乗間狭く作りたる鞍。甲冑を著用せる時に用ひたり。中古以後の物なるが如し。
すかん 瑞嚴寺【名】陸前國宮城（？）郡松島村字松島にある臨濟宗の寺。慈覺大師の創建。本尊は聖觀音。青龍山瑞嚴圓福寺と號す。伊達氏の菩提所。
すかん 瑞嚴寺【名】感興のまにまに記したる文書。隨感隨錄。
すかん 瑞嚴寺【名】感興のまにまに記したる文書。隨感隨錄。

すかん 瑞嚴寺【名】感興のまにまに記したる文書。隨感隨錄。
すかん 瑞嚴寺【名】感興のまにまに記したる文書。隨感隨錄。

すかん 水氣【名】しめりけ。みづけ。
すかん 雨後【名】雨の潤へる處より立昇る水蒸氣。『も』と支那の露家の用語にて、證治要訣に「腫病不」一、遍身腫、四肢腫、而腫、脚腫、方謂是水氣」とあり。『身體中の組織又は空所に、通常腎臓又は心臓病の一徵候とす。獨立の病にはあらず。また普通には、皮下に水の溜るのみにいふ。水腫（？）』
すかん 水鬼【名】水をつかさどる鬼。太平記、水鬼は、洪水を流して、敵を陸地に溺らす。『航海中などに見ゆるあやしきもの。ふないうらい。』

すかん 水鬼【名】水をつかさどる鬼。太平記、水鬼は、洪水を流して、敵を陸地に溺らす。『航海中などに見ゆるあやしきもの。ふないうらい。』

すかん 水鬼【名】水をつかさどる鬼。太平記、水鬼は、洪水を流して、敵を陸地に溺らす。『航海中などに見ゆるあやしきもの。ふないうらい。』

すかん

すかん 衰季【名】衰へたる末の時。晩季。
すかん 醉氣【名】酒に酔ひたる氣分。
すかん 瑞氣【名】めでたき氣。瑞雲。嘉氣。
すかん 瑞龜【名】瑞兆として出現したる龜。著書「毛生ひたる龜を、甲三寸ばかりなり。その上に青き毛生ひたり。長さ一すに及べり。瑞龜とぞ沙汰ありける。』
すかん 隨喜【名】（佛）人の善事を見て、隨同し歡喜すること。喜びて信仰すること。ありがたがること。『善哉、かつは隨喜のため、聽聞のゆゑに、殊なくつとひたまへり』。『善哉、三世の諸佛も、定めて隨喜したまふべし』。
隨喜の涙【包】隨喜の餘に出づる涙。『聖德太子繪馬、太子歡喜隨喜の涙をうる。』
すかん 芋苗 芋莖【名】芋の幹。芋莖に芋苗の神輿（？）【包】すかんまづり芋苗祭を見よ。

すかん 芋苗 芋莖【名】芋の幹。芋莖に芋苗の神輿（？）【包】すかんまづり芋苗祭を見よ。
すかん 芋苗 芋莖【名】芋の幹。芋莖に芋苗の神輿（？）【包】すかんまづり芋苗祭を見よ。

すかん 芋苗 芋莖【名】芋の幹。芋莖に芋苗の神輿（？）【包】すかんまづり芋苗祭を見よ。
すかん 芋苗 芋莖【名】芋の幹。芋莖に芋苗の神輿（？）【包】すかんまづり芋苗祭を見よ。

すかん 芋苗 芋莖【名】芋の幹。芋莖に芋苗の神輿（？）【包】すかんまづり芋苗祭を見よ。
すかん 芋苗 芋莖【名】芋の幹。芋莖に芋苗の神輿（？）【包】すかんまづり芋苗祭を見よ。

すかん 芋苗 芋莖【名】芋の幹。芋莖に芋苗の神輿（？）【包】すかんまづり芋苗祭を見よ。
すかん 芋苗 芋莖【名】芋の幹。芋莖に芋苗の神輿（？）【包】すかんまづり芋苗祭を見よ。

すかん 芋苗 芋莖【名】芋の幹。芋莖に芋苗の神輿（？）【包】すかんまづり芋苗祭を見よ。
すかん 芋苗 芋莖【名】芋の幹。芋莖に芋苗の神輿（？）【包】すかんまづり芋苗祭を見よ。

すかん 芋苗 芋莖【名】芋の幹。芋莖に芋苗の神輿（？）【包】すかんまづり芋苗祭を見よ。
すかん 芋苗 芋莖【名】芋の幹。芋莖に芋苗の神輿（？）【包】すかんまづり芋苗祭を見よ。



(すかんぎう)

すかん

は大紋（？）にして、純黒色を呈し、絞下（？）（？）赤く、中渡（？）は絞あらく、絞の上下共に茶褐色を呈す。
すかん 推鞠【名】犯罪人等を取調ぶること。吟味。推問。訊問。
すかん 翠菊【名】（植）菊の一種。下種の季節によりて、越年草と一年草との二種あり。莖の高さ一二尺、花は越年のものは夏一年のものは秋開く。共に紅白紫碧等種種あり。
すかん 隨喜功德品【名】（書）法華經の第十六品。佛の滅後に法華經を開きて、隨喜することの功德を説けり。

すかん 垂泣【名】涙を垂れて泣くこと。
すかん 推及【名】おしおよぼすこと。おしおよぶこと。
すかん 芋苗祭【名】京都の北野神社の祭禮（十月四日、もとは陰曆九月四日）に附隨して行はる神事。芋苗の神輿（？）として、骨子は木にて造り、屋根を芋苗にて葺き、鳥居、環（？）等はすべて野菜類にて飾り、所所に湯葉、寒天、海藻などに造りたる花鳥人物等を添へ、神幸（？）の後に伍して、巡行する。豊年祭。
すかん 水金【名】土井海砂又は流水より採取したる黄金。
すかん 水禽【名】みどり（水鳥）に同じ。
すかん 炊金【名】次條を見よ。
炊金饌玉【包】『賈賈玉の詩に「炊金饌玉待鳴鐘」、庾信の詩に「齊宮饌玉饌學炊金」など見ゆ。金を炊（？）ぎ、玉を饌する義』奢りたる食事の饌。
すかん 醉吟【名】酔ひて、詩歌を吟ずること。

すかん 水銀【名】（鑛）銀白色を呈し、常溫にては液體をなせる金屬。元素の一。比重水の十三倍半餘。攝氏零下四十度に冷せば固體となり、三百五十度に熱すれば氣體に變ず。遊離して產出することあれども、多くは硫化物たる辰砂を灼きて製す。純粹なるは寒暖計、晴雨計等に用ひられ、昇汞、甘汞などの製造及び寫眞術、染色術等にも用ひられ、他の金屬と混和せるをア

すかん 水銀【名】（鑛）銀白色を呈し、常溫にては液體をなせる金屬。元素の一。比重水の十三倍半餘。攝氏零下四十度に冷せば固體となり、三百五十度に熱すれば氣體に變ず。遊離して產出することあれども、多くは硫化物たる辰砂を灼きて製す。純粹なるは寒暖計、晴雨計等に用ひられ、昇汞、甘汞などの製造及び寫眞術、染色術等にも用ひられ、他の金屬と混和せるをア

すかん 水銀【名】（鑛）銀白色を呈し、常溫にては液體をなせる金屬。元素の一。比重水の十三倍半餘。攝氏零下四十度に冷せば固體となり、三百五十度に熱すれば氣體に變ず。遊離して產出することあれども、多くは硫化物たる辰砂を灼きて製す。純粹なるは寒暖計、晴雨計等に用ひられ、昇汞、甘汞などの製造及び寫眞術、染色術等にも用ひられ、他の金屬と混和せるをア

すかん 水銀【名】（鑛）銀白色を呈し、常溫にては液體をなせる金屬。元素の一。比重水の十三倍半餘。攝氏零下四十度に冷せば固體となり、三百五十度に熱すれば氣體に變ず。遊離して產出することあれども、多くは硫化物たる辰砂を灼きて製す。純粹なるは寒暖計、晴雨計等に用ひられ、昇汞、甘汞などの製造及び寫眞術、染色術等にも用ひられ、他の金屬と混和せるをア

すかん 水銀【名】（鑛）銀白色を呈し、常溫にては液體をなせる金屬。元素の一。比重水の十三倍半餘。攝氏零下四十度に冷せば固體となり、三百五十度に熱すれば氣體に變ず。遊離して產出することあれども、多くは硫化物たる辰砂を灼きて製す。純粹なるは寒暖計、晴雨計等に用ひられ、昇汞、甘汞などの製造及び寫眞術、染色術等にも用ひられ、他の金屬と混和せるをア

マルガムといふ。みつかね。

すゐきん 瑞禽【名】すゐきん(瑞鳥)に同じ。

すゐきんかんたんけい 水銀寒暖計【名】
「英Mercury thermometer」水銀を用いたる寒暖計。即ち最も普通なるものにて、主に高温度を測るに用ふ。

すゐきんくうきぼんぷ 水銀空氣唧筒

【名】「理」英Mercury air pump「真空」に近きまでの程度に排氣するために、一種の形をなせる硝子管に、水銀を入れたるポンプ。テンプル(Temple)の創製せるもの、スプレングル(Sprengel)の案出せるもの等、種種あり。水銀ぼんぷ。

すゐきんしん 水銀疹【名】「醫」水銀劑を多量に内用或は外用せしとき、又は少量にても體質特異のものに發する發疹。

すゐきんじようき 水銀蒸氣【名】「英」英renew vapour「氣體の水銀」。

すゐきんじようきとんとう 水銀蒸氣電燈【名】「英」Mercury vapour lamp「弧光電燈の一」真空の硝子管の一端に水銀を入れて、電流を通じ、水銀蒸氣を造りて、弧光を發せしむるもの。水銀電燈。

すゐきんせうけい 水銀晴雨計【名】
「英」Mercury barometer「水銀を用いたる晴雨計。せうけい(晴雨計)参照」。

すゐきんちゆうき 水銀中毒【名】水銀劑の内服、或は外用によりて起る中毒症。

すゐきんづけ 水銀漬【名】「理」英Amalgamation「金屬の表面をアマルガムにすること。電池の極として、亜鉛を用ふる際に、局部電流を生ずる等の不利益を防ぐために」。

すゐきんてんとう 水銀電燈【名】「英」英renew lamp「すゐきんじようき(水銀蒸氣電燈)に同じ」。

すゐきんなんかう 水銀軟膏【名】水銀と豚脂、および牛脂とをよく混合せしめて製する軟膏。微毒者に塗擦劑として應用せられ、また膿腫皮膚の寄生蟲等に塗擦することあり。灰白軟膏。

すゐきんばい 水龍【名】「植」みつきはい(水龍)に同じ。

すゐきんぼんぷ 水銀唧筒【名】「理」英Mercury pump「すゐきんくうきぼんぷ水銀空氣唧筒に同じ」。

すゐきんるゐ 水禽類【名】「動」うきんるゐ(水禽類)に同じ。

すゐきやう 水郷【名】沼池河流などの多くある里。水邊のさと。水村。

すゐきやう 醉狂【名】酒に酔ひて狂ふこと。癡如來癡生貪我れ等に悪い癖あつて、一滴にても飲むと、ひとしく醉狂して、腰の劍をすりと抜き「ものずき。好事。『祥狂』」。

すゐきやう 水鏡【名】「みつかがみ(水鏡)に同じ。『世説の賞譽篇上劉志の庸統傳註等に見ゆ』人の鑑(かた)となること、又その人。『に同じ』」。

すゐきやう 水經【名】「書」すゐけい(水經)「酒家のある里」。

すゐきやう 睡郷【名】夢に魂の通ふといふ處。夢のうち。

すゐきやう 睡郷【名】夢に魂の通ふといふ處。夢のうち。

すゐきやう 瑞形【名】すゐきやう(瑞形)に同じ。『佛』「小相」。

すゐきやう 隨形好【名】「佛」「小相」は、單に好といひ、大相(單に相ともいひ、三十二種ありとて、三十二相の稱あり)に隨伴せる細小の相なるよりいふ「佛及び菩薩の姿に、大相小相の區別ある中の小相。これに八十種好の細別あり。はちじよくて(八十種好参照)」。

すゐきやうじん 醉狂人【名】物ずきなる人。癡癡かの足がなへの醉狂人の鼻をかかし。『に同じ』」。

すゐきやうもの 醉狂者・粹狂者【名】前條

すゐきやく 水脚【名】ふなあし。吃水。

すゐきやくちん 水脚賃【名】ふなちん船賃)に同じ。

すゐきゆう 推窮【名】理を推して考へきはむること。推究。

すゐきよ 出舉【名】すゐき(出舉)を見よ。

すゐきよ 水渠【名】みぞ。溝渠。

すゐきよ 水居【名】水上に住居すること。ふなずまひ。

すゐきよ 推舉・吹舉【名】人を職務などにすゐめあぐること。すゐせん。推舉。

すゐきよ 吹嘘【名】「吹は氣を出すこと」の急なるをいひ、嘘はその緩なるをいふ。『息(いき)を吹きかゝること。』前條に同じ。『正統監維貞といひし者、吹嘘によりて、修理大夫になりしをだにも、いかがと申しけるが、誠にその身もやがて失せはべりにき』

すゐきよ 水魚【名】水と魚と。魚水。

水魚の親(おや)【名】次條に同じ。『天智天皇、主従水魚の因をなし』

水魚の交(かひ)【名】「蜀志の諸葛亮傳に「孤之有孔明、猶魚之有水、願勿復言」とあり」きはめて親しきまじはり。魚水の交。水魚の親。

すゐきやう 懽懽【名】おち恐るること。おちおちする。

すゐきやう 垂拱【名】「衣を垂れ、手を拱(こ)といふ義」『書經の武成篇に「垂拱而天下治」とあり』貴人の何事をなさずして、臣下のなすまに任すること。正統紀官にその人ある時は、君は垂拱してまします』

「禮記の玉藻篇に「侍於君、垂拱」とあり」衣を垂れ、手を拱きて敬禮すること。『に同じ』」。

すゐきよく 水玉【名】すゐきよ(水玉)にすゐきよしや 水魚紗【名】水と魚とのぬひをしたる紗なるべしといふ。秋後長物語「水魚紗の水干召されて、御年のほど十六七に見えさ給ふを」

すゐきよじやう 推舉狀【名】推舉する書

すゐきよじやう 推舉御教書【名】鎌倉及び室町時代に、幕府にて、推舉のため下しし御教書。

すゐく 衰軀【名】おとろへたるからだ。

すゐく 炊具【名】炊事の道具。

すゐくきやう 隨求經【名】「書」佛經の一。支那唐の寶思惟の譯。祕密部に屬す。其經は、法華經はさらなり、千手經普賢十願隨求經尊勝陀羅尼」

すゐぐだらに 隨求陀羅尼【名】「佛」隨求

經に説きたる陀羅尼。大藏經に屬し、刺が鳥を刺す時隨求陀羅尼を唱へる。

すゐくん 水軍【名】水上にて戦ふ軍。ふないくさ。なふて。海軍。

すゐくわ 水火【名】水と火と。『洪水と火災と。』左傳の昭公十三年の條に「衆怒如三水、火不可爲謀」とあるに本づく「勢の烈しき譬。『論語の衛靈公篇に「民之於仁也、甚於水火」とあるに本づく』日常極めて必要なる物事の譬。水に溺れ、火に焼かるることときき。『反目疾視すること。交のうときき』

水火を通ぜず【名】「漢書の孫寶傳に「杜門不通水火」とあり。水と火とは日常缺くべからざる物なるに、それをすら融通貸借せずとの意」近郷の組合の者に對しても、交際往來をなさず。

水火を踏む【名】「論語の衛靈公篇に「水火吾見蹈而死者矣」とあり』危險を冒す。

すゐくわ 水華【名】茶の湯にて、午前四時頃に汲取りし井戸水の稱。

すゐくわ 水化【名】「化」英Hydation「水、その中に含有せる炭酸瓦斯及び酸素のために、岩石に對して及ぼす、溶解もしくは化學的變化的作用」。

すゐくわ 西瓜【名】「植」葫蘆(くわ)科に屬する一年生の蔓草。原産地は南部亞非利加。花は甜瓜のに似、秋に至りて瓜を結ぶ。その大きき冬瓜に似て、それよりも圓く、皮は深緑色にして、肉は普通赤色を呈し、水分多くして甘く、生食す。瓜の皮の水色にして、肉は淡紅種子は赤きものを、白西瓜といふ。

すゐくわ 燧火【名】きりび。うちび。『のろし。燧火。燧煙』

すゐくわ 翠華・翠花【名】「支那にて、天子の旗は、翠羽を以て飾とせしよりいふ」天皇の旗。太平記洛中須臾に變化して、六軍、翠華を守護したるべし」

「神典。著國都督夢想の事ありて、安樂寺の御祭をはじめて、八月二十一日翠華を淨妙寺にめぐらす」

すゐくわ 炊火【名】飯を炊ぐ火。

くわ

炊火無し【句】祭祀絶ゆ。子孫絶ゆ。
すゐくわ 睡眠【名】ねむりふすこと。
すゐくわ 醉臥【名】酒に酔ひて臥すこと。
ゑひたふること。醉倒。

すゐくわ 水畫【名】五色に彩(いろ)り、蠟に浸したる砂を水上に浮べて、繪をかく遊戯。
すゐくわ 瑞花【名】「豊年の瑞相となる花の義」ゆき雪の異稱。「と」。

すゐくわ 衰壤【名】衰へくつること。
すゐくわ 翠光【名】みどり色の光。
すゐくわ 水光【名】水のひかり。水の色。

すゐくわ 瑞光【名】瑞光を示す光。太平鳥昨秋の光物。三種の神器を擁護し、萬乗の聖主を鎮衛したまふ瑞光なり。
すゐくわ 瑞光院【名】山城國紀伊郡深草にある日蓮宗の寺。本尊は釋迦。明暦元年政上人の舊極樂寺の薬師堂の遺跡によりて、建立せしもの。

すゐくわ 水郭【名】水の邊の村。水村。
すゐくわ 西瓜【名】西瓜の肉の如きまぶた。(美人の形容にいふ)。

すゐくわ 水化石灰【名】「化」せきま(硝石灰)に同じ。
すゐくわ 西瓜大根【名】「種」あざだ(こん)「蒴大根」に同じ。「同じ」。

すゐくわ 水月【名】「佛」水中の月に「すゐくわ」のたねはへ「西瓜」種【名】「動」蠅の一種。大なる褐色複眼を有し、脚は長くして、長き粗毛密生す。その幼蟲即ち蛆は、西瓜などの發芽せんとする時、その幼根莖を腐蝕せしむ。

すゐくわ 水火風災【名】「佛」さん(三災)に同じ。水災成(すゐ)住(さん)空(くう)の四劫を經るほどは、これを一つの火劫とは申すなり。…かくの如くして、水火風災などあるべし」。

すゐくわ 水化物【名】「化」英(英)「hydrate」水と化合し、又は結合して成れる化合物。例へば生石灰(すゐ)に水の化合して成る硝石灰を、水化石灰ともいふ類。又結

くわ

晶水を有する化合物をいふ。「る船」。
すゐくわ 西瓜船【名】西瓜を積みた西瓜船の附いた様(よう)【句】僧侶の數多く集れる譬。

すゐくわ 水患【名】すゐ(水害)に同じ。
すゐくわ 翠髪【名】「翠色を帯びたる黒髪。美人の髪形容。翠髪。綠髪。高山の翠色なる譬」。

すゐくわ 吹管【名】笛を吹くこと。吹笛。吹竹。【英】Blowpipe「瓦斯アルコール石油等の煙を吹き、強熱の小火を作り、金石などを溶解せしめて、化學上又は鑛物學上の試験をなすための管。長さ八寸ばかりにて、その一端は漏斗状をなして廣く、他の一端には直角に出でたる白金製の細管ありて、細孔を穿ち、細孔を有する方を煙の外端に挿入し、他の一端の漏斗状をなせる方に口をあてて氣息を送れば、煙の當る處は酸化作用をおこし、内端に挿入して吹けば、還元作用をなす」。

すゐくわ 水管【名】水の通ふくだ。かけひ。【動】英(英)「phon」軟體動物の器官の一。外套膜の一部よりなり、體外の水を外套腔中に導き、以て呼吸するもの。常に入水管出水管の二管を有し、動物液中に長時間浸入する時、この二管にて水を出す。

すゐくわ 水管系【名】「動」英(英)「hydraulic system」棘皮動物の特有器官。薄膜より成り、海水を満たせる管系統にして、主として運動を掌る。起始部は數多の細孔ある石灰板に於て、穿孔體といひ、末端に歩足あり。歩足系。ほそく(歩足)参照。

すゐくわ 水管繫井機【名】鑿井機(くわ)の一種。鐵管の末端に鉋先を附著し、衝撃動或は回転動を與へて、管内に水を送れば、生出る岩層は洗ひ落され、管外に水と共に昇騰するやうに裝置せるもの。

すゐくわ 隨順寺【名】播磨國飾磨郡水戸(すゐ)村増位山(すゐ)の中腹に在る天台宗の寺。もとは法相宗。本尊は藥師佛。聖德太子の開基、行基の建立。

すゐくわ 水管式汽罐【名】「くわ」水と月と。【水】に方接近して、互に睨みあふもの。【國】明治維新の前まで、東京京橋區木挽町(すゐ)にありし有名な料理屋。

すゐくわ 鏡花【名】「鏡花水月」に同じ。水月。鏡花【句】「鏡花水月」に同じ。すゐくわ 水月【名】「鏡花水月」に同じ。すゐくわ 水月【名】「鏡花水月」に同じ。すゐくわ 水月【名】「鏡花水月」に同じ。

すゐくわ 水月【名】「鏡花水月」に同じ。すゐくわ 水月【名】「鏡花水月」に同じ。すゐくわ 水月【名】「鏡花水月」に同じ。すゐくわ 水月【名】「鏡花水月」に同じ。

すゐくわ 水月【名】「鏡花水月」に同じ。すゐくわ 水月【名】「鏡花水月」に同じ。すゐくわ 水月【名】「鏡花水月」に同じ。すゐくわ 水月【名】「鏡花水月」に同じ。

くわ

【名】「英 Water-tube boiler」上下もしくは左右の圓筒を多數の水管に依りて連結せしめて、水管内に水を充し、管外に熱をあてて、蒸氣を發生せしむるやうにせる汽罐。蒸氣の發生迅速にして、高壓を生ずるため、近時工業上に盛んに使用せらる。

すゐくわ 吹管分析術【名】「くわ」吹管分析術。吹管分析法。【英】Blowpipe analysis「吹管によりて吹送せらるる煙を利用して、鑛物の成分を知る法。吹管分析術。乾法」。

すゐくわ 水邊【名】水邊のほとり。すゐくわ 水刑【名】みづめ(水責)に同じ。すゐくわ 水經【名】「書」支那の河川に關して詳記せる書。晉の郭璞が著なりといへども確かならず。

すゐくわ 翠鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。

すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。

すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。

すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。

すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。

すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。

すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。

すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。すゐくわ 垂鬚【名】「髪」に塗るるねま。

くわ

すゐくわ 垂圈【名】「天」英(英)「Vertical circle」天頂と天底とを通過する天球上の大圓、即ち觀測者の居る場所の垂線を含む平面が天球と交はりて成す大圓。天頂と天底とは、直徑の兩端なれば、從つて垂圈は無數に存するなり。鉛直圈。高度圈。垂直圈。

すゐくわ 水源【名】水の流れ出づるもと。水源涵養(すゐ)【句】水源を涵養せしめざらんために、水流の源なる森林の濫伐を禁じ、殖林をなし、洪水濁水の憂なからしむること。

すゐくわ 水源【名】「地」朝鮮京畿道の首都。京城の南約十里。京釜鐵道線の一驛。市況殷賑なり。城郭は、李王朝の正祖二十年に建設したるもの。樓門、砲臺など完備せり。

すゐくわ 瑞軒【名】「人」かはむすゐけん(河村瑞軒)を見よ。すゐくわ 瑞顯【名】「地」英(英)「regional」海洋の狀態現象などを研究する學問。水界地理學。

すゐくわ かんやうりん 水源涵養林【名】地中に雨水を吸收せしめ、且その蒸散を防ぎ、水源の涵養に効あらしむる目的にて經營する森林。

すゐくわ しめいせう 水源紫明抄【名】「書」源氏物語の字句を略解したるもの。二卷。藤原親行の著。

すゐくわ 水源地【名】水源のある處。大事の太夫様に、鹽の辛い梅干婆がするこな奴と思召す、お恥しやといひければ」。

すゐくわ 出舉【名】古、財物又は稻粟を貸出して、利子を取上げしこと。公私の二種あり。その利子の割合しはは變りたれど、養老中の制には、財物を貸すには、公私ともに、多年を経ても、その利一倍に過ぎるを得ず、また稻粟の場合には、私民の貸したるは一倍に止まり、官よりは半倍に過ぎるを得ずとあり。

すゐくわ 遼古【名】遼は遼の意。【おほむ

かし。往古。上古。■築山庭園などの青苔に覆はれ、静かにして奥ゆかしきこと。
するこ 推古【名】むかしの事蹟を推究すること。

するこ 垂語【名】(佛)垂示の語。禪門の宗匠の上堂して、學人を提撕(ていし)すること。垂示。垂戒。

するこ 醉語【名】酒に酔ひていふ語。醉中。
するこ 水攻【名】みづめ(水攻)に同じ。

するこ 水孔【名】(植)『英』Water-pore。葉縁葉尖などに存して、内部より水液を排出する小孔。氣孔よりはや大にして、その孔邊細胞は、氣孔の異なりて、伸縮の機能なく、孔内に排水組織ありて、維管束の末端に連なる。金蓮花(きんれん)・稻竹(いんちく)・枯(かわ)等の葉にあり。

するこ 遂講【名】(佛)天台の三會(さんかい)の講師を勤めをはること。僧綱に任ぜらるる例なり。

するこ 推孔【名】(動)つゝ(推)に同じ。
するこ 隋侯珠【名】支那春秋時代に、隋國(今の湖北省德安府に封ぜられた大名。隋侯の珠(し)淮南子の覽冥訓篇に「隋侯之珠、和氏之璧、得之者富、失之者貧」とあり。隋侯、姓は祝、字は元暢、大蛇の傷けるを救ひしに、後その蛇の含み來りて報恩のために呈したりと言傳ふる純白の大珠。世に下和(か)の璧と並べ稱す。隋珠。

するこ 醉公子【名】しゅじ(酒公子)に同じ。

するこ 粹倒【名】相手を粹人としておだて上げて、おのれのためを圖ること。一代(ひと)みづからここに勤めて、過ぎにし上手を出して、粹(し)かし(人)の氣を取りけれど、脇顔の小皺見出され。

するこ 水國【名】沼池・河流などの多き土地。水郷。澤國。

するこ 推殺【名】『その人のために、車の殺(ころ)人を推すの意にて、謙遜していふ語』人を薦めて役に就かしめ、又はその事業を助成すること。

するこ 水獄【名】みづら(水牢)に同じ。

するこ 出舉倉【名】出舉稻を入るる倉。古語。
するこ 推古時代【名】あすかじだい(飛鳥時代)を見よ。

するこ 出舉錢【名】王朝時代に、官より錢を私人に貸して、利息を取りしこと。
するこ 出舉稻【名】王朝時代に、官より私人に稻を貸して、利稻を取りしこと。稱稻。舉稅。

するこ 出舉帳【名】出舉せし官稻の明細書の帳簿。
するこ 推骨【名】(動)つゝ(推骨)の

するこ 水滸傳【名】(書)支那元代の小説。宋末に成りし宣和遺事といふ書に基き、宋の徽宗の世に起りし群盜の事蹟、宋江以下三十六人の豪傑をその首魁として描寫せるもの。趣向・文章共に雄渾壯絶、支那小説中の四大奇書と稱せらる。作者は羅貫中とも施耐庵とも稱せられ、明かならず。全篇百八十四回より成れど、清の金聖嘆批評の七十回本最も多く行はる。

するこ 推古天皇【名】(人)第三十三代の天皇。御名は額田部(ぬかたべ)皇女、また豐御食炊屋(とよみけくひや)姫。欽明天皇の皇女。御母は蘇我稻目の女、堅鹽媛(かたしほひめ)皇太后。敏達天皇の皇后。在位三十六年(紀元一二五三年—一二八八年)。即位の三十六年崩す。壽七十五。

するこ 遂業【名】(佛)さうご(得業)に同じ。

するこ 出舉米【名】王朝時代に、官より私人に米を貸して、利米を取りしこと。

するこ 水根【名】(植)『英』Water root。水中に沈存する簡單なる根。常に根毛を缺き、先端には根叢と稱するものありて、根冠の代用をなす。山椒藻(やまからひ)・萍(ひら)等の根の類。

するこ 醉胡樂【名】こんじゅ(胡飲酒)の約。古語。其あてなるもの、するさうの約。古語。其あてなるもの、するさうの約。

するこ 水砂【名】(鐵)硫化鐵の一種。性質酸化し易し。

するこ 水塞【名】水邊にある城。
するこ 水災【名】すゐがひ(水害)に同じ。

するこ 水彩【名】水の放つ光彩。水のひかり。水光。■すゐざい(水彩畫)の略。

するこ 水際【名】みづぎは。みぎは。
するこ 水犀【名】犀の一種。昔支那にて、その皮を以て甲を造りきといふ。

するこ 水犀軍【名】すゐじん(水軍)に同じ。

するこ 水彩畫【名】『英』Water-color。西洋畫の一種。水にて溶き得る繪具にてゐるがきし畫。みづゑ(油繪に對して)。

するこ 水彩繪具【名】『英』Water-color。水彩畫に用ふる繪具。種類甚だ多し。みずゑのく。

するこ 水草【名】水と草と。■みつゝ(水草)に同じ。

するこ 水草を逐ふ【名】『史記の匈奴傳に「逐水草を逐ふ」とあり。一定の住居なき野蠻人などが、意のままに、水草のある處を尋ねつゝ移り住む。

するこ 水葬【名】死骸を水の中に葬むること。四葬の一。

するこ 水槽【名】みづおね(水槽)に同じ。

するこ 水藻【名】(植)かはも(川藻)に同じ。

するこ 水船【名】『英』Water-tank。飲料水又は汽罐用水若しくは荷足用として、臨時に海水等を容るべき船底内の區調。船首水艀船尾水艀深水艀等の別あり。

するこ 水想【名】(佛)するさう(水想觀)の略。

するこ 水晶【名】(鐵)すゐじやう(水晶)の約。古語。其あてなるもの、するさうの約。古語。其あてなるもの、するさうの約。

するこ 衰相【名】衰へたるすがた。
するこ 膀胱【名】(醫)『膀胱は和字、膀胱の大きな義』胃の後下部にありて、膀胱液を分泌する消化腺。柔軟白茶色にして、細長

するこ 瑞相【名】めてたき事(瑞相)の略。吉兆。瑞驗。十調(じゅうてう)さまさまの瑞相見るに、在(あ)る世の說法の砌に望めるがごとし。

するこ 瑞相【名】めてたき事(瑞相)の略。吉兆。瑞驗。十調(じゅうてう)さまさまの瑞相見るに、在(あ)る世の說法の砌に望めるがごとし。

するこ 瑞相【名】めてたき事(瑞相)の略。吉兆。瑞驗。十調(じゅうてう)さまさまの瑞相見るに、在(あ)る世の說法の砌に望めるがごとし。

するこ 瑞相【名】めてたき事(瑞相)の略。吉兆。瑞驗。十調(じゅうてう)さまさまの瑞相見るに、在(あ)る世の說法の砌に望めるがごとし。

するこ 瑞相【名】めてたき事(瑞相)の略。吉兆。瑞驗。十調(じゅうてう)さまさまの瑞相見るに、在(あ)る世の說法の砌に望めるがごとし。

するこ 瑞相【名】めてたき事(瑞相)の略。吉兆。瑞驗。十調(じゅうてう)さまさまの瑞相見るに、在(あ)る世の說法の砌に望めるがごとし。

するこ 瑞相【名】めてたき事(瑞相)の略。吉兆。瑞驗。十調(じゅうてう)さまさまの瑞相見るに、在(あ)る世の說法の砌に望めるがごとし。

するこ 瑞相【名】めてたき事(瑞相)の略。吉兆。瑞驗。十調(じゅうてう)さまさまの瑞相見るに、在(あ)る世の說法の砌に望めるがごとし。

するこ 瑞相【名】めてたき事(瑞相)の略。吉兆。瑞驗。十調(じゅうてう)さまさまの瑞相見るに、在(あ)る世の說法の砌に望めるがごとし。

すゐん

すゐん

すゐん

すゐん

すること。③推しきはめて、考へはか
ること。 水山【名】さんすゐ(山水)に同じ。
至言餅酒「酒に十徳あり、旅行に慈悲あり、
寒氣に衣あり、水山に便あり」

すゐん 水産【名】河海湖沼等の中に生
息し、又は存在すること、又その物。

すゐん 炊爨【名】飯を炊ぐこと。にた
き、さんすゐ。

すゐん 衰散【名】衰へ散ること。衰へ
てまよりのつかぬこと。

すゐん 衰殘【名】『殘はそこなはるる
義』衰ふること。弱りはつること。

すゐん 水産講習所【名】
農商務省の管轄に屬して、水産の傳習及び
試験に關する事務を掌る所。本科、遠洋漁
業科、研究科、現業科に分れ、所長教授技
手助教の職員を置く。

すゐん 水産學【名】水産物の形質、
及びその繁殖、收穫、貯藏製造の方法また
改良に關する事を研究する學問。

すゐん 水産學校【名】實業學
校中の農業學校の一種。水産に従事せんと
する者を教育する所。漁撈科、製造科、養
殖科に分れ、修業年限は、土地の情況に依
りて伸縮するを得。

すゐん 水産學士【名】農科大學
水産科を卒業せし者の稱號。今は一般に
農學士と稱す。

すゐん 水酸基【名】〔化〕『英Hydro-
xyl radical』水素、酸素各一原子量よりな
る基。水酸根。すゐんくわぶつ(水酸化
物)参照。

すゐん 水産技師【名】水産に關す
ることを掌る技師。

すゐん 水産局【名】農商務省の
一局。水産に關する事務を司る所。

すゐん 水産組合【名】漁業者
又は水産動物物を製造又は販賣する者に
よりて設置せらるる公益法人。水産業の
改良、發達及び水産動物物の蕃殖保護、そ
の他、水産業に關しての共同の利益を圖る
を目的とす。

すゐん 水酸化亜鉛【名】
〔化〕『英Zinc hydroxide』水酸化物の一。
亞鉛鹽の溶液に少量の苛性加里又はアン
モニアを加ふれば、白色の膠狀となりて
生ずるもの。熱すれば水を失ひて、酸化亞
鉛となる。

すゐん 水酸化安母
紐護【名】〔化〕『英Ammonium hydroxide』
安母紐にやする(安母紐亞水)に同じ。

すゐん 水酸化安母尼
亞【名】〔化〕前條に同じ。

すゐん 水酸化亞爾加里
〔名〕〔化〕かぜうあるかり 苛性亞爾加里に
同じ。

すゐん 水酸化安爾
密紐護【名】〔化〕『英Aluminium hydroxide』
水酸化物の一。アルミニウム鹽の溶
液にアンモニア水或は他の鹽基を加ふれ
ば、半透明の白色をなして、膠狀に沈澱す
るもの。染工術に、媒染劑として用ふ。

すゐん 水酸化カドミ
ウム【名】〔化〕『英Cadmium hydroxide』
水酸化物の一。カドミウム鹽の水溶液に、
水酸化アルカリを加ふれば、白色をなして
沈澱するもの。

すゐん 水酸化加留
〔名〕〔化〕『英Kaliun hydroxide』水酸化物
の一。炭酸カリウムの稀薄なる熱溶液に
消石灰を加へ、又は鹽化カリウムの水溶液
を電解して製す。最も強きアルカリの一。
性狀、用途等、水酸化ナトリウムと殆ど同
様なり。苛性加里。水酸化ばたしうむ。

すゐん 水酸化加留
〔名〕〔化〕『英Calcium hydroxide』せう
せきくわく(石灰)に同じ。

すゐん 水酸化ソヂウム
〔名〕〔化〕『英Sodium hydroxide』すゐん
くわぶつ(水酸化物)に同じ。

すゐん 水酸化第一鐵
〔名〕〔化〕『英Feros hydroxide』水酸化物
の一。第一鐵鹽の溶液にアルカリを加ふ
る時、生ずる白色の沈澱物。綠色を帯びた
は、水酸化第二鐵を混ぜるなり。空氣中に
放置すれば、赤褐色の第二鐵に酸化す。

すゐん 水酸化第二鐵
〔名〕〔化〕『英Nickelous hydroxide』水酸化物
の一。ニッケル鹽の水溶
液にアルカリを加ふれば、生ずる淡綠色の
沈澱物。

すゐん 水酸化第一鐵
〔名〕〔化〕『英Mangano hydroxide』水酸化物
の一。第一鐵鹽の溶液に
アルカリを加ふれば生ずる淡紅色の沈澱
物。空氣中に放置すれば、速に褐色なる水
酸化第二鐵に酸化す。

すゐん 水酸化第二鐵
〔名〕〔化〕『英Feros hydroxide』水酸化物の一。
第二鐵鹽の溶液に、アンモニアを加ふれば
生ずる褐色の沈澱物。きはめて弱き鹽基に
して、殆ど水に溶解せず。苛性アルカリ及
びアンモニアに溶解せざれども、酸類に
は溶く。各地の土壤中に含まれ、黃土の如
きは、不純にして、水分多きものなり。

すゐん 水酸化第二銅
〔名〕〔化〕『英Cuprie hydroxide』水酸化物
の一。第二銅鹽の溶液に、アンモニア水又
は水酸化アルカリを加ふれば析出する淡
青色の沈澱物。その溶液はセルロオズを溶
解する性あり。

すゐん 水酸化那篤
〔名〕〔化〕『英Kaliun hydroxide』水酸化物
の一。炭酸曹達を溶し、石灰乳を加へ
て煮、又は食鹽の水溶液に電解法を施しな
どして得る、無定形の白色塊。きはめて稀
薄なる溶液にてもアルカリ性反應を呈し、
舌ざはり苛烈なり。性狀、水酸化カリウム
に酷似して、しかも廉價なるため、用途廣
く、殊に石鹼の製造上に多く用ひらる。苛
性曹達。水酸化そぢうむ。苛性なとん。

すゐん 水酸化母留
〔名〕〔化〕『英Barium hydroxide』水酸化物
の一。酸化バリウムを水蒸氣にて分解し、

又は酸化銅と煮て、沈澱を去りて得る半透
明なる柱狀、又は葉狀の結晶物。強きアル
カリの一にて、酸の定量分析等に用ふ。も
と砂糖の精製にも使用せられたれども、有
毒なるが故に水酸化ストロンチウムを以
て代用す。その水溶液は重土水と稱す。

すゐん 水酸化物【名】〔化〕
『英Hydroxides』水酸基を有する化合物。即
ち水酸化カルシウム、水酸化カリウム等。

すゐん 水酸化鉀
〔名〕〔化〕『英Potassium hydroxide』すゐん
くわぶつ(水酸化物)に同じ。

すゐん 水酸化麻屈
尼復護【名】〔化〕『英Magnesium hydroxide』
水酸化物の一。マグネシウム鹽の溶
液に水酸化アルカリを加ふれば生ずる白
色粉末狀の沈澱物。天然には含水苦土鐵
となりて、少量に存在す。熱すれば、酸化マ
グネシウムとなる。

すゐん 水産業【名】水産物の漁撈、
養殖製造等に關する事業。

すゐん 水酸根【名】〔化〕すゐん
(水酸基)に同じ。

すゐん 水産試験場【名】
府縣郡市町村の費用、又はその補助に
よりて設立せられ、管内の水産業の改良、
發達を圖る目的にて、水産の漁撈、養殖製
造等に關する試験をなす所。

すゐん 北海道地方稅
の一。水産物の採取、製造及び水産物の採
取に關する漁業權を享有するものに課す
る稅。

すゐん 水産稅區【名】北海道廳
官が水産稅賦課の便宜上設けたる區。そ
の區内における課稅上の細目を議決せし
むるために、北海道長官の定めたる選舉規
則によりて選舉せられたる、名譽職議員を
以て組織する水産區會を設置す。

すゐん 水産肥料【名】水産物
を原料として製造したる肥料。即ち干
鰯、鰯、その他、魚骨、鰭等、に化合的方
法を加へしもの、藻、萍などより製せしもの
等あり。

するさんぶつ 水産物【名】河海湖沼等の中に産する物、即ち魚貝海藻などの類。
するさんもの 推参者【名】推参する人。てすさものを。青野都々、又妨る推参者。てすさものを。翠簪翁【名】(人)はなぶさいてふ(英)一蝶に同じ。

するし 衰死【名】衰弱して死ぬること。【し】しほみかかること。

するし 垂枝【名】枝を垂るること、又その垂れたる枝。しだけ。

するし 垂死【名】死に垂(なり)とする義。殆ど死なんとする容態。瀕死。

するし 垂示【名】語を垂れて、衆に示すこと。垂語。

するし 垂翅【名】鳥の翅を垂れて飛ぶことと能はざるに譬へたる語。後漢書馮異傳に見ゆ。失意の境遇の形容。

するし 錘子【名】すぢゅう(錘重)に同じ。【すぢゅう】錘重を吊し懸ける絲。

するし 推懸【名】支那料理にて、晒したる魚翅。沙刺片。

するし 水死【名】水に溺れて死ぬること。

するし 水師【名】すんぐん(水軍)に同じ。

するし 水芝【名】蓮の實。【同じ】。

するし 水司【名】もひりのつかさ水司に同じ。

するし 水蠅【名】(動)『英 Polyp』腔腸(動物)の一種の體形。體は圓筒状。その一端に口を有し、口縁に觸手を輪生し、他の一端によりて、他物に附着するものと、然らざるものとあり。【兵】。

するし 出師【名】軍隊をくり出すこと。出

するし 粹士【名】すんじん(粹人)に同じ。

するし 逢事【名】成し遂げられたる事柄。

するし 炊事【名】飯を炊くこと。にたきすること。

するし 推辭【名】強ひていなむこと。固辭すること。

するし 瑞芝【名】めでたき芝草。靈芝。

するし 隨使【名】王朝時代に、外國使臣の入朝の際記録及び公文の事を掌りし役。するし 隨侍【名】側を離れずしたがふこと。とも。

するし 隨時【副】時に従ひて。何時にても。いつても。
するし 隨身【名】すんじん(隨身)の略。【古語】大體うまやの馬にすんじん乗せて。【すんじん】翠袖【名】翠色の衣の袖。
するし じゅうき 錐採機【名】とりんぐまじんに同じ。

するし じがかり 炊事掛【名】炊事を司るもの。【すんじん】水字貝【名】(動)腹足類に属する貝。熱帯地方の海に産す。介殻は大いに厚く、美しく、や卵形をなし、殻口狭く延長し、成長せるものは、外唇甚しく展腹して、六本の指狀突起を有し、水の字の形をなす。

するし じや 炊事車【名】炊事の設備を有して、軍用に供する車輛。我が國にては使用せず。

するし じゆんび 出師準備【名】(兵)出師の準備。兵を出す用意。軍國が戦争のために、その兵軍を動かして、作戰の準備を整ふること。

するし じゆんびひん 出師準備品【名】(兵)出師準備に必要な品、即ち兵器彈藥馬匹糧秣被服衛生材料大幕事務用品等の總稱。

するし じゆん 衰日【名】すんじに衰日に同じ。

するし じゆん 水日集【名】(書)後西院天皇の御集。二卷。一名、綠洞集。

するし じゆん 水師提督【名】支那清朝の武官。水師營の長官にて、當時、福建廣東兩江(江蘇安徽)の三水師提督あり。

するし じゆん 出師表【名】支那蜀漢の忠臣諸葛孔明が昭烈皇帝の歿後、後主劉禪に奉りし前後二回の上奏文。

するし じゆん 出師表を讀んで泣かざる者は忠臣に非ず【句】安子順の出師表を批評していへる語。

するし じゆん 炊事場【名】炊事を行ふ場所。

するし じゆん じがかり 隨時拂公債【名】(經)有期確定公債の一。一定の期限に達するまでの間、隨時に償還し得る公債。

するし じゆん じがかり じやうきやうきは 隨時不定額償却法【名】(經)價格償却法

の。會計上の都合により、その償却額の一定せざるもの。
するし じん 推進【名】おしすすむること。
するし じん 水心【名】水面の中央。
するし じん 遠深【名】しんする深遠に同じ。
するし じん 垂心【名】(數)『英 Orthocentre』三角形の各頂点より、その對邊へ引ける三つの垂線の交点。

するし じん 醉人【名】すかか(醉客)に同じ。

するし じん 粹人【名】(風雅を好む人。粹士。人)情に通じたる人。さばけたる人。粹意氣なる人。通人。粹士。【好色にて、遊蕩などの心得ある人。粹士】。

するし じん 炊人【名】炊事をなす人。【は】。

するし じん 水滸【名】水のほとり。みづぎ

するし じん 水神【名】水を守りたまふといふ神。水伯。

するし じん 隨身【名】つきしたがつこと。家來となること。【天條に同じ】。

するし じん 隨身【名】目上の者に附従ひて行くこと、又その人。とも。平道頼朝卿關ヶ原にて囚はれ給ひし時、隨身せられたりしかば。【古】一定の身分ある者の外出の時の護衛として、朝廷より賜ひし近衛府の武人。弓胡録(弓)を讀み、劍を佩びて隨へり。その人数は、上皇は十四人、攝政關白は十人、大臣大將は八人、納言參議は六人、中將は四人、少將は二人、衛門兵衛の督(す)は四人、兵衛の佐(さ)は二人の定なりき。【さるじん(小隨身)ひやうちやう(兵仗)參照。盛衰型前驅隨身こととに引續はせて】。隨身門の左右に安置せる二神の像(古語)「源氏」わづらはしきするじんはいなとて、かへしたまふ。【隨身に携へ持つこと。舊語】もし筆や隨身したるを御尋ありける。【し】。

するし じん 隨身【句】はんちやう(番長)に同上。隨身【句】こん安近衛(衛)に同じ。

するし じん 隨身【名】つばややく(臺胡録)の俗稱。

するし じん 推進器【名】『英 Propeller』或種の原動機により急速に回轉して、水又は空氣を掻分け、船舶、飛行器等を推進むる

作用をなすもの。もと水掻車(かき)噴水推進器等も用ひられたれど、現代は螺旋推進器の screw propeller 推進螺旋又は略してスクロウのみ呼び、軸の一方の端に近き部分に二箇以上の振(ふ)れたる翅(は)を軸と直角に取附け、回轉する毎に、水又は空氣を後方に推進すること、恰も雄螺旋(おとこ)又は機體を前進せしむ。單に推進器といへば、この物の意味に用ひらるるに至れり。又、船舶にありては、水面下に沈設せらるるが故に、暗車(くらぐるま)の稱あり。

するし じん 燧人氏【名】支那太古の君主。三星の一。始めて燧を鑽(く)りて、火を作

するし じん 隨身所【名】院司及び攝關家にて、隨身の伺候せし所。

するし じん のて 水神手【名】(植)かなむぐら(金華)に同じ。

するし じん のり 水神森【名】(地)東京南葛飾郡寺島村にありて、江戸時代に、月雪などの名所たり。隅田川に臨む。

するし じん ばんちやう 隨身番長【名】ばんちやう(番長)に同じ。

するし じん もん 隨身門【名】神社の中門。左右に兵仗を帶したる隨身の像を置く。俗にその像の右なるを、「やだいじん」といひ、左なるを、「さだいじん」といふ。

するし じん らせん 推進螺旋【名】すんじんき(推進器)を見よ。

するし じん らん 隨心院【名】山城國宇治郡山科(山科)村小野にある寺。眞言宗小野派の大本山。寛仁二年仁海僧正の創立。攝家門跡の一たり。

するし じん らん もん 隨心院門跡【名】前條を見よ。

するし じん らん りう 隨心院流【名】(佛)古義眞言宗小野流六派の一。【同じ】。

するし じん 出車【名】いだしぐる(出車)に

するし じん 水漏【名】水をそそぐが如く、はげしく下刺すること。

するし じん 水車【名】みづぐるま(水車)に

するし じん 水車【名】みづぐるま(水車)に

するし じん 水車【名】みづぐるま(水車)に

するし じん 水車【名】みづぐるま(水車)に

するし じん 水車【名】みづぐるま(水車)に

するし じん 水車【名】みづぐるま(水車)に

するし じん 水車【名】みづぐるま(水車)に

すゐしや

すゐしや 水樹【名】「樹はうてな義」水邊に建てたるうてな。水亭。

すゐしや 粹者【名】すゐじん(粹人)に同じ。

すゐしや 翠裳【名】翠色の衣裳。「翠」。

すゐしや 推尚【名】おし尊ぶこと。推すゐしやう 推奨【名】「推し奨(ひ)むる義」ほめて引立つること。推薦。

すゐしや 垂裳【名】「衣裳を垂る義。易經の繫辭に「黃帝堯舜垂衣裳而天下治」とありすゐしやう(垂拱)に同じ。

すゐしや 水漿【名】水と濃水(の)とのみもの。

すゐしや 水晶・水精【名】「礦」石炭の一種。六方錐又は六方柱の結晶をなし、最も純粹なるものは、無色透明にして水の如く、堅くして玻璃様の光澤あり。琢きて眼鏡・数珠・印材その他種種の飾として珍重す。これを白水晶といふ。滿庵(みんあん)を含みて紫色なるを、紫水晶といひ、酸化鐵を含みて色黒きを、烟水晶といひ、黒水晶といひ、紅色なるを紅水晶といひ、緑色の草の如きものを含めたるを、草入水晶といふ。更科「たぎりに流れゆく水、すゐしやうを散らすやうに湧きかへるなど」

水晶は塵を受けず【句】清康潔白の士の不義を惡むに譬ふ。(諺語)

すゐしや 水生【句】次條を見よ。

水生の印【句】「佛」すゐしやういん(水生印)に同じ。著墨水を、なほ欲しきかと問はせたまへばすべて飽く時なく候ふと申しければ水生の印を結ばせたまひて、御指を一口にさし當てさせたまへば」

すゐしや 水上【名】「水の上へ。水のおも。【すゐへん水邊】に同じ。【すゐじやうけいさつ】(水上警察)の略。(俚語)「水上が更(へ)つて来る」

すゐしや 推讓【名】人を推しあげて、己下身をへりくだること。謙讓。正統紀「天下を治めたまふこと三年、推讓の事あり、尊號例のごとし」

すゐしや 穗狀【名】稻粟などの穂のご

すゐしや

すゐしや 隨室【名】しやうのふえ(室宿)に同じ。

すゐしや 瑞祥【名】しやうす(祥瑞)にすゐしやう 隨性【名】生れつきてよりの定りたる運命。

すゐしや いん 水生印【名】「佛」思ふがままに水の生ずといふ印の結び法。

すゐしや うがづら 水晶葛【名】「植」美男鬚(びんす)の一種。實の白きもの。

すゐしや うぐんたう 水晶群島【名】「地」北海道根室國の東南端花咲半島より約二里の海上にある群島。水晶志勃(すいしゅう)多樂(たらく)三島よりなる。水晶島。

すゐしや うぐら 水晶鞍【名】紋に、水晶を入れたる鞍。

すゐしや うぐわ 水晶花【名】うのはな(卯花)の異稱。

すゐしや うぐわ 穗狀花【名】「植」次條にすゐしやうぐわじよ 穗狀花序【名】「植」無梗(むぎょう)し

くは極め短き花梗を有して、多数に著生し、下部の花より次第に開花して、上部に及ぶもの。穗狀花。

すゐしや うけいさつ 水上警察【名】「河海その他の水上に於ける警察。目的は一般行政警察に異ならず。(陸上警察に對して)【すゐじやうけいさつじよ】水上警察署」の略。

すゐしや うけいさつ 水上警察旗【名】水上警察に於ける巡廻用の汽船及び短艇に掲ぐる旗。

すゐしや うけいさつじよ 水上警察署【名】水上警察の事務を取扱ふ官署。水上警察。

すゐしや うけいさつじよ 水上警察禮式【名】水上警察の船舶が敬禮を要する乗船に進み、又はその人を望見したる時、これを送迎する禮式。

すゐしや とうかん 水精紅菱【名】「その凝りたるさま、水精に似たればいふ」著



(序花狀穗)

すゐしや

色したる葛切(かぢ)。すゐしや うぐら 水晶石榴【名】「植」石榴の一種。果實の白色なるもの。

すゐしや うじま 水晶島【名】「地」すゐしやうぐんたう(水晶群島)を見よ。

すゐしや うじゆんさんじよ 水上巡查屯所【名】すゐしやうけいさつじよ(水上警察署)の舊稱。

すゐしや うぐりやう 水上測量【名】河川及び港灣海洋等に關する測量。

すゐしや うたい 水晶體【名】「醫」「英」や「晶」眼珠の角膜の後方にありて、眼球腔を前後の二室に分つ、厚き基石形なる無色透明の固體。前室には水樣液充ち、後室には濃厚なる硝子樣液充ち、光線は角膜水樣液・水晶體・硝子樣液を順次に通過して、網膜に達するものにして、水晶體は、質緻密に、両面とも凸形をなし、レンズの如き作用をなし、且つその周圍にある細小筋肉の伸縮によりて、凸面の度を調節するを得。物體の遠近に係らず、その像を網膜上に映せしむ。

すゐしや ち 水晶地・水精地【名】鞍の前輪及び後輪(おし)に全部水晶を摺入れたるものといふ。

すゐしや ばん 水晶盤【名】「水晶にて造りたる盤。【すゐしやう】の異稱。

すゐしや ひかう 水上飛行【名】飛行機にて、水上の空中を飛行すること。

すゐしや ひかうき 水上飛行機【名】「英」Hydroaeroplane 又 Hydroplane 水上に發著し得る飛行機。ひかうき(飛行機)參照。

すゐしや じやう 水車運上【名】江戸時代に、水車に課せし運上。

すゐしや もち 水晶餅【名】すゐしやうす(水晶包子)に同じ。

すゐしや らん 水晶蘭【名】「植」鹿蹄草(かふし)科に屬する寄生植物。山地に自生す。高さ約五寸。莖も葉もすべて銀白色を呈し、葉は鱗片狀をなし、夏秋の候、莖頭にやううつむける白色の花を著く。いろいろいふ。いろいろいたけ。いろいろいばな。ぎんりやうさう。

すゐしや

すゐしや えい 垂射影【名】「數」せいじやえい(正射影)に同じ。「座」に同じ。

すゐしや きん 水車吟【名】「文」うんぎ運すゐしや 水尺【名】みづばかり。水準。

すゐしや 衰弱【名】衰へて弱くなること。疲弊。

すゐしや 垂迹【名】ほんぢすゐしや(本地垂迹)を見よ。正統紀(聖田)はもとの御名、八幡は垂迹の名なり」

垂迹の月【句】「佛」佛の垂迹は、衆生(しゆじやう)の迷の闇を照すものなるより、月に譬へていふ語。

垂迹の方便【句】「佛」佛の垂迹は、衆生(しゆじやう)の濟度(きだく)の方便に外ならざること。太平記(伊勢太神宮)垂迹の方便を開けば、假に三寶の名に似たりと雖も、内證(ないしやう)深心(しんしん)を思へば、それみなほ化俗(くわく)結縁(けつえん)の理ありと覺えて」

すゐしや ちや 水車小屋【名】水車を仕掛けてある小屋。

すゐしや しゆう 出車衆【名】繙神(しん)が他行する際に、その人より借受けたる車に乗りて、供養する人。

すゐしや ば 水車場【名】水車のある處。

すゐしや 水主【名】かこ。ふなこ。船頭。大船の悲しさは、水手・舵取(かじり)聞えても、更にその甲斐(かい)荒磯(あらいそ)の「百合若大臣(はるよわかみ)野蠻(やまんと)水主(みづぬ)取ともべに走り」

すゐしや 水腫【名】すゐしやう(水氣)に同じ。

すゐしや 垂珠【名】飾に耳に垂る珠。

すゐしや 隨珠【名】「隋侯の珠」に同じ。

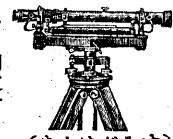
すゐしや 隨從【名】貴人のあとにつき従ふこと、又その人とも。扈從(こじやう)。隨行。

すゐしや 推恤【名】推察してあはれむこと。情實を察してあはれむこと。

すゐしや 垂準【名】さげすみ(下盤)に同じ。

すゐしや 水準【名】みづもり。みづなは。みづばかり。水平。水尺。【すゐじやうけいさつ】(水上警察)の略。

すゐしや 隨順【名】したがひてさからはぬこと。從順。



(きんゆじむす)

すゐじゆんき 水準器【名】(理)『英』leveling instrument 水準測量に使用する水準器の特稱。
すゐじゆんきへう 水準基標【名】すゐじゆんきへう(水準據標)に同じ。
すゐじゆんきめん 水準基面【名】『英』datum plane 又 datum 地物の高低を計算するがために選定したる水平面。多年観測の結果に成れる平均海面を用ふること多し。基準面。水準面。

すゐじゆんきへう 水準據標【名】『英』bench mark 水準測量にて、地點の高低を精密に測定算出せむがために、所所に設置せらる一定不變の高さを有する測標。頭部五十角以上、長さ四尺以上の石標を用ふること多く、或は大樹岩石等の高さに變化を生ぜざる一點を利用することあり。水準基標。水準標。
すゐじゆんせうじやう 水準照尺【名】『英』leveling rod 又 level 水準測量にて、水準器と共に使用せらるる尺度。乾燥せる輕き木材にて作り、矩形の面に作り、普通大巾・小三本より成り、自在に拔差(ひきだ)することを得、又順次に入子(いりこ)にして短縮することを得るやうに、必要に應じては總長十五尺までに伸ばすことを得ることじやく。

すゐじゆんせうじやう 水準測量【名】『英』leveling 器械を用ひて、水準基面より或一點までの高さ、又は二點間の高さの差を見出す方法。水準器を用ふると、三角法を應用し、垂直角の測定と二點間の既定距離とによりて行ふものと、氣壓計を用ひ、二點間の氣壓を計りて定むるものととの三

法あり。水準器に依るもの最も精密なりとす。氣壓計に依るものは、精密の度において劣れども、輕便且つ迅速に行ふを得る利益あり。高低測量。
すゐじゆんきへう 水準標【名】すゐじゆんきへう(水準據標)に同じ。
すゐじゆんきめん 水準面【名】すゐじゆんきへう(水準基面)に同じ。
すゐじゆんき 水處【名】水邊に住むこと。
すゐじゆんき 醉書【名】酒に酔ひながら文字を書くこと、又その文字。
すゐじゆんき 推叙【名】位を進むこと。位階を加ふること。
すゐじゆんき 隨所【名】隨所(隨所)に同じ。

隨所示現【句】(佛)佛または菩薩が到る所に緣を求めて、衆生(しゆじやう)の濟度のために化身(けしん)して現るること。太平記「隨所示現の聲、既にかなふ」。
隨所隨處【句】所在につれて生ずる感想。
すゐじゆんき 隋書【名】(書)二十四史の一。支那隋朝の歴史。唐の魏徵等の勅を奉じて編撰せるもの。帝紀五卷、列傳五十卷、外に梁陳齊周隋五代の間の禮儀音樂律曆天文五行食貨刑法百官地理經籍の十志三十卷附屬せり。
すゐじゆんき 水衝【名】水の烈しく衝突することじやく。みづつき。
すゐじゆんき 水腫【名】すゐじゆんき(水腫)に同じ。
すゐじゆんき 推稱【名】人を推しすすめてほむること。
すゐじゆんき 推頌【名】尊びて賞めあぐること。
すゐじゆんき 推鐘【名】ちじやう(推鐘)の誤。盛衰記、生源寺の推鐘控きて「に蒸發して、氣體となれるもの。雲霧霞雨雪などは、皆その凝りたるものなり」。

すゐじゆんき 衰色【名】おとろへたる色、又は姿。
すゐじゆんき 水色【名】水の色あひ。水の景色。水光。水彩。『みづいろ水色に同じ。』
すゐじゆんき 水蝕【名】(地)流水の岩石を侵蝕すること。

すゐじゆんき 水食【名】水を飲み、物を食ふこと。のみくひ。養蠶(かいこ)水しよくをとどめて、七十餘にして、往生を遂げられける」。
すゐじゆんき 翠色【名】みどりいろ。
すゐじゆんき 水蝕谷【名】(地)しんじやく(浸蝕谷)に同じ。
すゐじゆんき 水蝕山【名】(地)次條のすゐじゆんき(水蝕山嶽)に同じ。
すゐじゆんき 水蝕地【名】(地)しんじやく(浸蝕地)に同じ。
すゐじゆんき 水蝕作用【名】(地)しんじやく(浸蝕作用)に同じ。
すゐじゆんき 水蝕臺地【名】(地)しんじやく(浸蝕臺地)に同じ。
すゐじゆんき 推【名】(動)推量(推量)に同じ。

すゐじゆんき 瑞西【名】(佛)『名』(地)中部歐羅巴の一小國。二十二の聯邦より成れる立憲共和政體にして、北は獨逸、東は塊太利、南は伊太利、西は佛蘭西に接す。首府をベルン(Bern)といふ。するつる。するつあらんと。
すゐじゆんき 垂垂【名】たれさがるさま。
すゐじゆんき 惴惴【名】おち恐るさま。
すゐじゆんき 水制【名】(名)河川の流心を一定せしめんがために作る堤岸より河身に直角に、或は上流に向け、或は下流に向ひて突出せしむ。みづはね。
すゐじゆんき 醉醒【名】酔ふと醒むること。
すゐじゆんき 醉生【名】次條を見よ。
すゐじゆんき 醉生夢死【名】(句)徒らに生れて、徒らに死ぬること。つまらなく生涯を終ふること。

すゐじゆんき 綏靖【名】やすらかなること。
すゐじゆんき 衰世【名】衰へたる世。洩季の世。すゐのよ。
すゐじゆんき 衰勢【名】おとろへたる勢力。
すゐじゆんき 水勢【名】水の流るる勢。
すゐじゆんき 水聲【名】水の音。
すゐじゆんき 水棲【名】水中に棲むこと。
すゐじゆんき 水精【名】水の精。『水精』

の天文志に「夫日火之精也、月水之精也」とあり。『つき月』の異稱。
すゐじゆんき 水星【名】(天)太陽系に屬する惑星の一。軌道は黃道に對して七度〇分八秒の傾斜をなす。太陽よりの平均距離千五百萬里、容積は地球の二十分一、八十七日餘を以て公轉す。表面には稀薄なる空氣ありといふ。
水星經過【句】(天)『英』transit of mercury 水星が太陽地球と殆んど一直線に來る時、太陽面を横ぎりて見ゆるをいふ。軌道の關係上、五月八日頃及び十一月十日前後に現る。その週期は七年十三年四十六年等なり。
すゐじゆんき 慧星【名】(天)太陽の周圍に、細長き軌道をなして運行し、長き光尾を引く星。その形、彗(こ)の如くにして、核(かく)として、肉眼には最も輝きて見ゆる部分と、體蓋(たいがい)として、雲霧狀をなして、核を包圍し、その光の核に及ばざる部分と、尾(び)として、體蓋の連續して、太陽と反對の方向に延長する部分とに分つことを得、核と體蓋とを合はせて、頭ともいふ。尾は核を去るに従ひて、光ますます弱く、核の光強きものほど長し。軌道形の楕圓なるものは、周期的彗星と稱し、一定の周期を有して、太陽の周圍を運行すれども、拋物線形なるものは、一たび太陽に近づき、その遠さかるや、再び來ることなし。はうきぼし。

すゐじゆんき 瑞星【名】めてたき兆を示すといふ星。景星。
すゐじゆんき 瑞星【名】(名)「種」だこんさう(太根草)に同じ。
すゐじゆんき 水成岩【名】(地)『英』sedimentary rock 赤熱せる石炭或は燐炭に水蒸氣を通じて製する瓦斯。強熱を要し、光輝を要せる際の燃料として用ふ。主として、水素と酸化炭素とより成り、青色の焰を放ちて燃ゆ。みづがす。

すゐじゆんき 水成岩【名】(地)『英』sedimentary rock 風化又は水蝕せられて破壊したる地上の岩石の、水のために、河床又は湖海の底に運搬せられて、沈積凝固し、又は水中の融解物の沈澱固結して成れる

すゐせい

岩石。沈積物の變化に伴ひ、種種の物質の層層相重なるが故に、成層岩また層狀岩ともいふ。砂礫粘土、砂石礫岩、粘板岩、石灰岩、頁岩等、これに屬す。氣成岩、火成岩に對して「くわせき」化石「ちそう」(地層)参照。

すゐせい 水成岩。同一の原因によりて生成せし鐵床。即ちその實は、各種の水成岩中に鐵石の集合せる部分。

すゐせい 水西莊。『水西は鴨川の西の意』京都三木村に在りし頼山陽の家。叡山に對し、鴨川に臨み、庭中の一小草堂を山紫水明處といへり。

すゐせい 水生植物。『名』(植)「英」Hydrophytes。水中又は甚しく濕潤なる地に生ずる植物。浮葉植物、沈水植物、濕地植物、挺水植物等に分つ。水地植物。

すゐせい 綏靖天皇。『名』(人)「第」二代の天皇。御名は神降名川耳(かみかみ)尊。神武天皇第三の皇子。母は媛蹈鞬五十鈴媛(ひめふみ)命。在位三十三年(紀元八〇年—一二年)。即位の三十三歳。壽八十四。

すゐせい 水棲動物。『名』(動)「水」に棲む動物。

すゐせい 燧石。『名』(礦)「火」打ち石。すゐせき 水石。『名』(水)と石と。『中』にある石。

すゐせい 瑞雪。『名』「め」てたきしるしに降る雪。すゐせつ 推選。『名』「すゐ」(推移)に同じ。

すゐせい 推選。『名』「推」尊して選舉すること。すゐせい 推選。『名』「推」尊して選舉すること。すゐせい 推選。『名』「推」尊して選舉すること。

すゐせい 垂線。『名』「數」すゐせき(垂足)に同するせん 水線。『名』「英」Water-line。きゐせん(吃水線)に同じ。

すゐせん

て、その善惡を選擇すること。内容の充實せるものは沈み、然らざるものは浮ぶによりて、これを別つ。

すゐせん 水煎。『名』「草」根、木皮の藥物を水にて煮ること。

すゐせん 水織。『名』「すゐせんかん」(水織)に屬する多年草。球形の地下莖より、高さ尺餘の地上莖を出し、細長くして並行脈を有する、やや厚き葉叢生し、春の初、その間より、葱の如き花莖出で、その頂に白色六瓣にして花被を有し、黄色の蕊あり、香清き花を開く。觀賞用として栽培せられ、地下莖は有毒なれども、癰腫(むくも)を治すの効あり。せちゆうくわ。にはき。

すゐせん 推薦。『名』「すゐせん」(推舉)に同じ。

すゐせん 錐尖。『名』「錐」のさき。

すゐせん 翠扇。『名』「翠」色の團扇。

すゐせん 垂涎。『名』「よ」だれをたるること。垂涎三尺。『名』「前」條の意を強めてい

すゐせん 睥然。『名』「つ」やしたるさま。

すゐせん 雙子葉植物の木部(ろ)の、年輪を貫穿して、放射狀に、髓より皮層に達する細線。ぎんめ。射出髓。

すゐせん あやめ 水仙。『名』「植」「萬」尾(び)科に屬する多年生の草。原産地は亞非利加の喜望峯地方。葉は溪蓀(きそ)に似根は芋塊に似たり。春、莖を生じて、高さ二尺餘に達し、淡黄色つて、紫褐の條脈ある鐘狀の小花十餘つ、片側穗をなして開く。觀賞用として栽培せらる。

すゐせん 水仙。『名』「植」「梅」の一種。花は六出にして、圓瓣のもの、長瓣のもの、二種あり。

すゐせん

り酒につけて食へり。すゐせん。

すゐせん 隨川器。『名』「發明」者の名を以て呼ぶか。朴(く)の板にて、長さ一尺幅七寸の箱を造り、その中に溝を作り、一尺の矩(す)と線香とを入れ、その線香の燃ゆるに従ひ、同器中に備へたる磁石によりて、進行の方位の異なるごとに、何す燃えたるかを檢し、船路の遠近方位を知る器。

すゐせん 水前寺。『名』「肥」後國飽託(ひ)郡出水(みづ)村にありし寺。熊本市の南約一里。寛永九年細川忠利入國の際、豊後國羅漢寺の僧住宅の創建せしもの。忠利、後に寺をこの附近の地に移し、その跡を苑池となし、成趣園と呼び、俗には水前寺のお茶屋といふ。九州第一の公園たり。

すゐせん 瑞泉寺。『名』「京」都市下京區石屋町にある淨土宗の寺。關白秀次の冥福を祈るために、僧慶順の建立せしもの。

すゐせん 相模國鎌倉郡二階堂村にある臨濟宗の寺。關東十刹の一。錦屏山と號す。開山は疎石中興の開基は足利基氏。『尾』張國丹羽(ひ)郡大山町字内田にある禪宗妙心寺派の寺。應永二十二年の創建。僧宗舜の開基。

すゐせん 水前寺海苔。『名』「植」かはりの一種。肥後國熊本の水前寺村の川より産するもの。すゐせんじ。

すゐせん 推薦狀。『名』「人」を推薦する書狀。推薦書。

すゐせん 推薦書。『名』「前」條に同じ。

すゐせん 水織鍋。『名』「平」たくして、鉗あり、料理に用ふる鍋。

すゐせん 水仙翁。『名』「植」「すゐせん」(水仙翁)を見よ。

すゐせん 水仙鉢。『名』「水」仙を植うるための鉢。尤も草葉淺きものの品、袋の智恵、猪場の雄子の草がくれ、水仙鉢。すゐせん 水織巻。『名』「水」織葉にて巻きたる食品。

すゐ

古はたれ味噌の汁につけて食ひ、後にはい又白色にして、やや四形の花を有する花を開く。觀賞用に供せらる。すゐせんのう。

すゐ 捶楚。『名』「捶」は杖にて打つ義、楚はすえ(ちちやう)笞杖に同じ。

すゐ 水素。『名』「化」元素の一。極めて輕き氣體にて空氣より輕きこと凡そ十四倍半。無色、無味、無臭にして、常に酸素と化合して水となり、單獨にて存することなし。最も簡便なる製法は、亞鉛に稀硫酸を注ぐにあり。主として空中船用、また燃料もしくは還元劑に供す。

すゐ 吹奏。『名』「笛」簫喇叭などを吹くこと。『君が代を吹奏す』。

すゐ 垂足。『名』「數」『英』Foot of Pedicel。直線又は平面等に下したる垂線。垂線の足。

すゐ 水族。『名』「お」しはかること。推介水族の類。

すゐ 垂足曲線。『名』「數」『英』Pedal curve。一つの曲線上の各點に於ける切線へ、一定點より引ける垂線の足を連ねる曲線。

すゐ 垂足曲面。『名』「數」『英』Pedal surface。一つの曲面上の各點における切面へ、一定點より引ける垂線の足を連ねる曲面。

すゐ 水族館。『名』「水」族の水申における生活の狀態を側面より硝子をとほして見得るやうに設備したる建物。

すゐ 垂足三角形。『名』「數」『英』Pedal triangle。三角形の各頂點より、その對邊に下したる垂足を結びつけて得る三角形。

すゐ 推測式。『名』「哲」「すゐ」(推理)に同じ。

「以詐遇齊師之猶」以「錐刀之墮」太山也」とあり『微弱な力。錐刀の末』【句】『左傳の昭公六年の條に「錐刀之末、將盡爭之」とあり』次條

錢を出し入れすること、又は物品の支出と
收納と。すゐなふ。じゆつなふ(出納)参照。
ゐたふがかり 水納掛【名】金錢の出納

出納店にこれがある。

するたん 水丹【名】防水塗料の一種。船舶用材の隙間、木材の裂目等に充填塗抹す。石灰に桐油を混和したるもの。支那の

する。ちゆう 水頭〔名〕〔佛〕禪寺にて、大衆所用の水を日々に汲上げて、盥濯に供し、又湯を沸すことを掌る役僧。

天・四天王等、番番守護の靈石なり」

水天一色【名】次條に同じ。

水天一碧【句】空晴れて、水と空と一つ

づきになりて、青青と見ゆること。水

天一色。

水天駟【句】海上遠く水と空との見

わけの附かぬこと。

垂天【名】廣大にして、天の果ま

でも垂れたること。「垂天の雲」

垂点【名】「晉」英「Point」音符

の上に施す記號。圓點に比して、一層短速

に奏すべき意を示すに用ふ。

水殿【名】水のほとりにある殿。

水田【名】水の溜れる田。みづ

た。耕地の利用に、必ず水を溜めざるを

要する田。

水天供【名】「佛」水天を供養

する法。主として雨を祈るために用ふ。水

天法。

水天宮【名】筑後國久留

米の市瀬之下(約)町に鎮座せる縣社。祭

神は安徳天皇建禮門院(平時子)。建久年

中の創建。川守と稱する守札を發行し、懷

中すれば、水難を免ると稱す。「東京日

本橋區蠣殼町二丁目有馬邸内に鎮座

せる神社。久留米市にあるものの分社。祭

神は本社に同じ。

水天法【名】「佛」すてん

(水天供)に同じ。

水土【名】水と土と。

左傳

に「古者大事必乘其產」生其水土而和之

其人心とあるに本づく。土地。

垂度【名】「孟子」の梁惠王下篇に

「君子創業垂統爲可繼也」とあるに本

づく。事業を子孫に垂るること。

水頭【名】水のほとり。水邊。

「理」英「Head」降下し来る水の高處と

低所との鉛直距離。落差。

水竇【名】「竇は穴の義」水

はきの溝。水道。

水筒【名】水を容るる筒(つ)

「飲用水を盛りて携帯する瓶。金屬にて

作る。

水痘【名】「醫」小兒の全身に、

初は紅斑を生じ、やがて豆大の水泡に變じ

て發熱する傳染病。二三日の後、痂皮(かさ)を

結び、一二週間にして全治す。みづいも

假痘。風痘。

垂頭點【名】「美」南畫に

て、木の葉の描方の一。線の兩端下垂する

より名く。多く草畫に用ふ。

垂【名】「美」

南畫にて、木の

葉の描方の一。

その形藤花の垂れ

たるが如きより名く。

水燈會【名】山城國宇治なる

萬福寺の僧徒が、毎年七月十六日、宇治川

の船中にて修する、水中施食の法事。

水筒桶【名】よろろをけ(用

水桶)に同じ。因界物並横町の水桶桶

の上。

水德【名】五行中の水の德。

「すいとそま

まにその意をすいと」と國音相同じきよ

り、寺の名めかしとへる語。後の事なき

は稱はすに逃げいだすこと。しりくり觀

音。「俚語」すいとくじをきめこむ」

水團【名】饅頭粉を水にてこね、

一塊づつ、里芋ほどの大きにして、汁にて

煮たる食品。

水囊【名】「混水囊の略」馬の尾

又は針金にて張れる筒(つ)

「史記」の扁鵲傳に

「訣脈結筋擗三髓腦」とあり。髓と腦と。

「なみそ。腦漿。目きはめて肝要なる

部分。心髓。

錐囊【名】「囊中の錐」に同じ。

水囊投【名】水囊の中へ、錢

を投入する技。底の彈力のために、外へは

れ出しやし。本朝武藝。水囊投に猿猴の手

をのばし」

出納【名】すなたふ(出納)に同

するなふしよ。出納所【名】國衙の勘定を

掌る所。

水難【名】「すながい(水害)に同

じ。水に原因する諸語の災難。即ち溺

死難船、沈没漂流など。

水難救濟會

【名】海上の變災より生ずる人命財産

の危難を救助する目的にて設立したる

團體。

陰陽家にて、人の生年

月の干支によりて、萬事に忌み慎むべしと

いふ日、木性の人甲辰の日、火性の人丁未

の日、土性の人己丑の日、金性の人庚戌

の日、水性の人癸丑の日。德日。

左記關白殿、依爲御衰日(不御座)

「すにん推任【名】上たる人の恩召によ

りて官に任ぜらるること。

垂仁天皇【名】「人」第

十一代。天皇。御名は活目入彦五十狹茅

(ひこめい)命。崇神天皇第二の皇子。母は御間

城姫(みけひめ)命。在位九十九年。紀元六三二

年。一七三〇年。即位の九十九年崩す。壽

百四十一。一説に、百五十三。

緩急【名】めでたき年。

瑞年【名】うすき臘。みづうみ。

水波【名】「なみ(波)に同じ。

水と波とまたその關係。次條參照。天智

天皇佛神水波のしるしは、是れ此の池の

白浪」

宇宙間の事物

(萬法)はもと不二一如にして、所詮は

ただ眞如の一に歸するものなるに、世の

人これを悟らずして、差別の眼を懷くこ

と、恰も水と波とは同體のものなるが、

ただ水となり波となりて、形を種種に顯

すが如くなること。諸曲江流「神佛、水

波のへだてなれば、同一體の利益も、さ

まさる」

水巴【名】「うづまき(渦卷)に同じ。

水破【名】鷲の黒き羽にて短じた

る矢。盛衰。大黒の矢のおもてに、水

破兵破といふ箭矢二つ差し」

「青波。綠波。綠波。綠波。

水馬【名】水中にて馬を取する

こと。「江戸幕府の年中行事の一。毎年

六月、隅田川の水中に馬を練り、將軍の

臨檢ありしもの。うまわたし」

醉罵【名】酒に酔ひて人を罵ること。

衰敗【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

衰頹【名】衰へてくづること。

すなはち

する防禦警戒の組合。一般に消防組をしてこれに當らしむも、地方の状況によりて、別に組織せしむるを得。この場合には、消防組の規定を準用す。

するはうしん 水疱疹【名】「醫」身體の各部に水疱の發疹する病。水疱の大きき粟粒大より豌豆乃至鶏卵大に達するものあり。病原によりて、その位置、大小を異にし、常に癢痒、灼熱を覺ゆ。經過は、輕きは數日、重きに至りては數年の歲月を要す。

するはうしやう 瑞寶章【名】勳章の一。章は珠玉と鏡との形にて飾り、綬は淡藍色の地に橙黃色の雙綵を施せるもの。一等より八等まであり。文官にも武官にも下賜せらる。圖は勳四等を示す。



(うやしうはみず)

するばうごうぐ 水防道具【名】水防に用ふる道具。

するばうふ 水防夫【名】水防に従事する者。

するはく 水伯【名】すじん(水神)に同じ。

するはく 衰白【名】身體衰弱して、毛髮の白くなること。

するはく 水馬齒科【名】(植)みづはく(水馬齒科)に同じ。

するばく 垂撥【名】花瓶を掛け、又は柱隠に用ひて、歌などを書くもの。形、琵琶の撥に似たり。

するはつ 翠髮【名】みどりのかみ。くろかみ。綠髮。翠髮。

するはつ 垂髮【名】髮を垂らすこと。ちらしがみ。たれがみ。

するはつ びやく 隨八百【名】「ずんはきはき」(氣隨)の略。氣まなる事を並べてたていふこと。體隨(氣)物の由來に、ずんはつびやくとは、何をいふ。「は。水邊。

するはん 水畔【名】水のほとり。みづぎ

するはん 水飯【名】昔時、乾飯を冷水に浸して食ひしもの。後世のは、柔く炊きぎたる飯を、冷水にて更に洗ひ白けたるもの。

するはん

の。みづめし。源氏、人人にすはんなどやうの物くはせ。又は判決すること。

するはん 推判【名】事理を推して、判斷するに同じ。

するはん 出飯【名】「佛」さんはん(生飯)に作りたる浅き器。形は方圓種種あり。中に水を盛りて、花を生け、または盆石などを置いためのもの。水盆。

するばん 推輓【名】車を後より推し、前より輓(ひ)きて進むこと。『左傳の襄公十四年の條に「衛君必入、夫二子者、輓之或推之、欲無入得乎」とあり。人を上へ薦むること。推舉。推輓(ひ)。

するばん 隨伴【名】つきしたがふこと。とも。隨行。

するはんきう 水半球【名】(地)かいはんきう(海半球)に同じ。

するばんご 水礬土【名】「化」水酸化アルミニウム。天然に產出するもの。明礬その他のアルミニウム化合物製造の主要なる原料たり。含水礬土礦。

するばら 水原【名】(地)「明治維新の初、越後國に置かれし縣。のち新潟縣に合す。越後國北蒲原(さか)郡にある町。郡の西南に位し、江戸幕府の陣屋を置きし所。新潟市の東南五里。

するひ 炊婢【名】炊事をなす下女。

するひ 水肥【名】みづご(水肥)に同じ。

するひ 水飛・水鏡【名】「鏡は汝(きみ)る義、その音正しくはは」粉末を、水にかき交すれば、細かきは浮び、粗きは沈む、その沈みたるを除きて、上水(みづ)をまた沈澱せしめ、乾して極めて細かき粉を得ること。漂去。

するび 粹美【名】純粹にして善美なること。

するび 衰微【名】衰へてかすかになること。衰微。零落。

するび 翠微【名】「爾雅に「山未及上曰翠微」とありて、疏に「山未及上、在旁、峻陀之處、山氣青綠色、故曰翠微也」とあり。山の色の形容。山の中腹の處をいふとも、遠山のものやもと薄綠色(はくろく)のこと。

するひつ

見ゆるをいふともいふ。蕪村「蚊帳つりて翠微つくらん家の内」

するひつ 水筆【名】種に心のなくして、その全部に墨汁を浸して用ふる筆。行書草書などを書くに用ふ。

するひつ 醉筆【名】酒に酔ひて、書畫をかくこと、又その書きたるもの。

するひつ 隨筆【名】何れとなく、筆のまにまに記しつけたる文書。漫筆。漫録。

するひん 水質【名】「十二律の一。陰曆五月の異稱。『は。水邊。

するひん 水濱【名】水のほとり。みづぎ

するひん 衰髮【名】衰へたる髪(かみ)の毛。

するひやう 水萍【名】うきくさ。『漂泊して定住なきことに譬へていふ。萍蓬。りて佛菩薩に供へ奉る瓶。形、種種あり。灌頂の時には、受戒者の頭上へその水を灌(く)ぐ。『佛光大辭典』龍神を封じて、水瓶に祈りこめたる故。』

するひやう 隨兵【名】隨行する兵士。『武家時代、將軍出行の時、武具を著け、兜はかぶらず、從僕に持たしめ、騎馬にて供奉警衛せし兵士。ずんへい。』

するふ 水夫【名】かこ。ふなこ。船頭。『船舶に乘組み、甲板部に所屬して、船舶及船舶の運用に關する雜役に従事する下級海員。』

するふ 水府【名】海底にありとする想像の都。浦島太郎、水府龍宮、龍德御外戚に傳へます。』

するふ 水府【名】(地)みづ(水府)の異稱。

するふ 炊夫【名】男のめしたき。

するふ 炊婦【名】女のめしたき。

するふ 醉舞【名】酒に酔ひて舞ふこと。

するふ 緩撫【名】なで安んずること。なぐさめいたはること。

するふう 水風【名】水の上を吹く風。

するふう 瑞諷【名】よき聲にてうたふこと。『龍曲、龍長「心耳」を澄せる玉文の瑞諷。』

するふく 推覆【名】覆は繰返してしらぶ

するふく

る義』罪狀をくりかへして推問すること。

するふく 推服【名】推重して従ふこと。

するふん 水部司【名】齊寧寮十二司の一。

するふん 水分【名】みづけ(水氣)に同じ。

するふん 燂文【名】燒刃のあや。

するふん 隨分【副】身分に従ひて。分相應に。『源氏うせにし女子のかはりとおもひよろこびはべりて、ずんふんに、いたはりかしづきはべりけるを。』

するふん 隨分【名】「佛」起信論所説の四覺の一。初地以上の法身菩薩の覺智をいふ。

するふん 水風呂【名】すふふ(水風呂)の轉訛。一代女「水風呂がおそいと急げば、腹に十月はよう御ざつたことと笑ふ。』

するふん 水風呂桶【名】すふふ(水風呂桶)の訛。用天皇入鹿、御分がその望ほどの目をむけば、こっちは水風呂桶の目を持った。』

するへい 水兵【名】海軍に屬する兵士の、戰闘に従事し、また防火防水運用等の事務に従ふもの。

するへい 水平【名】靜止せる水面の如く、平らかなること。『みづもり。水尺。水準。』

するへい 水萍【名】すふひやう(水萍)に同じ。

するへい 翠屏【名】翠色のついたて。

するへい 翠屏【名】又は若むしなどして、翠色を呈せる崖。『龍曲、江島、洞門開けて、翠屏顯れたり。』

するへい 衰弊・衰微【名】衰へつかること。衰微。

するへい 隨兵【名】すふひやう(隨兵)に同じ。

するへい かく 水平角【名】(數)「英、Horizontal angle」その二邊が水平面上にある角の稱(仰角、俯角に對して)。

するへい 水平距離【名】(數)「英、Horizontal distance」二點間の距離の水平

すねへいぶんりよく、水平分力【名】〔理
すねへいじりよく（水平磁力）に同じ。

ずるほうじ 瑞鳳寺【名】陸前國仙臺市にある禪宗の寺。伊達政宗・忠宗・綱宗三代の

近年支那より移植せしものにて、實は我が國のよりも大きくして、核小さく、味ま

睡眠言語(ゴソ)行歩(ギョウポ)、やむことを得ずして、多くの時を失ふ」
 三(佛)「睡は意

との意にて呼ぶともいふ。支那にては、武帝の時に始り、我が國にては、足利

市にある臨濟宗の寺。京都妙心寺の末寺。
應仁元年僧悟溪の創建。

すゐれい 翠嶺【名】みどり色のみね。

【名】郵便線路の一。船舶の種類如何に拘

すゑくち 末口【名】丸太などの、細き方の断面の直徑。【反物(勢)】の捲き又は疊みたる末の方の端。(元口(勢)に對して)

すゑくちもの 末口物【名】兩端を切斷せる丸材。たま(玉)參照。

すゑくち 末子【名】最後に生れたる子。末の子。ばつし。すゑ。

すゑくち 据籠【名】据えおくかご。おきかご。(古語) 能置、人の屏風に、小鳥のすゑくちかひて待たるを畫きて

すゑくち 据腰【名】腰を据ゑてゐること、又据ゑたること。腰つき。一代五男のすゑくち袖口廣く、すゑくち蹴出(勢)の道中

すゑくち 陶甌【名】こしき甌に同じ。(古語) 名義抄「甌、スエコシキ」

すゑくち 据火燵【名】燵を切りて作りたる火燵。置火燵に對して

すゑくち 据五徳【名】紋所の一。据ゑたる五徳を側面より見たる形のもの。

すゑくち 末座【名】はつき(末座)に同じ。義經(勢)の崎きとこより出て給ひて、少人のすゑくちにぞ給ひける

すゑくち 末様【名】末の頃。或期間の末の方。正統五代の中、後唐の末様なりければ

すゑくち 陶盤、陶皿【名】陶物(器)の皿。(古語) 延喜式「陶盤、スエザラ」

すゑくち 末重簾【名】重簾の一。日輪巻と星巻との間を特に繁く巻きたるもの。からしげと。本重簾に對して

すゑくち 末始終【名】末の末までの時。のちのち。ゆくすゑ。

すゑくち 末始終【名】「末四十より今三十」を見よ。「に同じ」

すゑくち 末衆【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末末【名】行く末。未來。子孫。後裔。目賤しき人。しもじも。下人。

すゑくち 据膳【名】膳を人の前に据ゑて食はしむること、又その膳。自ら勞することなく、おのれのために他人を勞せしむること。【物事を備へ設けて、これを用ひしめ、又は爲さしめんとすること。】

すゑくち 女子より男子を挑むこと。(俚語)

据膳食はぬは男の恥【句】女に慕はれて、それに應ぜぬは、男の恥なり。(諺語) すゑくち 陶全蓋【名】「人」すゑくち 陶甌【名】同じ。

すゑくち 末工【名】末のもくろみ。あとの計畫。浴源氏(勢)の末工に末工み、これぞ冥途の呼使(勢)なり

すゑくち 末方【名】末のころ。終らんとする時。源氏(勢)の末方すゑくちにめしよて。【末の方。末尾。源氏(勢)の末方すゑくちをいささか弾き給ふ】

すゑくち 陶杯【名】陶物(器)の杯(杯)。陶製のさかづき。説に、(源氏(勢)の土器(勢)の古語) いはねし「たかし山にて、すゑくち造ると聞きて」

すゑくち 垂髪【名】垂髪(勢)の裾の姿。(古語) 源氏(勢)は、五重の扇ひろげたる様に、こちたきすゑくちなり。【つけたるもの。】

すゑくち 据附【名】すゑくちすること。すゑくち 据附【名】「動下二他」据ゑて、そこに動かぬやう置く

すゑくち 末次城【名】まつえやう(松江城)を見よ。

すゑくち 末次平藏【名】「人」豪商。興善の子。長崎の人。豊臣氏及び徳川氏より朱印を受け、主として、安南と貿易を營む。正保四年歿す。はまたやゑ源田彌兵衛(勢)參照。

すゑくち 陶工【名】陶物(器)を造ることを業とする人。やきものし。(古語) いはねし「たづねたかしの山のすゑくちり物おひをぞやくとすゑくち」

すゑくち 陶部【名】古、陶器を製するを業とせしもの。萬葉「陶人(勢)のつくれる瓶、今日ゆきて明日と持ちき」

すゑくち 末摘花【名】「種」その花。末の方より摘取りて、紅を造るよりいふ「べにはな(紅花)に同じ。(古語) 古今人知れず思へばくるしけれなるの末つむはな(花)の色にいでなん」【書川柳の下がかりたる句のを集め記せるもの。四卷。】

すゑくち 末強【名】射る矢の目的に近づくまで勢の強きこと。

すゑくち 末生【名】果實などの最後になつたもの。うらなり。蜂鳥(勢)千代もへよたちかへりつ山城の駒にくらへし瓜のすゑなり

すゑくち 居根彫【名】鐫(勢)の目のほり方の一種なるべけれと詳かならず。曾我鶴の羽の大鹿矢に、居根彫の鐫をねぢすげ、少少射捨てて相附けたり

すゑくち 末野【名】野の末の方。のすゑ。拾遺(勢)の末野とてならしめしはしだかもすゑのに鈴のこゑならすなり

すゑくち 末子【名】すゑくち(末子)に同じ。源氏(勢)は故衛門の督の末の子にて

すゑくち 末松【名】「地」次條に同じ。すゑくちのまつやま 末松山【名】「地」陸前國宮城郡の海岸にありといふ丘陵。歌枕として名高し。今の同郡多賀城村字八幡の末松山(寶寺)の後方に在る丘陵なりとも、八幡の南なりともいひ、また陸奥國二戸(勢)郡一月(勢)町の北方なる波打峠なりともいふ。古今契りきなかに袖をしぼりつづ末の松山浪こさじとは

すゑくち 末の松【名】あゝの條下を見よ。すゑくちの松【名】末男【名】まつなん(末男)に同じ。

すゑくち 末葉【名】末の方に生じたる葉。うらば。玉三むさしのはわけゆく原のたかければすゑの露ぞ雨とふりける。【ばつ(葉)末葉(勢)に同じ。曾我五人兄弟雲を招くや天の帝の末葉の雲】

すゑくち 居箱【名】「佛」さんえはこ三衣匣に同じ。

すゑくち 末明【名】末答【名】うらば(末明)すゑくち 末判【名】くわあ(花押)に同じ。

すゑくち 末番【名】末判【名】川柳にて、淫猥なることをよみたるもの。「末番の句」

すゑくち 末番【名】末判【名】川柳にて、淫猥なることをよみたるもの。「末番の句」

すゑくち 末番【名】末判【名】川柳にて、淫猥なることをよみたるもの。「末番の句」

すゑくち 末番【名】末判【名】川柳にて、淫猥なることをよみたるもの。「末番の句」

すゑくち 末番【名】末判【名】川柳にて、淫猥なることをよみたるもの。「末番の句」

すゑくち 末番【名】末判【名】川柳にて、淫猥なることをよみたるもの。「末番の句」

すゑくち 末番【名】末判【名】川柳にて、淫猥なることをよみたるもの。「末番の句」

すゑくち 末番【名】末判【名】川柳にて、淫猥なることをよみたるもの。「末番の句」

すゑくち 末番【名】末判【名】川柳にて、淫猥なることをよみたるもの。「末番の句」

すゑくち 末番【名】末判【名】川柳にて、淫猥なることをよみたるもの。「末番の句」

すゑくち 末番【名】末判【名】川柳にて、淫猥なることをよみたるもの。「末番の句」

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)

すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)すゑくち 末人【名】おそしゅう(御末衆)



(包廣末)

すゑ

すゑへ 末方「名」末の方。はしの方。「古語」翌もとては君を思ひて、すゑへは妹を思ひて。

すゑまつけんちやう 末松謙澄「名」(人)政治家。文學博士。法學博士。舊福岡藩士。臥雲の第四子。青澤と號す。明治十二年英國に留學し、歸朝後、累進して逓信大臣、内務大臣、樞密顧問官に至り、子爵を授けらる。羅馬古法典の翻譯その他著書多し。大正九年歿す。年六十六。「季女」。

すゑむすめ 末女「名」末に生れたる女。すゑもの 陶物「名」やまもの焼物に同じ。すゑもの 据物「名」師のために備へおく物。「古」刀劍の利鈍を試むるため、土壇に据えおきし罪人などの死骸。「淫賢婦をいふ」。「元祿時代の隠語」。

すゑものし 陶物師「名」次條に同じ。すゑものつくり 陶物作。陶者「名」やまもの(焼物師)に同じ。「古語」和名陶者訓、須惠毛乃豆久流、黏埴爲器者」。

すゑものやま 据物宿「名」据物を置く家。一代身、身の置所なくして、すゑものやどに行きて、わけの勤め恥し」。

すゑもりじやう 末森城「名」尾張國愛知郡東山村字末盛にありし城。織田信秀の築きしもの。その歿後、その弟信行居りしが、信長に背きて殺されしより廢城となる。「能登國羽咋(ひや)郡末森村にありし城。天文中、土肥氏これに據り、後に前田氏の屬城となる。「末守城」。

すゑやき 須惠焼「名」筑前國糟屋(や)郡須惠村より製出する陶磁器。青磁白磁の血碗を主とす。徳川時代には、藩の血山奉行の管理に屬したり。

すゑる 増音器(英増音機)「名」オルガンの前面にあり、膝にて押せば、内部の笛列の蓋あきて、強大なる音を發するやうにせる装置。すゑる。

すゑゑ「名」たわの轉訛ならんか。「古語」紀實「久方の天てる神を祈るとぞえだもすゑゑにぬきはしてける」。

せ

【發音】「さ」行第四の音。子音sが母音eに結び附きて發す。その發音の方法位置に就きては、さ及びえの條下に説けるが如し。濁音ぜに就きては、同様にさ及びえの條下を見よ。「長音は、せえせえと書くとせーせーと書くとの兩法あれども、本書は前法に依りて、せせが一語の中にて、うふの直前に連なる場合には、せじよの長音に發音せらる。例へば、せ(爲)こころなど、せふけ(捷徑)せうらん(擾亂)の類。「四九州及び山陰北陸の一部等に於ける方言にては、せせを(え)の(え)に轉訛することあり。例へば、せんせ(先生)をせんせいといふ。錢をせんといふ。類。「畿内及び山陰山陽の東部に於ける方言にては、更にそのsを脱して、せへに呼ぶこと多し。例へば、「行きません」を「行きまへん」といふ類。

【字源】平假名せは「世」(漢音セイ、吳音セ)の草體より、轉體平假名せは「勢」(漢音セイ、吳音セ)の草體より出て、片假名せは「世」の略體、又、萬葉假名として、清音にては、上記「世」の勢の外、「西」(栖)「制」(勢)以上漢音セイ「施」(漢吳音共にシ、但し佛教語としての慣用音はセ)「是」(漢音シ「古音セ)「瀬」(漢音シ「何れも訓

【發音】「是」(吳音ジ、古音ゼ)等をセ、濁音に「是」(吳音ジ、古音ゼ)等を用ふ。せ 背脊「名」動物の身體のうしろ、即ち頸部より臀部まで。せなか。夫「久方のあまつそらは高けれどせをくくめてもわれは世に住む」。「身體のたけ。せい。せ。たけ。「せはひきき方なり」。「山のかげ。山のうしろ。圓圓材を挽割りたる板に存するもの。圓圓材の一部をさみ。圓圓材などの最上部の稜の。せみね。圓圓材りたる木材の凸き方。背に腹は代へられぬ「包」腹は、大切なる場所なれば、背に代へられぬをいふ。小なる苦痛に大なる苦痛の伴ふ場合、止むを得ず、その小なる苦痛を避けることをせず。「諺語」。

背より腹「包」前條に同じ。「諺語」背を盗む「包」身のたけを、わざと低く見ゆるやうにす。せ 瀬「名」川などの淺くて、渡るにたよりよきところ。水の淺きところ。淵に對して。萬葉川上に洗ふ若菜の流れきて妹があたりのせにこそよらめ」。「はせ(早瀬)に同じ。海の中を脈をなして流る潮。潮流。圓さしあたりの折又は場合。源氏うられしせもまじりたる。平家「たとひこの瀬にこそ漏れさせたまふ」と、つひにはなにか救免なくて候ふべき」。

【目的の場所。新古今世の中は何か常なるあすか川きのふの瀬ぞけふの瀬となる」。

せ 兄夫「名」女より兄弟又は夫など、すべて男を親しみて呼ぶ語(妹)に對して。「古語」萬葉なががせのつま吹く風の寒き夜にわがせの君はひとかぬらむ」。

せ 名「いね。米。「古語」萬葉にはとりのかつしかわせをにへすともそのかなしきをとに立てめや」。

せ 諾「感」さ然の轉。承知して答ふる聲。う。う。「古語」後讀親のまもりける女を、いなとも、せとも、いひはなてと、まをしければ」。

せ 狹「貌」せまきほどなるさま。「古語」道もせに「枝もせに」「水もせに」「國もせに」「庭もせに」「山もせに」「濱もせに」。

せ 歛「助數」地積の單位。歩の三十倍、又昔は三十六倍。せ 世「助數」せい(世)に同じ。世親子は「一世、夫婦は二世、主従は三世」。

ぜ 是「名」道理にかなひてただしきこと。(非に對して)是が非でも「包」ぜひとも、いやでもおうとも。じやがひても。是でも非でも「包」前條に同じ。今の是にして、昨の非なるを知る「包」今是非非を見よ。ぜ 助辭「是」の轉訛。語句の終止の次に添へて、その意を強むるに用ふる語。(俚語)「面白かつたぜ」「大騒だぜ」。

せ あう 世英「名」佛「一切世間における最上の英勝なる義」佛の尊稱。せ あみ 世阿彌「名」(人)くわんぜもさき(觀世元清)を見よ。せい 背脊「名」せ(背)に同じ。せい 生「名」うまるとのこと。いきてあること、又その人一生を養ひ、死を送る」。

生ある者は死あり「包」楊子法言に「有生者必有死、有始必有終」とあり「生きて居るものは、必ず死すべき時の来るものなり」。「諺語」生は難く、死は易し「包」生きながらへることは困難なれども、死は一旦の事なれば、却つて容易なり。生は死の始「包」聲聲(せ)を上げて生れたる時は、已に死の始なり。「諺語」釋迦如来誕生、生は死の始、無常は佛ものがれず」。

生を享(く)「包」生れきたる。生を儉(く)む「包」命惜しきに、死にて身を潔くすることをせず。生を視る「こ」死の如し「包」列子に出づ「心をつからし、意を苦むる所なきをいふ」。「諺語」。

せい 姓「名」生の義より出てしもの人

の生れし家すちを明かにするために、名の上に添へて用ふる名稱。支那にては古貴

ををわ るれるりら よゆや もめむみま ほへふひは のねねにな とてつちた そせすしき こけくきか おえういあ